



U/フログタイプ

生殖テクノロジーとヘルスケアを考える研究会  
Study Group on Reproductive Technology and Healthcare



報告書 Ⅹ  
インタビュー集  
当事者（出生者・親・ドナー・代理母）

発行 2023年2月

日比野由利

金沢大学融合学域融合科学系

920-1192 金沢市角間町自然科学2号館

Tel. 076-234-4908

Email. [hibino@staff.kanazawa-u.ac.jp](mailto:hibino@staff.kanazawa-u.ac.jp)

編集協力

桑澤さや華

金沢大学融合学域融合科学系研究員

## はしがき

この報告書におさめたインタビューは、感染症の拡大防止のため行動制限が課されるなか、ほとんどがZOOMを通して行ったものである。自分自身の研究テーマや関心を幅広く設定し、さまざまな関係者に対し、インタビューを依頼した。この報告書では、そのうち、当事者(親・ドナー・代理母・出生者)や当事者グループを対象とするものを紹介した。

近年、世界では、第三者が関わる生殖技術からの出生者に関して、大変興味深い現象が広がっている。自宅のできる遺伝子検査の普及である。人々は自分の祖先などに対する興味関心から、この検査を気軽に受ける。クリスマスプレゼントとして友人などから贈られる人もいる。その結果、自身が精子提供等で生まれてきたことを発見する人が後をたたない(あるいは、母親の秘密を知ってしまう人もいる)。また、その事実を知った上で、ドナーやドナーきょうだい探しに盛んに利用されている。

遺伝子検査の普及により、20年、30年前の過去が暴かれている。何十人ものドナーきょうだいを発見したり、母親の主治医がドナーだったことを発見したりする人もいる。

近年、you tube や podcast, spotify などの SNS で自身の経験を語る出生者が増えている。遺伝子検査の普及が人々に新しい経験をもたらしていることと無関係ではないだろう。

国内でも、同様の現象が今後広がりを見せるのだろうか? 例えば、Haplo2.0 という商品は、アジア圏で商品展開されており、「民族構成や祖先の移動経路を知る、あなたのルーツをたどれます」と人々の関心を惹きつけようとしている。日本は民族的な均一性が比較的高いと考えられているため、こうした検査に人々がどれだけ関心を持つかは不明である。しかし、ダイエット等を目的に体質を知るために遺伝子検査を利用する人は今後増えるかもしれない。そうなれば、日本でも今後、同様の経験が繰り返される危険性は目前に近づいている。

ZOOM で行ったインタビューを私自身の研究に生かすだけでなく、日本語で要約することによって、国内の研究者やメディア関係者、関心を持つ人々にシェアすることを企図した。

2023年2月

日比野 由利

## 目次

### LGBTQ の親

代理出産を希望するゲイカップルへのカウンセリング(Mr. Elliott Kronenfeld) .....	1
インドで代理出産を依頼した Gay Dad の経験 (Mr. Hans M Hirschi).....	8
カナダの Gay Dad (Mr. Austin) .....	15
アメリカの Gay Dad (Mr. Gerald Mahoney) .....	21
3 人の娘をもつゲイの父親 (Mr. Nick Yu He).....	26
セクシュアルマイノリティ男性の代理出産と子育て (Mr. Kyle Phoenix).....	30
写真家のゲイの父親と双子の息子 (Mr. Bart Heynen) .....	34

### 出生者

南オーストラリア州における出自を知る権利 (Dr. Damian Adams) .....	40
スピークアウト 精子提供で生まれた Myf (Donor Kinderen (Myf)).....	44
ドナー検索のボランティア (Donor Children(Matt)).....	47
スピークアウト ～ベルギーの Steph～ (Mr. Steph Raeymaekers).....	51
テリングとエンパワメント (Ms. Emma Grønbaek).....	55
自己セラピーの方法:ドナーからの出生者 (Mr. David Berry).....	60
ゲイの両親を持つということ (Eli Kessler) .....	66
ドナーは主治医だった (Ms. Eve Wiley) .....	71
23 & Me : 夫からのクリスマスプレゼント (Mr. Eric Mobley).....	77

### 精子ドナー

精子ドナーの経験(オーストラリア・ニューサウスウェールズ州) (Dr. Haydn Allbutt).....	82
---	----

### 代理母

代理出産は究極の人助け～イギリス最初の代理母として～ (Ms. Kim Cotton) .....	85
米国と英国における代理出産: 元代理母としての経験から (Ms. Alyssa Martin).....	90

### グループ

ゲイカップルの親たちのコミュニティ (Mr. Rodney Chiang-Cruise).....	96
ベルギーのサポートグループ (Donor Families(David)).....	101
～カナダの親のためのグループ～ (Mr. Vince Londini).....	106
子供は親の犠牲になるべきではない (Ms. Katy Faust).....	113

## Counseling for gay couples who want to be parents.

### 代理出産を希望するゲイカップルへの カウンセリング

Interviewee

Dr. Elliott Kronenfeld

#### Q. カウンセラーとしてのキャリアやバックグラウンドについて教えてください。

ヒューマンセクシュアリティの分野で PhD を取得した。そして臨床ソーシャルワーカーの有資格者として仕事をしている。セックスセラピーの有資格者であり、スーパーバイザーもしている。私生活では、ゲイとして、代理出産と養子縁組で家族をもった。

2000 年代の初めに生殖の分野で仕事を始めた。クリニックやエージェントのカウンセラーを経験した。世界中を旅行していろんな文化を研究した。人々はどのように第三者生殖を利用して家族を形成しているか。それぞれの国ごとに法的枠組みがある。

しばらくしてエージェントを辞め、自分で独立して臨床を始めた。たくさんの方の会議で講演もしたし、たくさんの方の生殖医療の医師とも仕事をした。ドナーと依頼親のスクリーニングにもかかわった。親になりたい個人や家族のためのカウンセリングも提供してきた。カウンセリングの目的は、親になりたい人に対し、代理出産などを依頼した場合の移動、社会的、情緒的問題についてちゃんと理解できるよう情報提供すること。これには、養子だけでなく、いろいろなタイプの生殖補助医療の利用を含んでいる。

世界中のカップル、国際カップルにサービスを提供してきた。現在は中国でのビジネスが増えている。それ以外

にはフランス、スペイン、アイルランド、UK、など。世界の生殖医療に関する法律は変化が著しく、法的親や子どもの市民権に関する情報提供を行うセッションもある。

#### Q. 代理出産を希望するゲイカップルに、どのようなカウンセリングを提供してきましたか？ その間、カウンセラーとしての取り組みに変化はありましたか？

これまで、15年に渡ってさまざまな分野でカウンセリング・サービスを提供してきた。

例えば、1)第三者生殖を依頼することを考え始めた人のためのイントロダクションのための1-2回のコンサルテーション。2)より集中的なミーティング(特に、カップルのどちらかが消極的な場合、どのように進めるか、丁寧なカウンセリングが必要になる。プロセスを通じて、カップル関係が強固であることが非常に重要だから。3)代理母と卵子ドナーを依頼することを決めた人に対する集中的なサポートカウンセリング。代理母や卵子ドナーとの境界を明確にすることや、コミュニティ、家族、子どもに対しどのように伝えるかの計画を立てるのを手伝う。彼ら自身のストーリー仕立てを作ることで、他の人に対して自信をもって話すことができる。

代理出産に関するカウンセリングの領域は、自分がこの仕事を始めてからだいぶ変わった。現在では、たくさんの方の知識がある。15年前は、クライアントはほとんど何も知らなかった(生殖自体についても)。今は、テレビ、映画、本などで代理出産について知ることができる。有名人も代理出産を依頼している。その結果、代理出産について人々の話題にのぼるようになってきた。今は、基本的なことを教えることに時間を割く必要はなく、セッションの中で誤った情報を正すことにもっと時間を使うようになった。

ゲイカップルは、前に比べてもっと情報を持っているし、希望をもってセッションにやってくる。家族を作るといふ将来像に対して、不安は少なく、むしろ強い期待をもっている。しかしそれはそれで、別の問題があるので、修正しなければならないが。

### **Q. ゲイカップルの親にとって、リベラルな地域に住むことは重要ですか？**

カウンセリングでは、ゲイカップルを病理化しないように、そして文化に対して敏感になるようにとても注意を払って行っている。カウンセリングでは、人々により選択肢を与えることにフォーカスしている。

クローゼットに籠るか、カミングアウトするかによって、住む場所を変えるカップルはたくさんいる。代理出産を依頼しようとするゲイカップルに告げるのは、社会に対してカミングアウトしないではいけないということ。子どもたちはとても正直だから、同性親についての情報は必ず知れ渡る。そのことで必ず対処しなければならない問題に直面するだろうということ。この種の問題については、カウンセリングの最初に議論する。

### **Q. ゲイとレズビアンのカップルが共同親権で子供を持つということは、最近でもよくありますか？**

事情はだいぶ変わってきている。結婚は、社会的文化的契約のことでその目的も変化してきている。

国によって事情が違う。米国では、同性婚が15年前に認められた。現在では、結婚しないで法的に家族をつくるカップルが増えた。スウェーデンでは、ゲイでもヘテロでも結婚しないで家族をつくるカップルがごく普通のことだ。

結婚と家族を作るとは別の問題だと思っている。

### **Q. これから代理出産で子供をもちたいと思うゲイカップルが一番心配していることは何でしょうか？ カウンセリング等ではどのようにアドバイスしますか？**

主に3つの問題を挙げるができる。

一つ目は、費用の問題。この問題を扱うには複数の方法がある。クライアントは家族をつくるためにいくら用意できるのかを考えなければならない。たくさんのクリニックやエージェントが、パッケージを用意している。そして、契約書には、余分な費用を支払わなくてもいいような条文が含まれているだろう。クライアントは、次のようなことを事前にしっかりと考えなければならない。例えば、二人とも遺伝的父親になりたければ2人の子どもが必要になるし、複数の子どもを持つ際に同じ卵子ドナーを使うのかどうか。何人の子どもが欲しいかによって必要な受精卵の数も違ってくるだろう。

二つめは、コントロールの問題。自分のクライアントのゲイカップルには、代理出産のプロセスにおいて、依頼者は最も重要ではない存在だということを伝えている。つまり、重要度について、次のような順番であるべきだ。

1)既に誕生している子どもたち、代理母、そして卵子ドナー、2)代理母や卵子ドナーの医学的リスク、3)代理出産で生まれる子ども、4)クライアント。

クライアントは、ギフトの受取人だから、運転手の席にすわるべきではない。これは、伝統的な方法で子どもを持つヘテロカップルの場合でも同様で、男性はコントロールをすべきではない。実際には、医師や代理母がコントロールするものだから、依頼親は、信頼するしかない。代理母になる女性は、妊娠が初めてではないので、男性は彼らを信頼する態度を身につけなければならない。

ゲイカップルたちは、代理母をコントロールしたがる。代理母の食事、仕事など。しかし女性はカップルのために仕事をしているわけではないということを知らなければならない。パートナーと協力的な関係を築き、密接な関係を持っていればそれがコントロールの感覚につながる。

三つ目は、不安のマネジメント。代理出産のプロセスが始まると、不安が次第に増してくる。これは、クライアントから親になることに対する導火線のようなもの。不安は、子どもが生まれると同時に去ってくれるものではない。実際には、子育ての世界へようこそ、となる。親は子どもをコントロールできないものだという現実を理解してほしいと思っている。

#### **Q. 子どもを持つことは、同性カップルの親密性にどのような影響を与えますか？**

異性愛の法律婚カップルは子どもができた後、親密な関係が急激に低下するということがよく文献などでは指摘されている。文化的な要素もあるが、一般的に言って、子どもを持つことで親密性が増すものではない。

ただ、第三者生殖で子どもを持つとする人にとって、それはよりバランスが取れたものになるだろう。というのもそれは非常に意図的なものになるから。だからストレスに対して、チームとしてどう協働するかについて心の準備ができています。

子育てをしているとき親密性は低下する。特に米国の文化では、子どもをまず優先する。代理出産の場合ならなおさら。カップルには優先順位を次のように置くことを勧めている。1)自己ケア、2)結婚、3)子どもたち。子どもを持つ目的は、子どもたちが去るようにすること。つまり、独立できるようにすることだ。多くの親たちが、親をやっているうちに相手との繋がりを見失う。そして、子どもが独立したあと

に離婚するケースも少なくない。このような事態を避けるために、優先順位を意識して、子どもたちの存在が親密性にとって妨害になる可能性を念頭においておく必要があると思う。

#### **Q. 同性カップルにとって、養子はポピュラーですか？**

養子もさかんに行われている。三種類の方法がある。1)国際養子(ゲイカップルにこの選択肢はない)、2)養子のエージェントを通じたプライベートな養子、3)里親制度を通じた養子。

それぞれの方法は全く別個のものだ。だからカウンセリングではその違いを明確にする。そうすれば、カップルは、自分たちの選択をはっきりさせることができる。養子を選ぶ理由は個人的な考えを反映している場合もある。例えば、人口増加を気にしている人、またはすでに生まれた子どもに対して家庭を与えることに関心がある人などがある。それから、自分が養子だったから、という社会政治的に強固な理由を持つ人もいる。養子の方が早いし安い、コントロールしやすいなどの理由で選ぶ人もいる。

#### **Q. 代理出産を依頼できるのは高所得のゲイカップルに限られ、所得が少ないゲイカップルは諦めますか？**

代理出産には高額な費用がかかる。だからよりたくさんのお金がある人が選択肢を持つ。経済的に困難な人はすべてのオプションを徹底的に精査する必要がある。例えば、卵子提供をシェアするとか、凍結卵子を購入するなどの方法がコスト削減になる。

Men Having Babies は、ゲイカップルの親を支援するプログラムを持っている。医師、エージェントとも協力関係がある。だから、その支援プログラムを受けるカップルに対してはディスカウントを提供している。

遺伝的つながりがどの程度重要なのかを考えるのも大事だ。ある人にとってそれは非常に重要なことであるし、ただ親になりたいだけの人もいる。これらのことを考えることで、目的を達成するためには何をすればいいかが特定できる。例えば、家を二番抵当に入れて新たにローンを組むか、節約するか、物価が安い所に引っ越しするか？ 家族から援助が期待できるか？ 等。

2人の子供を代理出産で持つのは高額な費用がかかる。一人を養子にするというのも費用を抑える選択肢の一つ。自分の場合は代理出産で子どもを持ったが、それ以外に養子を一人迎えた。カップルに自分の個人的な経験をシェアすることもある。遺伝的につながっていない子どもより、つながっている子どもの方が可愛いと感じるのではないかといった不安を和らげることができる。

#### **Q. 卵子ドナーは匿名が好まれますか？ それとも、open identity donor が好まれますか？**

オープンアイデンティティのドナーの場合、その境界線をどのように引くかということはカウンセリングの非常に重要なポイントとなる。(家族や友人から提供を受けた場合など)

エージェントを通して代理出産を依頼する場合、多くの方は匿名ドナーを依頼しがち。自分はカップルに対して卵子ドナーは決して子どもに対する権利を主張するようなことはないと言っけ負う。親子関係についての法的枠組みがあり、そのような状況は起こり得ない。

心理学者の立場からは、子どもにとってドナーの情報にアクセスできることはアイデンティティにとって重要だと告げている。卵子ドナーで自分の身元を明かしてもいいという人は結構いる。しかし、実際に会いたいとは思っていないことが多い。例えば、子

どもに重大な健康上の問題が起こったとき、ドナーは連絡を受ける。どのような状況で、どのように特定されてもいいのか、ドナーによって幅がある。どの程度の情報を受け取れるかは、子どものアイデンティティ形成にとって重要だ。

例えば、自分の娘の場合は、卵子ドナーの名前を知っていて、彼女の写真を持っている。それがあって、ドナーとどこが身体的に似ているか、把握できる。養子の子どもは、モルトバの孤児院で2年間過ごしてから、我が家に来た。娘の場合とは違って、彼の場合は先祖が誰か、全くわからない。それは彼にとって困難なことだ。

養子の場合でも、推奨しているのは同じこと。可能なら最初のうちに遺伝的親とコネクションを持っておくことだ。そうすれば子どもは自分が誰かを理解できる。出自を知ることが、人のアイデンティティにとって根本的な問いであるという影響力を決して低く見積もってはならない。

#### **Q. 子供が、将来、卵子ドナーや代理母に会いたいと言った場合、ゲイカップルの親はどのようにサポートしますか？ 出自を知る権利について、どのように考えていますか？**

概ね、代理母とは継続的に関係を保っている。子どもも代理母と近い関係を持っている。例えば、自分の場合には、家族の休日の日には、代理母と代理母の娘と過ごした。代理母の娘と自分の娘はとても仲がいい。交流の程度や頻度については子どもたちが成長するにつれて親同士で調整する必要があるだろう。誰のお腹から生まれたの？ というのは、子どもたちがいつも知りたいことだ。卵子ドナーの関与はもっと少ない。だから卵子ドナーとの関係はあまりない。

カップルには、子どもにはオープンに話すようアドバイスしている。それ



は、子ども自身のストーリーだ。どうやって生まれてきたのか。など。今はそれについての子ども向けの素晴らしい本がたくさん出ている。

**Q. 一般に、異性カップルとくらべるとゲイカップルの場合は、代理母との交流により積極的だと言われていますが、それは正しいですか？**

そのとおりだと思う。それには理由がある。ゲイカップルが代理出産を依頼しようという場合、何度も不妊治療を失敗してからのことではない。ヘテロカップル場合、ものすごいトラウマと喪失の体験がある。何度も体外受精をやって失敗し、流産も経験する。そこには深い絶望がある。

女性のパートナー(ヘテロないしレズビアンカップル)が代理出産を依頼する場合、第三者を依頼しても、母親としてのアイデンティティは失われないということを理解してもらえるよう援助することが重要だ。そして、男性のパートナーは、無力感を覚えていることが多い。それとは反対に、ゲイカップルは、喜びや希望、ワクワクの気持ちでプロセスに参加する。この違いは、代理母と依頼親の関係にも反映されるのは明らか。

マッチングの際、そのカップルにとってベストなシナリオは何かを議論することは大事。子どもが生まれたあと、どんな人生を望むのか?などの問いを精査する。例えば、代理母と近くに住んでいる場合、代理母は子どもにとっておばさんのような存在になるのか?もしそうなら、カップルは代理出産のプロセスの間、関係を自然ななりゆきにまかせるのがいい。出産後、カップルは新生児の世話を圧倒され、ヘトヘトになるものだとすることを代理母に告げておくことも必要。そのため、出産後、一般に代理母と依頼者の関係はややテンションが下がる。

出産後、代理母をどのようにケアしたらいいかを知るのに、カウンセリングは役立つ。代理母は出産後、依頼親とのつながりが失われたと感じることはありうる。代理出産は“究極のベビーシッティング”だといえる。代理母は子どもを手元においておきたいわけではないが、自分は何か特別なことをしたと思っている。だから、もし関係性がポジティブなら、出産後の悲嘆は、依頼親との結びつきの証だといえる。

**Q. 育児についてはどのように分担されていますか？**

このことは、カウンセリングの最初で議論することだ。大抵は、どちらがより稼いでいるか、どちらか一方が主要な育児の担い手となることを望んでいるのか、家族外の人たちの助けが得られるのか、などを考慮する。

**Q. 代理出産で生まれた子供にとって、家庭の中と外では、価値観が180度違う場面に直面するケースがありうると思います。どのように対処しますか？**

研究によれば、子どもたちは、問題なく成長している。そのことを伝える自分なりの方法を見つけている。そのため、親は子どもの世界から身を引く必要がある。もし、家庭の中で代理出産が普通のことになっていたら、そのことを議論したり説明したりするのに問題はないはずだ。

親(特に保守的な地域に住んでいる人)にとって重要なことは、小児科医、幼稚園の先生、小学校の先生などに話しておくことだ。そうすれば、子どものことをよく理解してくれる。

年齢にあった本を渡してくれたり、クラスでいろいろな家族についての話をしたりしてくれる。このようなサポート体制、ネットワークを作ることは非常に重要だ。

**Q. 遺伝的父親はどちらなのかについて、いつ頃、どのようにテリングをするのが一般的ですか？**

カップルと医師以外の人に対して、その情報をだれに渡すかは、カップルが決めることだと伝える。というのは、誰か周りの人が不適切な質問をしてくることもあるかもしれない(どちらが遺伝的父親なの? とか)。だから最初から境界をはっきりさせる必要がある。

子どもが産まれることについての一般的な説明をするあいだ、子どもたちが自分でその質問をしてくるのを待つのがよいと親にはアドバイスしている。もし子どもたちが聞いてきたら、そのときに答えればよい。子どもが聞いてきたことだけに答えればよいとアドバイスしている。子どもの質問に答えて、それから、まだ他に聞きたいことはある? と聞けばよい。真実を伝えること、そして、子どもたちが聞いてきたことに対して十分な情報を与えてきちんと答えることが大事。

**Q. 同性カップルの子供たちが、学校生活などで差別を経験したりストレスを覚えたりした場合に、カウンセリングなどサポートを提供する機会はありますか？**

親に言っているのは、子どもたちは必ず学校でいじめられたりからかわれたりするだろうということ。ゲイの父親を持っているということが、その理由になる。子どもに、自分の家族について他の子どもにどのように話すかを教えておけば、この問題を和らげることができる。例えば、家での会話と、外での会話を区別することを教える。“あなたはこの方法で生まれたのだから、他の子どもたちよりもっとたくさんを知っている。友人は好奇心でいろいろなことを質問してくるし、丁寧に説明しなければ理解できないよ”と。このように教えれば、子どもたちは安心する。これらのことを教えるの

は、親の仕事だ。子どもたちが希望する時に親は説明する義務がある。

もし、からかいが発生したら(それがどのようなものであれ)、相手の親のところへ行って話し合うことを勧める。他の家族が、ゲイの親の子育て能力ついて間違った見方を持っているとするなら、自分たち家族の権利擁護が必要になる。

**Q. 同性親を持つ子供たちのグループなどはありますか？ これらの子供たちが交流する場はありますか？**

オンラインで、たくさんのサポートグループを見つけることができる。例えば、Gay Dads というキーワードで検索すれば、数百もの結果が表示されるだろう。カンファレンス、プレイグループ、その他の集い。ゲイの親たちが自分たちの心配ごとをシェアし、違いにサポートをシェア。そして子どもたちを連れてきて一緒に遊ばせることもできる。

ゲイの父親のためのグループでは、代理出産だけでなく、子どもをもつゲイの父親は誰でも参加資格がある。

**Q. 体細胞から配偶子が作成できるようになった場合、同性カップルの間で、普及すると思いますか？**

最近、英国心理学会でそのことについてプレゼンテーションをした。倫理的な問題は脇に措くとして、そのような技術の発展は、問題の核心を必ずしも捉えていない。というのも根本的な問いは、自分は親になりたいのか? という事だから。だから、“どのようにして”ということは、まったく別の問題。最初の立ち位置は、自分は何者か? そして、自分の人生経験として何が欲しいのか? もし家族を作ったなら、その家族はどう見えるのか?などを考えていく。

両方の親と遺伝的につながった子どもを作るという考え方は、ヘテロカップルにとっては当たり前のことだが、ゲイカップルにはそのような考え方はない。だから、遺伝子や生物学的なつながりは、そのカップルにとってどのくらい重要なのかを精査することが重要。目的は何なのか？ ある人は遺伝的つながりを求めるが、別の人は、幸福感や健康な子どもが欲しいだけ。カウンセリングが始まる前にはこうしたことをきちんと考えていない男性たちが多いが。

**Q. 子宮移植について: 子宮の提供を受け、自分で子どもを産みたいゲイカップルはいますか？**

スウェーデンで行われた最初の研究のとき、患者に対してカウンセリングを実施したことがある。そして今も自分の子宮を提供したクライアントを担当している。子宮移植は科学の進歩についてのエキサイティングな領域だが、男性の身体に子宮を置くだけでは実現しない。女性ホルモンも打たなければならない。だから、現時点では遠い将来のことだし現実的ではないと思う。そして、男性の多くは妊娠に興味がない。子どもを産むときの痛みを経験したくはないと思っている。それは男性にとっては、サイエンスフィクションに近いものだ。

**Q. コメント**

文化の影響は非常に重要だと思う。文化がジェンダーや概念を規定している。ゲイの男性や、男性にとってそれがどういう意味を持つかといったようなこと。米国では、リベラルな都市と、保守的な都市とでかなり違っている。それぞれの場所で交わされる会話は全く異なっている。国によっても、彼らがどの文化から来たかによって

も、カップルのあり方は全く異なっている。

(2021年9月)

**Dr. Elliott Kronenfeld**

公認のソーシャルワーカー及びセックスセラピースーパーバイザー。専門分野はセクシャリティ、不妊、代理出産/養子縁組/里親、家族形成など多岐にわたる。自身はゲイであり、代理出産と養子縁組による二人の子どもを持つ。

## Surrogacy journey of gay father who opted for surrogacy in India.

### インドで代理出産を依頼した Gay Dad の経験

Interviewee

Mr. Hans M. Hirschi

#### Q. プロフィールを教えてください。

スイスで生まれ、一定期間、米国に住んでいたが、学校を終えるためにまたスイスに戻っていた。その後、銀行員としてキャリアを積んだ。1992年からスウェーデンに住んでいて、スイスとスウェーデンの二重国籍を持っている。2001年に今の夫と出会い、現在、結婚して16年目になる。代理出産で生まれた息子の Sasha がいる。

語学の教師をしていて、その後、フィクションの作家となった。それは、育児休暇がきっかけ。スウェーデンでは、両親が合計で1年間の育児休暇を取れる。ゲイカップルの場合は、異性カップルに比べて育児休暇を平等にとる傾向がある。だいたい半々くらいずつ取得することが多い。

当時勤めていた会社の CEO と顔を合わせて仕事をする機会はなく、仕事を辞めて最初の予定より長く育児休暇をとることになり、物語を書き始めた。最初の小説を2週間で書き上げ、それ以来、フルタイムで作家をしていて、副業でコンサルタントとツアーガイドをやっている。

今まで23冊の小説を出版し、1990年代からブログも公開している。自分と夫が、最初に親になるための旅に乗り出したとき、その時に考えていたこと、理由づけ、感情などを書き留めておくことが大事だと思った。ほぼ毎日のようにブログを更新していて、フォロワーもたくさんいる。このことは、同性婚やゲイカップルによる家族形成

の増加に関する世界の動向を映し出すものだ。

ゲイカップルが養子縁組みをすることは西欧社会の大部分では長い間行われていたが、ヨーロッパの多くの国では違法だった。そしてスイスではごく最近、法改正がなされてゲイカップルの養子縁組が可能になったばかり。スウェーデンで最初の養子をとったゲイカップルの子供には、心臓疾患があった。それは異性カップルなら希望しない子供だった。

自分と夫が、家族を作りたいと思ったとき、養子への道は閉ざされていたので、それ以外の選択肢を探すしかなかった。遺伝的どうのこうのということ、気にしていなかった。

#### Q. 子どもを持ちたいと思ってから、インドで代理出産を依頼し、帰国するまでについて簡単に教えてください。

自分は1967年生まれで、夫は1979年生まれ。年齢差があるので、パートナーが親になる心の準備ができるまで待たなければならなかった。自分は元から親になりたいと思っていたし、子供がいない痛みは耐えられないと度々思っていた。特に、経済的に余裕ができてからは、ますますそうだった。ずいぶんまえから子供の名前も考えてあった。最初の子には、Sasha とつけよう。ミドルネームは Daniel Suria だ。これは、夫とインドの代理母に因んでいる。

2009年10月頃、夫とともに、家族作りをスタートさせた。全てのオプションを検討した。しかし、自分の年齢のせいで、スウェーデンで養子を取るのには難しいとわかった。そもそも、スウェーデンでは、国内養子は年間0-1例くらいしかない。法律は、生物学的親子の結びつきを固持しており、ネグレクトされた子供を生物学的親のもとに返して死亡したケースも複数報告されているほどだ。それ以来、法律が改

正され、里親として養子をとることができるようになったが、ソーシャルワーカーによるサポートの欠如のせいで、そのようなケースは実際には極めて稀だ。

国際養子に関して、スウェーデンは常に先陣を切ってきた。1950年代以降、韓国から国際養子がなされてきた。その後、1970年代以降、チリから、その後ケニアやロシアからの国際養子が行われた。スウェーデンの国際養子は、ペンテコステ派の教会が主催する私立のエージェントによって行われていた。

彼らは、反ゲイで知られていて、もし自分たちが国際養子を取りたいと思っても、大きな抵抗にあうだろうと予想できた。現にその当時、スウェーデンのゲイカップルで、国際養子を許可されたケースは存在しなかった。それで、国際養子も見込みがないと結論づけた。

元々は、代理出産を依頼しようとは思っていなかった。里親を必要とする子供のサポートをしたいと思っていたので。しかし、里親に申請しようとしたとき、ホモフォビアに遭遇した。それが非常に大きな障害になったものの、2010-11年頃、許可がおりて、待機リストに登録することができ、子供とマッチングされるのを待つことになった。

ついに、2011年12月、里親を必要とする子供がいると連絡を受けた。ペルー出身の5歳の男の子で、生まれた時から親から性的虐待を受けていた。彼を引き受けることに同意した。しかし、ソーシャルワーカーが注意義務を怠っていたことが明らかになった。息子がゲイカップルの家族に引き取られると知った実の母親が反対し、結局、その子を里子にとることはできなかった。その子を里子にもらう話を得るまで、4-5ヶ月も費やしていた。自分は子供を迎えるために既に会社を退職していたのに。その時、自分の世界が崩壊

していったのを感じた。そしてとうとう、代理出産を依頼するという最終的な決断に至った。インドで代理出産を依頼できるのは45歳までだということ思い出して、焦った。

自分と夫は、ウェブサイトを検索して、ボンベイにあるエージェントを見つけた。そのエージェントは20年もの経験を持っていて、評判も良かった。そしてそのエージェントに直接連絡を取った。その時、全てスカイプを通して行った。スウェーデンでエイズや性感染症のテストを行い、プロセスを進めることを確認した。

その時わかったことだが、夫は、父親になることにそれほど熱心ではなかった。なので、まずは自分の精子を使用することにした。インドに渡航して、精子を採取した。インドを訪問したことは、とても奇妙な経験だった。

その後、卵子ドナーを選んだ。インドでは、卵子ドナーと代理母は別の女性だ。それは、代理母が子供に愛着を持つのを避けるため。ウクライナや南アフリカの白人の卵子ドナーを選ぶこともできたが、インド人の匿名ドナーを選ぶのが一番安い方法だった。自分と夫が調べたところでは、スウェーデンでは、身長が高い方が、社会的に成功する可能性が高いということだった。だから、卵子ドナーも身長175cmの女性を選んだ。このドナーはあるエージェントの特別パッケージで見つけたものだ。

当時のインドでは匿名ドナーだけが許可されていた。何枚かの写真とプロフィールは付いていた。ドナーはインド人の祖先を持ち、高学歴だとわかった。だから、息子はインド人とのハーフになる。

#### **Q. インドの代理母や彼女の家族と会いましたか？**

妊娠はしっちゃかめっちゃかだった。代理出産は普通の妊娠と違うし、

エージェントからの情報は過剰だった。2週間後、妊娠していたのは双子で、そのうち一人は徐脈だとわかった。グーグルで調べたところ、それは致命的なことだと知り、不安だらけになった。しかし研究によると、それはかなり広くみられることで、妊娠初期の場合、検出されないままのことがほとんどだということだった。幸い、Sashaは無事に成長し、たくさんの写真が送られてきた。

代理母はとても小さな女性だったので、健康上の問題がたくさん生じた。評判の良いエージェントを選んだので、代理母はよくケアされ、良い病院で扱われた。代理母は子宮頸部が短く、流産のリスクが高かった。だから妊娠6ヶ月で、彼女は病院に入院することになり、最後の1ヶ月はずっとベッドの中で過ごした。Sashaは8ヶ月のとき、帝王切開で生まれた。

代理母、彼女の夫、代理母の3人の子供たちにも会った。それで思ったのは、彼女はとても小さいので、西欧人の大きな子供を産むのは無理だったのではないかということだ。帝王切開は代理出産ではごく普通のことだ。

代理母はとても丁寧に扱われたと思っているし、代理出産の報酬によって、彼女と彼女の家族の生活は劇的に変化したと思う。彼女は子供に良い教育を与えられたらろうし、多分、家も買っただろう。

#### **Q. インドの慣習や文化の違いにフラストレーションを感じたり、戸惑ったりしたことはありましたか？**

自分(の代理母)が妊娠している間、保守的なロビーグループからインド政府へ強い圧力がかかっていた。2012-13年頃に、複数のスキャンダルがあり、政治論争にまで発展した。

この頃、ノルウェー王室の王女のスタッフが夫とともに代理出産を依頼する目的でインドに渡り、子供を連れて帰れなくなったことが報じられた。子供が現地で身動きが取れなくなり、こみ入った問題を解決するために王女自身がインドに渡ったと言われている。<sup>1</sup> 2012年、インド政府は、ゲイカップに対する代理出産の提供を禁止した。自分がビザを受け取った後、1週間かそこらのことだ。しかし、この法改正について誰も教えてくれなかった。その年の終わり頃、やっとそのことを知った。ゲイカップルが関わったケースのスキャンダルが続き、違法になったとのことだった。

妊娠初期の興奮の後、自分たちが正しいことをしているかどうか、懸念が生じてきた。それに加えて、Sashaの監護権を得ることができないのではないかとの恐れも生じてきた。彼が生まれたとき、医療ビザはもはや発給されていなかったのだから、代わりに旅行ビザでインドに渡航しなければならなかった。

インドに到着して2日後、Sashaが生まれた上品な病院を訪問した。2時間後、Sashaが連れてこられ、写真を撮ったりした。SashaはすぐにスタッフにICUに連れ戻された。その夜、自分と夫は病院に泊まった。Sashaの代理母は遺伝的母親ではなかったのだから、法的に言えば、インドの枠組みでは彼女は存在しないのと同じだった。遺伝的な父親として、自分はSashaに会いに病院に行けたが、夫はできなかった。

Sashaが生まれて36時間後、息子は自分と夫の手に委ねられ、その次の日に退院した。その前に、エージェントが手配した写真家がやってきて、スウェーデンのパスポート用にICUのなかで息子の写真を撮っていった。そして、フォトショップでチューブやワイ

<sup>1</sup> Norway princess in secret India trip to play nanny. Reuters DECEMBER 4, 2012

ヤーを消して、目を付け加えた。自分が遺伝的父親だと証明するために DNA テストを行った。その後、法的プロセスが開始された。

### Q. 子どもが産まれてからの法的手続きはどのように進みましたか？

スウェーデンには代理出産法は存在しない。だから違法ではないが、法的にはグレーゾーンだ。法律は時代遅れだ。インドでは、子供の母親は存在しない。スウェーデンでは、出産した女性が親だという法律があるだけ。夫がいる女性が出産したら、彼が父親と推定される。

最終的に、代理母の夫に Sasha の父親ではないという宣誓供述書にサインしてもらった。そして、代理母には子供の親権を放棄するサインをしてもらった。

インドでは既にゲイカップルは違法になっていたのだから、Sasha を出国させるためには賄賂を効果的に配らなければならなかった。インド連邦政府の内務省にレターを送り、出国を許可するレターに個人的にサインすることを求めた。ボンベイの警察署長にも賄賂を贈った。彼らは自分たちと大臣の間にいる全ての役人に賄賂を払わない限り、出国までに3ヶ月はかかるだろうと告げた。最終的に、要求された金銭を支払い、2-3週間で許可状をもらうことができた。考えてみると、賄賂に支払った金銭は、代理母に払った金額をはるかに超えていた。代理母は、夫の給料の10年分を受け取ったというのに。

彼女は代理出産を2回やった。だから、夫の給料の20年分に相当する額を受け取ったことになる。また当然のことだが、賄賂の支払い方法について教示してくれたエージェントのスタッフにも支払いをした。

スウェーデン側の手続きは、スムーズでポジティブな経験だった。Sasha は24時間以内に市民権を取得し、パスポ

ートもその後すぐに発行された。スウェーデンを出発して5週間後、Sasha とともにヨーロッパに帰ることができた。ヨーロッパについての途端、空港ですぐさま聞かれたのは、母親はどこにいるのか? ということだった。法的な観点から見ると、空港に到着した時、Sasha には法的な後見人はいなかった。自分が法的な後見人になるのに2ヶ月かかり、夫が養子にするのにはその後、6ヶ月かかった。スウェーデンでは2004年から同性カップルが共同で養子をとることができるようになった。息子にはスイスの市民権も与えたかったが、スイスには代理出産を禁止する法律があり、それを文字通り実行するとスイスの法律に違反したことになる。だからスイスの法律家を頼った。スイスの市民権は、自分の生まれ育ったところに結び付けられている。自分の故郷は比較的にリベラルだったので、法律家の助けを得て、2年後に息子の市民権を得ることができた。

結論からすると、もしあることがスウェーデンでできるなら、同じことはスイスでもできるはずだと思う。興味深いことに、スイスではSashaの法的後見人として代理母の名前が載せられている。しかし、近い将来、これを変えたいと思っている。

自分たちは、合計17個の凍結受精卵を持っていたが、インドの法改正により、プロセスを続けることができなくなった。インドの代理出産は現在とても制限されていて、自分で子供を産みたくない金持ちの女性だけが利用することができる。自分と夫は、翌年、ネパールで代理出産を試みたが、現在その可能性も閉じられた。インドから運び込んだ受精卵はネパールで失われた。その後、タイでも代理出産の可能性を求めた。

現在、養子の可能性を再度、探っている。夫はソーシャルワーカーなので、現在、自分の地域で養子サービスの一部に関わっている。養子を再度申

請しようと思っっている。来週、養子を取るのに適格かどうか、調べるつもり。来年のどこかの時点で、もしかしたら養子をとることができるかもしれないが、今は不透明だ。

### **Q. インドで代理出産を依頼して、よかったと思うことは何でしょうか？**

評判の良いエージェントを選び、代理母もとても良い扱いを受けていた。だから自分はなにがしかの貢献をしたと思っっている。代理母に会い、互いに感謝の気持ちを表した。しかし、そうはいつてもやはり、自分たちは正しいことをしたのかどうか、いまだに葛藤がある。

自分は息子を可愛がっているが、ホモフォビアに由来する反代理出産論者が特権的だの何だのと批判してくるかもしれない。自分たちの立場はかなり弱いものだと感じている。ゲイたちは、親になる権利を長い間持っていなかった。そのことで、友人を失うこともあったが、1980年代を生き抜いたことを幸運だと感じている。それでも、自分たちがやったことが正しかったかどうかという心の葛藤は、しつこく残っている。

2013年にBBCのインタビューを受けた。彼らは、その場にラディカルフェミニストがきていることを言わなかった。その女性は自分のことをこっぴどく非難した。自分は、まるで代理母を搾取する奴隷ハンドラーであるかのごとく見なされた。しかしこれは、代理出産は不必要であるという西欧社会のマインドセットだ。自分の代理母はとても良い扱いを受けていたし、多額の金銭を得て、家族の生活は劇的に変わった。代理母は搾取されているとは思わない。

### **Q. 親としての経験は人生をどのように変えましたか？**

子供を自分の腕の中に抱いた瞬間から、それは選択ではなくなる。親になることを決意するまでは、それを望むか、望まないか、選ぶことができる。そのいい面、悪い面を検討することもできる。しかし、子供がそこにやってきた途端、それは選べるようなものではなくなる。

もちろん、自分と夫はSashaを迎えたことに興奮していて、後悔はない。しかし、やらなければならないことはたくさんある。それはいいことも悪いこともある。例えば、Sashaはよく嘘をつく。最近も、店からファンタのボトルを盗んで、スクールカウンセラーの世話になった。カウンセラーは、Sashaは非常に成熟しているので進級は可能だろうとのことだった。カウンセラーからのその電話に非常に安堵した。

父親になることは、素晴らしい旅で、自分がやるはずのものだったと思っっている。Sashaの出生について、自分は、この経験を必要としていた。子供の目を通して再び世界を見るという経験をもらった。それは再発見のプロセスだ。子供が、人として成長して、発展していくのを目撃するのは最高に素晴らしい経験だ。

### **Q. 代理母や卵子ドナーとどのような境界を作ることを望みますか？ 遺伝子検査などを使って、半きょうだいや、卵子ドナーなどを探すことに興味がありますか？**

将来、Sashaの遺伝的きょうだいを見つけることができるのを期待してDNA検査を受けた。

### **Q. 子どもに代理出産のことは話していますか？ どのように受け止めていますか？ 何か質問はしてきますか？**

自分と夫はSashaに対して全てオープンにしている。卵子ドナーや代理母の写真も見せている。彼の名付け親の一人はインド人だということも話して



いる。彼の出生に秘密はない。何でも、オープンにしている。Sashaは時々質問してくることがある(半年に1回くらい)。しかし、自分のことはスイス人やスウェーデン人だと思っているようだ。

Sashaのために、なぜ自分たちが代理出産を依頼したのかを説明するための本を書いた。それは、彼のためだけに書いたもの。それから、自分のブログを読んで、アドバイスを求めてくる人のためにも、もう何年もの間、その本は役に立っている。現在、amazonで本を売っているが、最低価格しかつけていない。インドでもネパールでも、代理出産は禁止されたので、今はそれほど重要な本ではなくなっている。

#### Q. サポートグループに参加していますか？

スウェーデンのゲイ解放のための組織があるが、それほどサポートティブではなかった。ヨーテボリのサポートグループで歓迎されていると感じたことはなかった。

ゲイとレズビアンは、この問題に関して、実際のところ同じ立場ではない。レズビアンはそのための手段を持っているが、ゲイ男性にはそれがない。

アプローチしたサポートグループのほとんどが女性の参加者で、そこでは激しい嫌悪感を示された。代理出産はフェミニストの概念で奴隷と結び付けられている。自分たちはそのようなグループには参加しないと決めた。

よかったのは、スウェーデン社会はとてもオープンだったこと。ゲイの親だからという理由で、路上で差別的なコメントを言われたことは今までない。男性は子供を育てることができないと信じている善意の年配女性から、注意されたことはある。ゲイの父親であることより、父親になることの方がはるかに難しい。特に、ヘルスケアシステムは母親だけにフォーカスしてい

る。一般に、子供を産むまで、助産師がずっと寄り添ってくれる。妊娠しない父親の場合、自分をこのシステムに順応させる必要がある。

LGBTQフレンドリーだと認定されたクリニックに行ったが、実際にはそこで父親差別(fatherphobia)の経験をした。それは、ゲイだから差別されたのではなく、男が子育てしているということに対する差別だった。そのような差別があると認識した。Sashaが6歳になって、学校のヘルスケアシステムに移行したのでほっとした。

自分たちがゲイだという事実が、親としての資質に問題を引き起こすことはないと思う。他の人たちと同じように、もし子育てで何か問題があったとき、友達や家族にアドバイスを求める。しかし自分の母親はもういないので、良いアドバイスをくれる親族の女性らに相談する。自分たちは、このネットワークを利用している。

スウェーデンでは、ゲイに特化したサポートグループはもはや必要とされていない。スウェーデン社会はリベラルだから。

#### Q. その他、コメント

スウェーデンで法律がないことは、ある意味、実際にはやりやすいこともある。例えば、インドで出会ったデンマークの依頼者は、デンマークに入国するために6ヶ月間も待たなければならなかった。

スウェーデンでは、国際養子は、韓国、チリ、ケニアから親から子供を引き離すものだとして非難を受け、停止になった。現在、養子になった子供達が、自分たちが誘拐されたかどうかを知りたがっており、そのことについて、スウェーデン政府が大々的な調査を行っている。

(2021年11月)

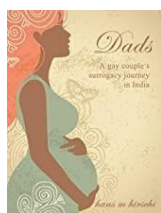
### **Mr. Hans M. Hirschi**

スウェーデンを拠点とする作家、トレーニングエグゼクティブ、LGBTの権利活動家。スウェーデンとスイスの国籍を持つ。

現在は夫 Alex、インドでの代理出産によって生まれた息子 Sasha とともにスウェーデンのヨーテボリで暮らしている。

著書:

Hans M Hirschi 2014 Dads: A gay couple's surrogacy journey in India, Yaree AB.



Hans M Hirschi 2017 Last Winter's Snow, Beaten Track Publishing.



## Gay Dad in Canada.

### カナダの Gay Dad

#### Interviewee

#### Mr. Austin

#### Q. ご自身のこと、仕事と家族について教えてください。

生まれてからずっとカナダのアルバータ州に住んでいる。自分は機械エンジニア、夫は土木エンジニアとして働いている。付き合い始めて13年、結婚して5年になる。自分はずねに家族をつくりたいという気持ちが最優先で、夫との最初のデートの際にも伝えたほどだった。現在私たちには1歳半になる娘がいる。娘の Maya は提供卵子で生まれた。つまり、ドナーと代理母は別の女性だ。

自分は代理出産について話すのが楽しいし、「二人の男性が赤ちゃんを産む」というトピックは多くの人を引き付ける。ソーシャルメディアを使ってたくさんの人たちとつながり、LGBTの家族がいるという事実を広めようと思っている。いまま機械エンジニアとして働いていて、COVID-19 以来ずっと在宅勤務している。私と夫は同じ会社で働いているので、ともに家にいて、ファミリーライフを満喫できている。自分は副業として Amazon でも4年ほどビジネスをしている。アマゾンマーケットプレイスで売れ行きが良い商品を見つけ、これらの商品をさらに良いものにするためのクールで革新的な方法を考える。そして海外（主に中国）から仕入れ、米国に送って販売する。これらのプロセスをリモートで行っている。娘がデイケアにいる午前中に仕事をして、午後は娘と過ごすという生活を送っている。

#### Q. 代理出産を依頼し、子どもが生まれるまでについて教えてください。

はじめは知らないことがたくさんあった。代理出産を経験した知り合いが一人もいなかった。はじめに訪れたエージェントは小規模で一定の地域内でのしか活動をしていなかった。卵子ドナーについて自分と夫に知らせる情報をコントロールしたがった。私はより多くの情報を知りたかったので、もっと柔軟に対応できるオンラインでの活動にシフトした。これによって仲介者の存在を排除し、直接、卵子ドナーのプロフィールを見ることができるようになった。

卵子ドナーを見つけるのに6ヶ月かかった。見つけてすぐに、彼女しかいないと感じた。すぐにエージェントにコンタクトをとった。私たちは彼女に、熱心に説得する手紙を書いて、ドナーになってくれるよう頼みこんだ。彼女は卵子ドナーになるのは初めてだった。以来、私たちと彼女の関係は続いている。医師は、カナダでは97%のカップルが匿名のドナーを選ぶと言ったが、私たちは正直でありのままでありたかった。

私たちは、カナダのクリニックとは反対側の場所へ飛び、ドナーと会い、受精卵を作った。21個の卵が採取できた。そのうち18個に受精させ、9個が受精卵となり、適格なのは6個だった。半分には私の精子を使って、残りの半分は夫のものを使った。

受精卵を作ってから代理母を探した。卵子提供をすすめてくれた会社の姉妹会社に頼むことにした。決めるまでに7-8人のプロフィールを閲覧した。私たちが重要だと考えた条件は、例えば、出産経験があること、健康でBMIが適切であること、所定の年齢の範囲内であることなどだ。この条件のすべてを満たす人物をついに見つけて、前に進む決心をした。代理母はトロントを生活の拠点としていたので、妊娠中に1度、出産してから1度、彼

女を訪ねた。ちょうど COVID-19 が広まった頃だった。まさか出産に立ち会えるとは思っていなかったが、代理母が看護師に話してくれて、出産に立ち会うことができたのでラッキーだった。それ以来、関係が続いていて、将来、また代理出産を考えたときは彼女に依頼しようと思っている。それほど密接なつながりはないが、良い関係で、時々、写真を送りあったりしている。代理母自身には5人の子どもがいる。

私と夫は早い段階から弁護士を依頼し、卵子ドナーや代理母と契約を結んだ。この契約には、出産時の法的保護者は誰かということなどを含んでいた。代理母は経験豊富で、すでに代理母を3回やっていた。書類へのサインは出産後、直ちに、そして迅速に行われた。

#### **Q. 代理出産のプロセスで、大変なことはなんでしたか？**

自分たちで課した厳しい条件のせいで、代理母を見つけるのは難しかった。また、最初の頃は、少しでもその条件を手放して代理母を信頼することは難しかった。初めて親になる身として、代理母はこうあるべきということについて少し強迫観念を抱いていたようだ。

また、代理母の居住地と距離が離れていたのも難しいこともあった。妊娠中の彼女をもっと見ることができればよかったのと思う。彼女に掛かった経費はすべて補償されたが、代理出産そのものについての補償はなかった。利他的だったということだ。契約で規定された上限額があった。おかげで、金銭面の話し合いが必要なかったのが楽だった。

#### **Q. LGBT friendly を標榜しているエージェントを選ぶべきでしょうか？**

それについては、カナダのエージェントだったらどこも問題ないだろう。彼らは顧客が家族をつくる手助けをすることを目的としているので、その家族構成がゲイやレズビアンであろうが、ストレートであろうが重要ではない。

#### **Q. 子どもが産まれてから、ワークライフ・バランスやパートナーシップに変化は生じましたか？**

ワークライフバランスについては、はっきりと変化があった。父親になる前は、娘の睡眠パターンについて楽観的に考えていたし、彼女が寝ている間に仕事をうまく片付けることができるだろうと簡単に思っていた。実際は、一日のほとんどの時間を彼女と過ごしているため、労働時間は不足している。それは構わないのだが、空いた時間を有効に使う能力が不可欠だ。

夫との関係も、よい意味で確実に変化している。夫が自分の子どもと接しているのを見るのは喜ばしい。以前にも増して彼に愛情を感じる。二人きりで過ごす時間をつくることは簡単ではない。お互いの両親から子育てを助けてもらおうと思っても COVID-19 で全部ダメになった。しかし、今は外部からの援助が得られるようになってきた。いいこともあれば悪いこともあった。

#### **Q. 親としての経験は人生をどのように変えましたか？**

いちばん大変なのは時間を見つけること。性格的に忙しくしているのが好きで、副業も気に入っている。そこで、優先順位を付けることにした。娘がなによりも優先で、その次に何をやるかを自分で選ばなければならない。自分にとって大きな喜びは教えることと、ささいな瞬間だ。子どもたちがほ

んの短い時間で多くのことを学ぶのは驚きだ。

自分が親になり、振り返ってみると、親が自分にどれだけのことをしてくれたか、本当の意味で理解はしていなかったと思う。自分には遺伝上のきょうだいが3人、養子縁組のきょうだいが3人いる。どのようにして両親が全てをやりくりしてやり遂げたか、想像もつかない。前よりももっと、両親をありがたいと感じるようになった。

#### **Q. 卵子ドナー、代理母とどのように付きあっていますか？**

彼女たちとは友人としてつきあっている。日々の子育ての問題で、彼女たちに依存していると思いたくはないが、健康の問題など、シリアスなことも含めて、心配事があれば、気楽に話せるような関係でいたい。しかしそれは、すごく密接な関係というわけではない。

夫と私は「Mom(お母さん)」という言葉は使わない。卵子ドナーのことを指して「お母さんはどうしている？」と聞いてくる人もいるだろう。やっぱり母親が必要だ、と娘には思っほしくないなので、私たちは娘といるときは“お母さん”という言葉を使わない。

#### **Q. オープン・ドナーを選ぶ Gay Dads は少ないと聞きます。それはどのような理由からでしょうか？**

彼女たちと関係を持つのは良いことだと思っている。子どもは、父親から産まれたわけではないといずれ知るだろう。だから、ドナーが誰かを知っているのは良いことだ。秘密にすればするほどもっと知りたくなるものだ。私と夫はドナーや代理母のことを隠そうと思ったことは一度もない。

#### **Q. 子どもの出自を知る権利について、LGBT コミュニティではどのくらい啓発されていますか？**

個人的には、娘が将来、出自を探る機会を得ることは非常に重要なことだと考えている。しかし、ゲイコミュニティ全体がどうかについては、わからないので、自分から話せる情報はない。

もし、娘が、特別そのことに興味がないようなら、それはそれで問題ない。

#### **Q. 子どもを育てている現在、大変なことは何ですか？**

娘が最近気に入っている言葉は「NO」で、なんにでも「NO」と言う。本当はやりたいと思っていてもだ。これをうまくやり過ごすために、私と夫は「YES」と「NO」以外の選択肢を与えるようにしている。今のところうまくいっているようだ。

現時点でもう一つ大変なことは、社会性を育むこと。COVID-19で人と直接会うことが限られている。デイケアは社会性を養うには最適な場所だが、COVID-19を恐れているほかの親たちに無理やり交流を求めるのは躊躇している。

#### **Q. 子どもに代理出産のことは話していますか？**

まだ娘には代理出産のことは話していない。多様な家族や代理出産に関する本はいくつか持っているのですが、それを使って彼女に知ってもらおうとしているが、まだ幼いので全部は理解できないようだ。

いつかは娘を代理母と卵子ドナーに会わせたい。卵子ドナーは最近、子どもを出産した。将来私たちに紹介したいと言っている。卵子提供の際の契約の条項の一つに、当事者のそれぞれが子どもを持った場合、子どもの名前と

所在地を開示しなければならないというものがある。それは、将来、子どもたちがデートすることを防ぐため。

**Q. 子どもの学校生活について、心配なことありますか？ カナダでは、Gay Dadsを持つ子どもは、たくさんいますか？**

子どもが孤立する可能性がある状況や環境に入る際は、親ならだれでも心配するはず。私たちが娘に望むことは、自信をもって生きてほしいということ。私たち家族はほかとは違うが、問題はない。1月初めに娘は幼稚園に通い始める。私は、受け入れる環境が整っているか事前にその幼稚園をよく調べた。すべてにおいて、私たちは自信をもって娘を育てたいと思っている。

カナダにはかなり多くのゲイペアレンツがいるだろう。COVID-19があつて、多くの人たちとは交流できていない。自分が住んでいる地域で、ゲイペアレンツの知り合いはいないが、いずれ会いたいと思う。

**Q. Gay Dads 向けのグループがたくさんあるようです。そのようなグループに加入していますか？**

Men Having Babies が主催のパネルディスカッションに参加したことがある。そこで子育てについて話をした。ほかの父親たちと会うことができ良かった。インスタグラムでもそのような交流を持つことができる。

私と夫は、最初の代理出産のエージェントを見つけるためにグーグルを利用した。なぜなら、誰かと直接、顔を見ながら話がしたかったから。そうすることで後々、確信をもってプロセスに参加することができた。

カナダには大規模なサポートグループはないが、自分たちが住んでいる地域には、クィアペアレンツ向けの小規模のサポートグループがある。そのの

フェイスブックを見たことがある。こうしたグループで交流を持ちたいと思うが、ストレートカップル向けのグループにも同じくらい参加したいと思っている。特に LGBT のグループに参加したいと強く思っているわけではない。しかしより一般的なサポートグループを探したいとは思っている。

ソーシャルメディアを通して自分はインフルエンサーになり、色々な関係を持つことができた。コンタクトをしてくるのは、ほとんどが中東やヨーロッパの人たちだ。質問の多くはカミングアウトに関すること。彼らは私がやってきたことを見て、同じようにやりたいから。

**Q. 経済的な理由で代理出産を諦めるゲイカップルは多いでしょうか？**

その通りだ。私たちは給料の良い仕事に就いていたため、代理出産に際してローンを組む必要はなかった。多くの人が代理出産で家族をつくりたいと思っているのにそれができないのは、経済的な余裕がないから。費用は家の頭金以上かかる。ストレートカップルにとっても同様に高額なものだ。不妊はカナダでは障害と見なされないので政府による一部助成金は出ない。

家族計画において、お金は確実に心配事となる。しかし、私にとってお金は問題とはならない。家族のほうが大切。私は元々子どもを4人持ちたかった。しかし、夫は二人だけでいいと言っている。妥協案を探っているところ。

**Q. なぜ、他の人と比べて迅速に代理出産のプロセスをすすめることができたのでしょうか？**

代理出産に要する時間については、当時私たちは全然知らなかったが、私たちの卵子ドナーは完全にオープンでいてくれ、幸運だった。私たちがプロ

セスを迅速に進めることができたのはタイミングが良かったことと幸運が重なったから。私と夫にはあと5つの受精卵が残っている。二つは私のもので、三つは夫のもの。卵子ドナーを選ぶとき、夫の外見とマッチするように、濃い肌の色の人を意識的に選んだ。Mayaは、遺伝上は私の娘だが、夫によく似ていると多くの人と言う。私の受精卵を使ってあと2回代理出産にトライしてみようと考えていて、その時は同じ代理母にお願いしようと思っている。彼女は現在妊娠中で、あと二週間で生まれる予定だ。9回目の出産となる。もし彼女にお願いしたら、彼女にとってそれは10回目の出産となるだろう。医療面での懸案はすでに解決している。すでに良好な関係を築いているから、同じ代理母に頼むのが安心だ。しかし、法律関連のことをよりきちんとするために、次回もエージェントを通すつもり。

エージェントと契約を結ぶ際に、私たちは2回の出産の保証をカバーする、高額なオプションの方を選んだ。だから、二人目の子どもの時も同じエージェントを利用しなければならない。

#### **Q. カナダで代理母を見つけることができなかった場合、海外へ行くことは選択肢にありましたか？**

これについては、私も夫も選択肢として考えたことはなかったが、可能性としては全くないというわけではなかっただろう。絶望的になったことはなかった。いつも時が来ればピッタリな人を見つけられると思っていたから、海外に目を向けるほどの苦境に立たされたことはなかった。私たちのエージェントはカナダを拠点としていたが、海外からの依頼者はたくさん来ていた（特にフランスから）。

#### **Q. エージェントで審査はありましたか。**

私と夫が親となるのにふさわしいか確かめる精神医学的な審査がひとつあった。また、精子生存率の検査も行った。卵子ドナーと代理母にも複数の審査があった。

#### **Q. エージェントで、子どもの知る権利について何かガイダンスはありましたか？**

特になかった。カナダの法律に従った子育ての基本に関する文書はもらった。

通常通り、出産の次の週に看護師の訪問があった。彼女はゲイのカップルと働いていて、好ましい人だった。しかしその時も、知る権利に関する公式の手引きはなかった。

#### **Q. その他、コメント**

私は子供のころから信心深く、教会へ通うのが楽しかった。しかし、娘にこのことを説明するのは難しい。キリスト教から、価値あることや大人になるために必要なことを教わることができる。しかし、もし同性愛者に敬意を払わず、尊重しない教会にいる場合、自分たちについてわかってもらったり、正当化したりすることは難しい。子どものころからずっと通っている教会がある。そこの人たちはありがたいことに愛情深く寛容だけれど、私たちのような家族を好まない人たちにどうやって理解してもらえばいいのかわからない。教会を変えようかとも思うが、彼らと強い一体感を持っている今となってはなかなか難しい。

(2011年11月)

**Mr. Austin**

夫との間に代理出産で生まれた娘がひとりいる。職業は機械エンジニア。副業としてFBA（フルフィルメント By Amazonの略。Amazonの倉庫に商品を保管し、注文後の梱包や発送、返品などの配送業務を代行するサービス）も行っている。

インスタグラム(@austnplz)やブログなどで家族の様子を発信している。



## A gay dad in the U.S.

### アメリカの Gay Dad

#### Interviewee

#### Mr. Gerald Mahoney

#### Q. ご自身のことについて教えてください。

夫の Drew、12 歳の双子の息子 (Bennett) と娘の (Sutton) とアメリカ・ロサンゼルスに住んでいる。中学の数学教師をしている。

子どもたちが生まれたとき、育児のために数週間休暇を取った。子どもを持つことはとても大変で、やっと子どもを持つことができたのだから、子育てのすべてを体験したかった。仕事に戻ってからは、キャリアを変更して教師になった。この職業を心の底から楽しんでいる。

#### Q. ご自身のセクシュアリティの自覚と、親になりたいという気持ちはいつ頃生まれましたか？ パートナーと話し合いはスムーズに進みましたか？

自分はゲイであると高校生の時に認識したが、当時はそのことを受け入れることができなかった。大学卒業後の 20 代半ばになってようやくカミングアウトできるようになった。いつも父親になりたいと思っていたので、ゲイである自分を受け入れるのが難しかった。ゲイであることを認めたら、父親になる機会を失うことになるだろうと思ったから。自分にも選択肢があると分かったのはうれしい驚きだった。社会が変わるのを見て勇気がわいた。

パートナーと家族計画の話し合いはいつも円満だった。最初のデートの時から二人とも親になりたいと話していた。当時はゲイカップルの結婚は法律で認められていなかったが、親になるという希望は自分たちにとってははずせ

ないものだと分かっていた。問題はなりたかどうかではなく、いつなるかということだった。

#### Q. 代理出産のプロセスはどのように進みましたか。その時、何を考え、どのように感じましたか？

夫と私は最初色々な選択肢について考えた。親になるための最も簡単で一番良い方法が何かわからなかった。家族計画を専門としていて、過去にゲイカップルと仕事をしたことがあるカップルセラピストに会うことから始めた。彼女は代理出産について話をし、私たちが考えていた誤解を払拭してくれた。私たちは、養子縁組という手段で家族をつくった友人とも話をした。どちらの選択肢も良い面と悪い面があると知ったうえで、最終的に代理出産を選択した。

最初の段階では、代理出産はワクワクするものだった。これが現実のことなのか、信じられなかった。代理出産を始めた後でさえ、子どもを持つという考えは常に数年先のことだという感じがした。代理母が妊娠した後に、ストレスが生じてきた。夫と私はアメリカに拠点を置くエージェントを利用することに決めた。彼らは、可能な限りすべてのことを、合法的、倫理的そして安全に行いたいと考えていた。海外へ行くなど、考え得る代理出産の手段は数多くあった。しかしそのエージェントを信じることにした。

私たちは、カリフォルニア南部に住んでいる代理母を希望した。検診に同行できるし、出産までのすべてのプロセスを共に体験できるという理由から。1 年ほどかかったが、エージェントは私たちの希望にあった代理母を見つけてくれた。しかし、最終的には彼女に依頼しなかった。タイミングが合わなかったことと、卵子ドナーが見つけれなかったのが理由。最初の代理母を失うという躓きがあったものの、

ありがたいことに夫の妹が卵子ドナーになると名乗り出てくれた。そして、この代理出産に関わる全ての人にとってこれが健全なものかを確認するためにセラピーに戻った。夫の妹が卵子ドナーで、私が精子を提供したので、生まれてくる子供は遺伝上私たちの両方とつながっている。

**Q. 親としての苦勞、親としての喜びは？  
親としての経験は人生をどのように変えましたか？**

すべて喜びしかない。子育ては自分が思い描いていたとおりだ。すべての人にとってそうではないということは理解している。とても労力があることだし、生活も一変する。しかし、私の生活についていえば、すべての面においてよくなったと言える。

労力を要するということは子育てにおける基本だと私は考えている。トイレトレーニング、しつけ、価値観の植え付けなどがそうだ。しかしそういうことに対しても、やりがいを感じた。家族にはいつも感謝している。良い日もあれば、悪い日もある。時々喧嘩もする。しかし、結局すべて愛すべき楽しい経験だ。

**Q. 子育ての仕事の両立は難しいですか？  
子どもが産まれて、パートナーシップに変化はありましたか？**

夫と私は、伝統的なヘテロセクシャルのカップルのように子育てを役割分担した。私が子どもたちと家において、夫が仕事に行くというかたち。夫は三人を養うため仕事をしていたにもかかわらず、家事にも協力的だった。その意味で、役割は性別で決めるものではなく、経済的、時間的にみてどちらがやるのが良いかということだけだ。

私たちのゲイ仲間で、子どもがいるほとんどの人は仕事に復帰している。

ほかの家族も同様にケースバイケースだ。

**Q. 子供たちにどのように教えていますか？  
何か質問してきますか？**

今朝、ソーシャルメディアのサポートグループの記事を読んだ。「あなたの子どもたちは、『お母さんはどこ？』と尋ね続けるでしょう」というものだ。しかし私の家族でそれは問題となっていないのでよかった。子どもたちには、最初から正直に話した。小さい時から「代理母」や「卵子ドナー」という言葉を使ってきた。彼女たちの役割を教えるために母の日の代わりに代理母と卵子ドナーの日と名付けた休日をつくったりもした。嘘偽りは全くなかった。一切隠し立てすることはなかったし、子どもたちも彼女たちが誰なのか知っている。

**Q. 卵子ドナー、代理母はどのような女性ですか？  
どのように付き合っていますか？**

代理母とは年に1回くらい会っている。彼女は拡大家族の一員のようなものだ。

卵子ドナーは私の義理の妹だから、関係はより近い。叔母以上、母親未満という感じ。彼女はニューヨークに住んでいるから、年に1、2度しか会えない。卵子を提供してくれたときもニューヨークに住んでいたため、代理出産の間、彼女が常にそばにいたというわけではなかった。これは良いことだったと思う。なぜなら、彼女が疑似母として存在することを避けられたから。彼女は当時28歳だった。最近自身の子どもが産まれた。

**Q. 妊娠出産で代理母に生じるかもしれない愛着の問題について、心配がありましたか？**

それはあった。私をはじめ代理出産に躊躇したのもそれがあった。しかし、家族計画のセラピストと話したとき、彼女がその懸念を払拭してくれた。エージェントを通したのもそのため。当事者すべてが心理的に守られるように、また正しい理由で代理出産に関わっているようにするため。エージェントは代理母が自身の子どもを産み終えていて、これ以上子どもを持つつもりがないことを確認してくれた。

エージェントは代理母とどのような関係を持つかは私たち次第だと助言してくれた。私はより親密な関係を持ちたかった。子どもたちに正直でいたかったから。ピッタリの人が見つかって良かったと思っている。

#### **Q. 子どもの出自を知る権利は、ゲイコミュニティや LGBTQ のコミュニティのなかでどのくらい啓発されていますか？**

ゲイカップルの多くは匿名か半匿名を希望する。私たちは、エージェントには、曖昧なのは嫌だと伝えた。子どもたちの親が誰なのか、混乱しないように、最初からずっと正直でいようとしている。子どもたちは生まれてから一度も「お母さん」を求めたことはない。子どもたちは、自分の家族は特別だと思っていて、それで、自分自身のことでも特別だと感じている。

匿名の卵子ドナーを選択したゲイカップルを知っている。自分が知る限りでは、彼らは大きな問題に直面していないようだ。人によっては、それはさほど問題としないこともあるのだとわかった。子どもがもっと大きくなったら、アイデンティティに関する問題が浮上してくるのではないかと懸念している。

義理の妹を卵子ドナーとして選択したのは、秘密をつくりたくなかったという理由もあった。エージェントにオープン・ドナーを選択することができるか尋ねたが、無理だと言われた。卵

子ドナーについては限られた情報の開示しか認められていなかった。

#### **Q. 男性が子育てすることに対する差別視はありますか？**

「ママ友」の輪に入れてもらえない感じがいつもする。ゲイだからというわけではなく、男だからという理由で。経験していることが明らかに違うから特に傷つかなかったが、社会から取り残されていると感じた。数年前、ニューヨークに住んでいた時に、専業主夫のグループを見つけ、参加していた。3人のメンバーと、週に1回集まっておしゃべりをしたり、子どもたちと一緒に遊ばせたりした。

みんなとても親切で、あからさまな差別に遭っていると感じることはない。それは、米国でも進歩的な地域に住んでいるからということもある。しかし、自分たちのような家族が認められる上で、書類上の問題が残っている。それは「親1/親2」ではなく、「母親/父親」欄がいまだにあること。

#### **Q. 子どもの学校生活に関連して何か印象的なエピソードはありますか？**

子どもたちが幼稚園に通っていた4歳か5歳の頃、娘が家に帰ってきて私に言った。ヘルパーの誰かが、お母さんがいるはずだと娘に言っただけらしい。そして、私たちは、お母さんは絶対に居ないと再び言い聞かせなければならなかった。それは、これまでも何度も繰り返されてきたことだ。

幼稚園の周りの子どもたちは、私たちの家族には二人の父親がいるということを理解している。それを理解せずに、否定してくる子らは、放っておけばいいと教えている。子どもたちはレジリエンスが高く、自分の家族にプライドを持っている。伝統的な家族ではないからといっていじめられたりはしていない。

**Q. 学校や地域に Gay Dads はたくさんいますか？ 交流はありますか。**

私が知る限りでは、子どもたちの学校や私の勤務する学校にはいない。いるのかもしれないが、まだそこまで自分はほかの親たちとの交流がない。小学校では母親が二人いる家庭はいくつかあった。しかし、今のところ同性親の大きなコミュニティはない。

**Q. Gay Dads 向けのグループに入っていますか？**

一時期、Men Having Babies のために仕事をしていたことがある。とても有意義なグループだと思う。しかし現在はどこのサポートグループともコンタクトはとっていない。夫と私にはゲイカップルの友達が何人かいるのだけでも、彼らは子どもたちの面倒を見てくれたりして、とてもありがたく思っている。私の義理の兄弟もゲイで、結婚して二人の子どもがいる。そういえば、義理の妹が彼らの代理母になった。彼らはニューヨークで代理母を見つけるのに苦労していた。ほかのゲイのカップルとつながっていたいと思うが、今のところサポートグループを探していない。

**Q. Gay friendly を標榜している代理出産 エージェントがあります。こうしたエージェントを利用することは、利点がありますか？**

私が利用したエージェントはゲイカップルに特化していると宣伝していたが、すべてのクライアントがゲイというわけではなかった。その後、彼らはクライアントの幅をさらに広げていった。

以前はゲイにやさしいエージェントを利用するというアイデアを気に入っていた。もれなく情報が得られるだろうと思ったから。ゲイの結婚は当時違法だったので、親権の心配などがあった。エージェントはこれらについて、

ゲイカップル特有の課題だと認識していた。私たちは、代理母の出産に立ち会えるように医者や病院に掛け合ってもらおうようエージェントに頼んだ。エージェントはうまくいくように融通してくれた。とてもよくやってくれたと思う。

最近では、どこのエージェントもゲイのカップルに詳しくなっているようだ。代理出産は進化してきていて、ゲイカップルの結婚は合法だから、法律上の問題は前よりも目立たなくなっている。

私たちの代理出産の費用はトータルで約 15 万米ドルだった。現在は、それよりももっと高額になっていると思う。費用は自分たちにとっては天文学的な金額で、支払う余裕があるかどうかわからなかったが、養子縁組などほかの選択肢もびっくりするくらい高額だということに気がついた。長期間にわたって貯金をして、一生懸命働いた結果、支払うことができるようになった。

最終的に私たちが支払った合計金額は、エージェントが提示した見積金額に大体合っていた。双子の場合は少し高額になる。IVF サイクルを複数回行ったのでその分、費用もかさんだ。高額だったが、節約のために何かを省くことはしなかった。代理出産は人生における贅沢品(luxury)だったと考えている。

**Q. 新しい生殖技術は、LGBT コミュニティにとって(も)朗報でしょうか？**

子宮移植を今すぐに想定するのは難しい。それはサイエンス・フィクションで、倫理面で多くの懸念がある。自分は妊娠を経験したいという欲望はない。もし、同等な機会が存在するならば喜んでやってみようとは思いますが、それができないからと言って、何かをとりこぼしたという感覚はない。

**Q. 子育てがしたい、家族をつくりたいと願っているゲイカップルにとって、伝統的な家族は、どのような意味を持っていますか？**

子どもを持つ前に考えたことがある。自分たちは子どもから何かを奪っているのだろうか。例えば母親とか。母親は素晴らしいし、持たなくてもいいと言うつもりはないが、そのほかにも子どもにとって価値のある家族のかたちがあり、伝統的ではない家族のかたちにも大きな価値を見出せるはずだ。

私の子どもたちがなにかを失っているとは思わない。そのような考えのせいで、ゲイカップルが子どもを持つことをあきらめるべきではないと思う。他人からどのように見られようと、ゲイの親は子どもたちが必要とする愛情を全部与えることができる。愛情が一番大事で、愛情があれば、子どもたちは安全で守られていると感じられる。昔からある核家族は、それと与えることができている。

**Q. その他、コメント**

代理出産を規制することに賛成。代理出産は契約書を作り、倫理的問題をきちんと考慮して行われるべき。女性の搾取という側面が大いにある。経済的な理由から、女性がやりたくないことを無理にやらせてはならない。私たちの場合は、女性たちの愛情からのものだった。私たちは海外の代理出産を利用したくなかった。女性から搾取するのを避けたかった。非公式のやり方ではなく、正規のエージェントを選んだのはそのため。代理出産に入る前に、厳しい審査を行い、代理母とも腹を割って話し合いを持った。そのことにとっても感謝している。そのような規則抜きでは混乱を招いていただろう。政府は、代理出産を注意深く認可すべきだ。

代理出産と子育ては、私の人生で最高の経験だった。健康で可愛い二人の子どもに恵まれたことに本当に幸せを感じる。

(2021年11月)

**Mr. Gerald Mahoney**

子どもからヤングアダルト向け小説・絵本ライター。小学校などを訪問して、子どもの創造性を育むプレゼンテーションを行っている。夫の Drew と 2009 年に代理出産で生まれた双子の息子・娘とともにロサンゼルスで暮らしている。

著書:



Jerry Mahoney 2014 Mommy Man: How I Went from Mild-Mannered Geek to Gay Superdad. Lanham: Taylor Trade Publishing.

**Two dads and three girls.**

### 3人の娘をもつゲイの父親

Interviewee

Mr. Nick Yu He

#### Q. ご自身について教えてください。

自分は中国出身の100パーセント中国人で、MBA取得のために2007年に渡米した。渡米は自分のキャリアを向上させ、成功するためという建前だったが、よく考えてみると、本当の自分を見つけたかったから。2009年にシアトルに引っ越して、2010年に現在の夫と出会った。そして、2013年に結婚した。一人目の娘が2015年に生まれ、2017年には双子の娘が生まれた。

最近の子育てに忙しい毎日過ごしている。

#### Q. ご自身のセクシュアリティの自覚と、親になりたいという気持ちはいつ頃生まれましたか？ パートナーとの話し合いはスムーズでしたか？

最初に子どもを持つことについて考えたのは、結婚した時。そんな機会を持つことはないだろうと思っていた。自分はゲイだから、エイズとか似たような病気で死ぬかもしれないと考えていた。そして、両親に自分のセクシュアリティについてどのように話せばいいのかわからなかった。カミングアウトした直後に現在の夫に出会った。両親はどう思うだろうかと、とても心配した。その経験から、自分は自分の家族をサポートするためにできる限りのことをやろうと思った。夫と私が家族を持つことを最初に考え始めたのは2014年だったが、代理出産は高額すぎると思っていたから、はじめは多くの養子縁組のエージェントを訪ねた。しか

し、自分たちが最終的に選んだのは代理出産だった。

#### Q. 代理出産を選択するまでの意思決定、代理母が出産するまでのプロセスはどのように進みましたか。

当初、夫と私は、代理出産は自分たちには高額すぎるのではないかと思っていた。代理母を含め、抱え込むものがたくさんあるためだ。それでも、養子縁組を選ぶことにはなぜか躊躇した。養子縁組の書類は机の上でほこりをかぶっていた。ついに代理出産を開始する時、順序に従って進めようと思った。夫と私は、両親と子どもが似ていると他人から認識されるという考えが気に入っていた。

Findsurrogatemother.com というサイトを訪れて、自分たちは代理母を探しているというプロフィールを載せた。可能性のある代理母からたくさんメッセージをもらったが、会話がそれ以上進むことはなかった。その後、自身の小さな代理出産エージェントを運営しているメリッサという女性からコンタクトがあった。最初はエージェントを通すことをためらった。費用がより多くかかる上に、さらにプロセスが複雑になるのではないかと思ったから。

夫と私は、代理出産のプロセスの間、たくさんの困難に直面した。自分は女性の生理について何もわかっていなかったから、学ぶことがたくさんあった。また、自費で賄わなければならない検査も結構あった。最初に選んだ卵子ドナーは性感染症を持っていた。これは、自費の検査でしかわからないことだった。その後、私たちは卵子提供を受けるために別のエージェントを利用したが、ドナーの採卵の3日前に、彼女が避妊をしないで恋人とセックスしたため提供を受けることはできなくなった。ドナーが妊娠した可能性が生まれたからだ。これには、ひどくストレスを感じた。

代理母を見つけるのも大変だった。最初の代理母候補だった女性とはとても良い関係を築いたが、私たちが決めた身体的要件を満たしていなかった。そのため、ほかの人を選ばなければならなくなった。その後選んだ代理母は、双子を妊娠したが、早い段階でそのうちの一人が亡くなった。これはよくあることだったが、傍観者である自分にとっては衝撃の出来事だった。

2回目の代理出産は、これもまた波乱続きだった。新たな卵子ドナーに依頼し、夫と自分の精子を使ってそれぞれ受精卵を作ったが、1回目の代理出産の時と違って、夫の受精卵のほうが私のものより状態が良かった。この時に作った夫の受精卵一つと、2年前の1回目の代理出産の時に作った自分の受精卵一つを移植することにした。

もう一つ思い出すのは、双子を身ごもっていた代理母が、どこかへ旅行に行きたがったことには困った。彼女の旅行がしたいという願いをかなえてあげたかったが、27週目で彼女の子宮口が2cm開いていたので、早産の恐れがあった。医師は何とか生まれないようにして、34週目で帝王切開を行った。一人の娘は、もう一人よりもかなり小さめで生まれた。病院の新生児集中治療室の中にいる彼女たちを見るのは怖かった。

大変なことも多いが、親になるための旅は全体としては、またとない経験になった。

#### **Q. 卵子ドナーを選ぶ際にこだわりはありましたか？ 代理母についてはどうでしたか？**

私は、卵子ドナーに対して身体的に魅力的なことを求めた。一方夫は、もっと現実的で、遺伝上問題のない健康な女性を求めた。私たちは、たくさんの卵子を提供できる女性がよかったですので、25歳以下の人を希望した。

ドナー候補の写真から、見た目の印象でニックネームをつけた。例えば、

親しみやすい近所の子、ハリウッドスターなど。そして、そのうちから一人を選んだ。

#### **Q. Two dads and three girls というサイトの目的は？ 今までどのような人からコンタクトがありましたか？**

私は自己啓発のイベントに行き、自分のレガシーについて考え始めた。それで、自分のこれまでのことを人に伝えたいと思った。アメリカには、本当の自分を隠しているゲイの中国人が多くいる。人はいままで私がたどってきた道は簡単なものだったと思っているかもしれないが、実際はそうではない。だから、私は自分の歴史から、人々が何か学ぶことがあればよいと思った。ホームページはそのためのもの。私は、人々が私の本を読んで何かを感じたり、私の苦勞から何かを学び、勇気を得てほしい。私の本を読んでもすごく助けられたというメールも徐々に来るようになっていく。

本と同じ名前の非営利団体も始めた。まだ、どういったかたちで運営していくのがよいか模索中だ。著書のセールスを活動費に充てられるだろう。

#### **Q. 子育ての仕事の両立は難しいですか？ 子供が産まれて、パートナーシップに変化はありましたか？**

夫と私にとって家庭と仕事の両立は難しいことではない。私たちはどの場面も楽しんでいる。さらに、私の両親も私を助けるために中国からアメリカに引っ越してきた。もし自分の目標がはっきりしていて、エゴや誰が何をやるべきかという考えを捨て去れば、チームとしてともに働くことができると思う。役割を決める必要はない。流動的でよい。

夫と私との間で文化的なギャップが生じる時があるが、そのことで喧嘩はしないようにしている。

**Q. 子供達に対する教育方針は？どのような人に育ててほしいですか？**

娘たちには、親切で勇敢でいてほしい。自分のように本の虫になってほしいとは思わない。娘たちは皆、モンテッソーリ教育が受けられる学校に通っているのだから、彼女たちの教育内容は個人に沿った内容でカスタマイズされている。遊ぶ時間もたくさんある。私は学校の科目テストで良い点数を取ることにはこだわっていない。子どもたちから優秀さを求めるべきであるという考えには賛成しない。

彼女たちの持っている才能を見つけ出し、それを育てていけるよういつも心を砕いている。

**Q. 子供たちに卵子提供・代理出産のことをどのように教えていますか？どのように受け止めていますか？**

娘たちは4歳と6歳でまだとても幼い。彼女たちは自分たちを産んでくれた代理母のことは知っているが、母親についての理解はまだ構築中だ。私が娘たちと触れている時間が長くて、夫は子どもたちとふざけたり、遊ぶ時間が長いせいか、長女は時々私のことを「お母さん」と呼ぶ。娘たちにお母さんが欲しいか尋ねたことがある。彼女たちの答えは、お父さんが二人いるからお母さんはいらぬ、だった。

あらゆる映画やテレビでは、父親と母親が描かれている。だから、娘たちは私たち家族がほかとは異なっていると分かっている。私は、埋め合わせるためにたくさんの愛情を注いでいる。娘たちには、自分たちが劣っていると感じてほしくない。

**Q. 子供は、ママがいないのはなぜ？などと聞いてきますか？**

娘たちはそれほど多くの質問をしてくるわけではない。時々、代理母のお腹について聞いてきたりするぐらい。

**Q. 卵子ドナー、代理母はそれぞれどのような女性ですか？どのように付き合っていますか？**

卵子ドナーとは付き合いはない。代理母とは、以前はそれなりにかかわりがあったが、家族間でちょっとしたことがあってからは疎遠になった。

**Q. 女の子3人ですが、思春期になった頃、不安はありますか？どのように準備していますか？**

娘たちには、すでに男女間の性器のちがいについて話をしている。ちょっとだけ居心地が悪かった。いくら繊細であろうと、自分は男性だから母性本能や、女性として育ってきたからこそ得られる知識や経験を娘たちに伝えることはできない。将来的には、親族の誰かの助けが必要になってくるだろう。自分にとってわからないことだらけだ。

**Q. 妊娠出産で代理母に生じるかもしれない愛着の問題について、心配がありましたか？**

かなりあった。特に最初の妊娠の時は、本当に心配だった。代理母を選ぶ際の条件の一つが、すでに自分の子どもを持っている人というものだった。彼女が子どもをおなかの中で育てていることや、彼女が望めば母乳を与えられることがうらやましかった。二度目の妊娠の際はもっと気楽だった。

**Q. 男性が子育てすることに対する偏見はありますか？それによる困難は？何かエピソードはありますか？**

長女の出産を担当した医師からは偏見を感じた。医師は、二人の男性が親になると聞いて、赤ちゃんを連れて帰ることはできないと言った。私たちには母性本能がないからという理由で。これには心底失望した。私はその医師



にたいして、オンラインレビューで最低の評価を与えた。それ以外は、リベラルな地域に住んでいることもあって、日常的な偏見は経験していない。海外へ旅行する際、厄介なことになるだろう。幼い女の子と一緒に国境を越えようとするといつも止められる。出生証明書やその他の書類を見せてようやく入国できる。幸い、夫と私はカリフォルニア在住だから、出生した時から二人の名前入りの出生証明書を持っている。だから、少しはましな方だ。

**Q. 学校や地域に gay dads はたくさんいますか？ 交流はありますか。**

代理出産の最中にほかのゲイカップルと知り合いになったが、その後関係は途切れた。自分は内向的だから、家族と過ごしているほうがいい。

**Q. Gay Dad 向けのグループに入っていますか？ 役にたちますか？**

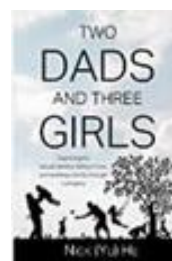
Men Having Babies のフェイスブックに登録はしていて、過去にコンタクトを取ったことがある。自分もつばら投稿された内容を閲覧するだけで、活発に投稿したりコメントを残したりすることはない。

(2021年12月)

**Mr. Nick Yu He**

自身がゲイと認識し、代理出産で娘を持つまでを記した回顧録“Two Dads and Three Girls”の著者。中国人の両親のもと中国で生まれ、MBA取得のためにアメリカに移住。マイクロソフト社などで10年働いた後、2回目の代理出産を期に退職。現在は不動産関連の仕事をしながら、夫の Bryan と3人の娘とともにカリフォルニアで暮らしている。

著書



Nick (Yu) He 2019 Two Dads and Three Girls: Searching for Sexual Identity, Falling in Love, and Building a Family through Surrogacy. GPS Real Estate Investment.

## Surrogacy and parenting by a sexual minority man.

### セクシュアルマイノリティ男性の代理出産と子育て

Interviewee

Mr. Kyle Phoenix

#### Q. 自己紹介をお願いします。

米国のバッファロー大学でティーチングアシスタントをやっていた学生的时候からずっと、主に教育の分野で仕事をしてきた。大学を卒業した後、アメリカの企業で5~7年間働いたが、9.11の後、従事していた証券訴訟の仕事がなくなり、疲弊してしまった。その後、Harlem Children's Zoneで責任者との渉外を担当する係として働き始め、LGBTの問題に焦点を当てたゲイ男性のための組織でボランティア活動を始めた。しばらくの間、黒人男性のための意見交換所の役員も務めていた。

そのあと、勉強を続けるためにコロンビアに移り、準備と向上に焦点を当てた成人教育のインストラクターになった。また、LGBTの男性と一緒にワークショップを開催した。2019年に、より多くの人々にリーチするためにYouTubeにワークショップビデオを投稿することにした。

2009年、Kyle Phoenix Showというパブリックアクセステレビ番組を行うために交渉した。番組は毎週木曜日にマンハッタンで放送された。2013年、自分の知識を本にまとめ始めた。トピックは、LGBTのリプロダクティブ・ライツや、どうやって子供を持つかということなど。子供を持つことで男性に人生の目的に対する感覚を与えることができると思うが、多くのLGBTの男

性は、これを自分たちの選択肢だとはまだ考えていない。

#### Q. 自分のセクシュアリティに気づいたのはいつですか？ 親になりたいと思ったのは？ パートナーと話し合いはスムーズにできたか？

自分のセクシュアリティは時間とともに進化してきたが、もともと、自分は異性愛者だけではないことに気づいていた。両親は12歳のときに離婚し、その後のカウンセリングで、自分は異性愛者だけではない可能性が高いことがわかった。高校生のとき、ゲイとしてカミングアウトをした。大規模なLGBTコミュニティを持つニューヨークに住んでいたため、LGBT世界のサンプルを手に入れることができた。自分は強力なサポートシステムを持っている。母親の友人のゲイがいて、彼が近いメンターになってくれた。現在、自分のことをオムニセクシュアルと定義している。これは、ジェンダーとセクシュアリティの狭い範囲を超えるものだ。

いつも親になりたいと思っていた。家族形成に関して、LGBTコミュニティの中で社会的な反響はなかったが、自分は両親などと代理出産についてオープンに話し合っていたことを思い出す。母親は代理出産についてとてもプラグマティックな考えの持ち主で、非常にサポーターで進歩的だった。

子供たちに、自分の人生が終わった後も続いていく家族のコミュニティの感覚を作り出すことに心を砕いている。自分の祖父母、母、叔母/叔父はすべて亡くなったので、血縁の絆ではなく感情的な絆を築こうとしている。

#### Q. 親になったプロセスについて教えてください。

代理出産を依頼した。母親がその費用を賄ってくれた。当時、代理出産の

費用は、今と比較してまだかなり安かった。自分が代理出産の旅を始めたとき、独身だった。そして今日まで自分で子供を育てていて、パートナーと一緒に子育てをしているわけではない。自分は(男性パートナーとではなく)子供とパートナーを組んでいるゲイ男性で「少数派のなかの少数派」だと言える。これはレズビアン家族とは異なっていると思う。

母親は、21歳の頃に代理出産のアイデアを自分に伝え、それを具体的に考えるよう勧めてきた。20代の頃、2人の女性と真剣な付き合いをしていて、彼女との間に子供を持つことを考えていた。しかし、彼女たちは自分とは異なる道徳的信念を持っていたり、家族と一緒に作るために適切な心理状態ではなかった。

コロンビア大学で勉強しているときに、ベネズエラ出身の友人、ニーナを作った。彼女は母親になりたいとは思っておらず、できるだけ勉強を進めたいと思っていたが、そのためのお金がなかった。彼女は自分の代理母となることに同意し、彼が彼女に支払うお金で、勉強を続けるプランを立てた。その計画は、彼女が大学を卒業してベネズエラに戻る前に、アメリカで彼の子供を出産することだった。

長男が生まれてから1年以内に、ニーナは再び代理母になることを申し出てくれた。ニーナはもっとお金が必要だったし、自分は息子が一人っ子になることを望んでいなかった。最終的に、代理母に支払ったお金は2人の子供のために2万から3万ドルだった。これは、ニーナの授業料、医療費、およびすべての弁護士費用をカバーしていた。ニーナは2回目の出産後にベネズエラに戻った。彼女は子供にはほとんど興味がなかった。

両親が年をとっていたので、全てのプロセスは早く進んでいった。約5~7年後、両親は亡くなった。両親が病気で末期の状態になり、両親の世話をし

た経験が、良い親になることを教えてくれた。境界がなくなることを受け入れなければならなかった。

### Q. どのように子育てに取り組んでいますか？

いつもスケジュールとカレンダーを使用して生活をオーガナイズしているたちだ。すべてが「想定」されている場所にあるのが好きだ。母親が病気になったときにサバティカルを取った。この時、自分がどうして良いかわからなかったということを認めざるをえなくなった。そして、他人に助けを求めることを学ばなければならなかった。子育てについて助けを求めるのに、ゲイの男性は役に立たないことがわかった。最も助けになったのは、異性愛者や、すでに子供を持ち、子育てをよく知っているゲイの男性だった。自分はCharter schoolでの仕事を通して多くの親子を知っていたCharter schoolは親密なコミュニティであり、アドバイスやサポートを提供できる人たちがたくさん関わっていた。

自分は感情面では女性らしいと感じているが、肉体的には、男性的で、集中力があり、自信を持っている。女性が社会的に行っていることを観察して疑問を抱くことにやぶさかではない。子育ては、自分にあるがまを受け入れることを教えてくれた。

### Q. 子供達に代理出産のことをどのように話しましたか？

息子は現在7歳と9歳になっている。黒人が子供たちに対して行うようなことをやらないように努めている。なぜなら、それは現代社会や世界の動向の中では機能しないと感じているから。子供たちに教えているのは、人種(race)は社会的構成物であり、セクシュアリティは個人としてどう感じるかの問題に過ぎない。人生で最も重要なこ

とは、実際には世間の人が思っているような類のものではないということ。解剖学などについて、すべて正しい言葉を使って子供たちに説明する。自然界にあるものすべてをノーマライズし、さまざまなタイプの家族を明確に説明しようと努めた。子供たちとオープンに話し、子供たちの言うことに耳を傾けるよう努める。息子たちには、話をする、声を上げることを教えたい。そして、体罰や暴力、脅迫は使用しないことを教えたい。

#### **Q. 親になることの困難と喜びについて教えてください。**

難しいのは、時間の配分だ。自分はよく、「子供たちが眠っているときに仕事をして、子供たちが起きている間に彼らの相手ができるか？」を自問する。「一緒にいれる時間はどれくらいか？」

そして、資金の問題がある。「子供たちのためにいくら稼ぎ出せるか?」「将来、子供たちのためになるような良いものを提供できるか?」（例えば、緊密な家族、自分が死んだ後も続くポジティブな影響）喜びの面は、息子たちは面白おかしい(funny)こと。自分は他人を怖がらせることもできるが、自分は子供たちを決して威嚇するようなことはしない。これは爽快で、最高だ。

#### **Q. 子供たちが学校で何か言われることはありますか?**

長男はある日、帰宅し、学校の子供たちが自分のことをレズビアンと呼んでいると言った。私たちはそれについて話し合い、息子は、他の子供たちは、それが何を意味するかを単に理解しておらず、もっと勉強する必要があることを認識しただろう。自分たちの家族構成が友人のほとんどの家族と似ていないことでいじめがあったが、子供たちは挑戦することを学んだ。それ

はまるで子供たちが父親をいじめから守ろうとしているかのようだ。

息子たちは現在、ニーナがどこにいて、彼女が何をしているのかについて空想的な物語を作り上げているが、自分はまだあまり気にしていない。

息子たちは父親のセクシュアリティに気づいている。子供たちにははっきりと説明している。子供たちは、ニューヨークに住んでいてさまざまな人に出会った結果、人々の違いを理解している。

#### **Q. 家族を作りたいと考える男性の心配事は何でしょうか?**

自分のワークショップの多くは、CDCを通じて資金提供されていて、テーマとしては特にHIVの問題について話している（黒人男性は米国で最もHIV感染率が高い）。親になりたいという欲求の陰には、死に対する感受性がある（「私は十分長くここにいられるか?」）。HIV陽性の人々にとっては、多くの感情的なハードルがあり、それを乗り越えなければならない。

黒人とラテン系の非ヘテロセクシャルの男性にとって、パートナーを持つことはオスカー賞に値するようなことだ（それを達成するのは非常に困難なこと）。その上に子供を持つことはさらに大きな飛躍だ。多くの困難を乗り越えなければ達成できない。カミングアウト、子供を持つためのリソースを調達する、有意義な関係性を維持することなど。

自分の両親が非伝統的であり、他の多くの黒人男性とは育てられ方が違っていたことをラッキーだと思う。アッパーミドルクラスで育ち、自分の可能性を感じる事ができた。静かにしていることを強要されなかった。それでも、自分が子供を持つことはある程度ラディカルなことだった。従来の「箱」の中に収まるなら、子供を持つ

ことはもっともっとラディカルなことになる。

**Q. 最後に。**

異性愛者ではない親に育てられている子供たちのジェンダー表現とセクシュアリティに関するいくつかの議論を知っている。息子たちは、もっと流動的なアイデンティティをもっていることに気づきました。たとえば、下の息子はハロウィーンの王女になりたいと思っていた。自分が持っていることをすべて教えることはできないことに気づいたが、その後、息子が王女になりたいという願望を社会的に否定されたが、自分はその願望を支持した。息子たちには、自分の体は自分のものであると教えている。

息子たちは、「彼/彼女はかわいい。多分、私は彼/彼女と結婚する。多分私は夫か妻を持つだろう」などと口走る。子供たちは自分や他人の意見についてより広い見解を持っている。息子たちを見るとき、自分の子育てと文化の影響を明らかに見とることができる。自分が何を言うか、何を言わないかが、子供たちの性的発達に影響を与えることを知っていて、それははるかに流動的なことであると思っている。現在、息子たちも自分のことをオムニセクシュアルだと言っている。子供たちは、望むものを選ぶことができるし、それは時間とともに変化するかもしれない。

**Mr. Kyle Phoenix**

セクシュアリティの教育者として活動している。自らのセクシュアリティを *omnisexuality* と位置づけている。母親の勧めもあり、友人の女性に代理母を依頼し、息子2人をもうけた。現在9歳と7歳のシングル父親。動画や書籍を通して啓発活動を行なっている。

(2022年5月)



## Photographer's gay father and twin boys.

### 写真家のゲイの父親と双子の息子

Interviewee

Mr. Bart Heynen

#### Q. 自己紹介をお願いいたします。

現在、ニューヨークを拠点に活動しているが、もともとはベルギー出身。同じくベルギー出身のロブ・ヘイヴァートと結婚している。10歳になる双子の息子、イーサンとノアは、カリフォルニアで代理出産と卵子提供によって生まれた。カリフォルニアの代理出産のエージェントが医療、法律、ロジステックなど総合的なサポートをしてくれた。卵子ドナーは別の会社で選んだ。全体的にプロフェッショナルで、サプライズもなく、ポジティブな経験だった。

バートもロブもビザをとってアメリカに住んでいるが、子供たちは2人ともアメリカとベルギーの二重国籍だ。

#### Q. 代理出産で親になるまでについて教えてください。

自分と夫は、14年前に結婚した。二人はずっと子供が欲しいと思っていたが、当初はゲイカップルである自分達には現実的ではないと思い、代理出産や卵子提供について何も知らなかった。しかし、エルトン・ジョンが利用した代理出産センター(CSP; Center for Surrogate Parenting)のことを知り、興味を持った。その頃、家族を持つ準備ができていたので(バート40歳、ロブ44歳)、CSPに電話をかけると、親切に説明してくれた。CSPは、この業界で30年近い経験を持っていた。代理出産の手続きはかなり早く済むと知り、驚いた。ベルギーでの養子縁組も検討

したが、非常に難しい手続きで何年もかかるという。二人とも、家族をつくるという展望に胸を躍らせた。ロブはどうしても実の息子を欲しがり、バートもその思いを認めて支持していたので、誰が実の父親になるかということでは一致していた。多くのカップルは、一人ずつ実子を持つことを選択するが、自分たちはそうしなかった。「あなたの子」「私の子」というようなことを避けるために、ロブに実の父親になってもらいたかった。今となっては、生物学的なつながりは関係ないと思っている。というのも、自分は子どもたちのことを強く思っているから。しかし、当時は、起こりうる問題を避けたかった。

CSPは代理母の重要性を強調する。代理母は子供を身ごもるが、地理的に遠く離れていることも多いので、妊娠中は毎週電話をかけることや、まずは直接会ってから手続きをすることを薦めた。CSPを通して代理母を紹介された。彼女は代理出産の経験があり、健康的で、代理出産で人を助けるのが好きな人だったので、とても安心した。3つの卵子が代理母に移植され、2人の子供が生まれた。

CSPは、営業や金銭などの問題を避けるために、卵子ドナー候補に会ったり、面接したりすることを望まなかった。ドナーを選ぶために経歴書や病歴書などが提供された。最初、別の卵子ドナーを選んだが、彼女は実子をゲイカップルに育てられたくないという理由で、依頼を断った。自分たちが同性愛者であることをすぐに公表してよかったと思った。そして、次のドナーを選んだところ、自己紹介の手紙を受け取ったとき、彼女はとても喜んで、「イエス」と言ってくれた。一度だけ卵子ドナーと会うことができたが、それはプロセスが始まり、代理母が妊娠した後だった。彼女との対面は楽しかった。彼女の両親もベルギー出身で、偶然とはいえ、嬉しい出会いだと感じ

た。子供の実の母親であるドナーに会うのに緊張していた。CSPは、子供たちが将来、成人した時に会える可能性があるので、一緒に写真を撮っておくように勧めた。

カリフォルニアの法律で、自分たちは息子たちが生まれる前から法律上の親として認められており、これは大きなメリットだった。

自分たちにとって代理出産のコストは制約ではなかったが、他の多くの人々にとってはそうだろう。ネブラスカ州で、代理出産をする経済的余裕のない一家に出会った。一方の男性の母親が代理母になり、もう一人の男性の妹が卵子を提供した。このような特殊な状況だったが、彼らはとても愛情深い家族だった。経済的な制約を克服するために、創造的な解決策を見いだしたのだ。

**Q. ゲイカップル/ゲイ男性の間で、代理出産で親になることは、どのような位置を占めていますか？ マイノリティでしょうか。特権的でしょうか？**

現在、ニューヨークやカリフォルニアを中心に、ベビーブームが起きている。年々、ゲイの親が増えている。もともとレズビアンは親はトラブルが少なかったが、今はゲイのカップルも家族を持つようになった。子供を持つことへの人々のモチベーションは非常に高い。子供を作るには5~6万ドルかかるが、欲しいという気持ちがあるなら、実行すればいい。

養子縁組を選ぶ人もいる。遺伝的な要素が動機になるかどうかは、その家族によって異なる。養子よりも遺伝的につながった子供を望む人の方が多いが、それは未知の世界を恐れているから。しかし、遺伝上の子供であっても、未知の世界に足を踏み入れることに変わりはない。

**Q. 代理母との関係性で予想外だったこと、心配だったこと、うれしかったこと、難しかったことなど。**

最初の頃、代理母に大きな借りがあるように感じていて、感謝の気持ちばかりが先走り、なかなか関係を築くことができなかった。それでも、それを乗り越えて、お互いに愛を分かち合う関係だと考えるようになった。時間はかかったが、旅の終わりには自分とパートナーは代理母と一緒に分娩室にいた。病院で代理母と同じ部屋にいたので、医師から夫婦と間違われることもあった。とても親密な関係になっていたのだ。

代理母は、赤ちゃんを無事に身ごもったこと、そして、子供を引き渡せたことに喜びを感じていた(彼女には3人の子供がいた)。

主な心配事といえば、卵子ドナーに関するものだった。例えば、「正しい」ドナーをどうやって選ぶか、など。ドナーのプロフィールはとても人間味のないもので、知らない人だから、怖いという気持ちが生じた。しかしそれでも、卵子ドナーが見つかったことは、とても幸運だった。

**Q. 子育てで大変なことは何ですか。子育てをしていて嬉しいのはどんな時ですか。手伝ってくれる人はいますか。**

分担はどのようになっていますか。異性カップルの場合と比べてゲイの親の場合、違いがある。

子供たちが生まれたとき、夫は仕事を続け、自分は仕事から離れ、家にいることにした。双子を授かったことで、最初の数カ月はとても大変だった。自分が家にいる男性であること、そして誰もが突然、自分のことを「女性の役割」を担っていると考えるようになったことに対処しなければならなかった。子供の世話をする女性はどこにでもいるが、子供の世話をする父親はいないので、ロールモデルを失った

と感じた。ちょっと脱男性化したような気がして、居心地が悪かった。結局、みんな異性愛の親に育てられたので、自分のジェンダーを無視しなくてもいいロールモデルを探しているのだろう。自分は男らしく、そう見られたいと感じている。子育ての役割に少しずれを感じていたのだ。これが、ゲイの家族を撮影し、本を作り始めた理由の一つだった。

息子たちは11歳になり、家族として円満に過ごしている。振り返ると、自分の母親は子育ての大きなお手本になっている。母親から学んだ多くのツールを使っている。

息子たちと一緒に朝食をとるときが一番幸せな時間だ。会話が弾むので、食事が一番やりがいがある。ヨーロッパの伝統的な朝食を食べると、子供たちはとてもおしゃべりになる。例えば、今朝はプーチンの話で盛り上がり、その問題を解決するために、息子たちはとんでもないアイデアを思いついた。子供たちと大人顔負けの会話ができることが気に入っている。息子たちが自分を親として本当に必要としていると感じる時、彼らに安心できる場所を与えられることが嬉しい。

#### **Q. masculinities と子供の世話をすることは、矛盾しますか？ 他の Gay Dads にとってはどうですか？**

今は息子たちが少し大きくなったので、矛盾は感じない。ニューヨークではナニー(乳母)がたくさんいるので、結局、赤ちゃんは女性の腕に抱かれることになる。最初、自分はそういう役割だった。ニューヨークでは、初対面の人にまず「あなたは何をしていますか」と聞く。赤ちゃんの世話をする人の価値はどこか低く、この高学歴のキャリア志向の世界では劣っているとみなされる。自分が写真撮影したゲイの家庭では、乳母のいる家庭といない家庭が半々だった。お手伝いがいる人も

いれば、完全に自分たちでやるという人もいた。

両親が男性だと、伝統的な性別の役割が溶けて、平等になることがある。ジェンダー役割が交換可能であるのはよいことだ。

#### **Q. 子供に対して、代理母や卵子ドナーのことについてどのように話してきましたか？ 子供は、父親二人の家族構成であることに、納得していますか？**

子供が生まれた後、2年間ベルギーに移住した。子供たちをベルギーで自分の子供として認めてもらうための手続きをしなければならなかった。最終的には、アメリカでは息子たちの法的な父親であるにもかかわらず、ベルギーでは養子縁組をしなければならなかった。そのため、1週間の養子縁組コースに参加することになった。コースで最初に言われるのは、家族が作られた経緯についてできるだけオープンにすること。もし、何か嘘をついて、後で子供がそれを知ったら、とても傷つくことになる。そのため、自分たちは、息子たちが質問してきたら、必ずオープンにするように心がけていた。息子たちが質問したときには、必ず率直に答えるようにしていた。ビジュアルでわかりやすく説明した。決して大げさなことにせず、秘密にもしなかった。

子どもたちは、他のゲイの父親にも見てほしいという思いから、自分が作ったゲイの家族についての本に協力してくれている。一般的にニューヨークでは、ポリティカル・コレクトネス(政治的正しさ)に大きな焦点が当てられている。また、息子たちの学校には同じような家庭の子供がいて、学校はとても寛容だ。最近の子どもたちは、多くのゲイと出会っていて、恥ずかしいと思うことがない。古い世代とはまったく違っている。彼らがアメリカの中部あたりで育っていたら、あるいはベル



ギーで育っていたら、おそらくかなり違っていただろう。

**Q. 子供にとって、代理母や卵子ドナーはどのような存在ですか？ 特別な存在？ 遠い親戚のような？ それほど関心がない？**

家では、卵子ドナーのことをミキ、代理母のことをレベッカと呼んでいる。彼女たちの写真は書斎にある。今のところ、子供たちは、卵子ドナーにも代理母にも特に興味はないようだ。

**Q. 遺伝的親ではないということは、家族内の立場で脆弱性を意味しますか？ どのように対処していますか？**

自分の方が子供たちと過ごす時間がとても長いので、実際には逆だ。遺伝上の親でないことの良い点は、子供たちの弱さに寛容になる傾向があるので、プレッシャーが少ない。距離を置いて物事をとらえることができる。

**Q. 親とは？ (伝統的)父性や母性についてどのように考えますか？**

親というのは、性別や性的指向に関係なく、子供の若い時期を導く人のこと。最初のうちは、それがとても大変かもしれない。しかし、親として大切なのは、その子のありのままを受け入れること。子どもは生まれたときからすでにその人なのだから。その子をそのまま受け止め、愛し、導き、経験を共有し、その子がその人らしくなるように手助けをしなければならない。

伝統的なロールモデルには、多くの期待が込められている。そのような高い期待を持ち、それを子どもに押し付けようとする人がいることを好ましく思っていない。オープンになって、子供自身の興味を刺激しようとするなら、子供の気質に逆らう代わりに重要な戦いに勝利したことになる。あまり

型にはめようとしないうほうが良いと考えている。その子の個性に合わせ、育て方を変えていかなければならない。例えば、息子のイーサンは学習障害があり、そのことが多くのことを教えてくれた。イーサンは、普通の子どもとは違う。イーサンが通っている学校は、視覚的な学習が多く、自分の感情を率直に表現するところなので、イーサンは他の子よりずっと上手に自分を表現することができる。

**Q. 家族の定義や範囲について教えてください。代理母や卵子ドナーに子どもがいたら、そのような人も家族や親戚にカウントされますか？**

代理母や卵子ドナーは家族の一員ではない。もしかしたら、後年、子どもたちが彼女らに会って友達になるかもしれないが、今のところ、彼女たちを取り込もうとすると混乱しすぎると考えている。

卵子ドナーはそれを望んでいない。バートとロブは代理母と時折、連絡を取り合っている。しかし、それほど親しい関係ではない。彼女は現在、ネブラスカに住んでいる。

**Q. 代理出産について、代理母の搾取だという批判もあります。このことについて、意識しましたか？**

家族を作ろうと考えたとき、この問題をあまり考慮しなかった。ベルギーでは商業的な代理出産は合法ではない。強制されない限り、すべての女性が自分で選択することができ、それに応じてサポートされ、報われるべきだと考えている。もちろん、保険にも加入しなければならない。専門機関を通せば、こうした面はすべてカバーされる。ウクライナやインドのような国では、非常に搾取的であり、これは受け入れがたいことだ。しかし、アメリカ

では女性の選択であり、強い枠組みがある。

代理出産は非倫理的だという批判があるが、そうは思わない。当事者たちが精神的に健康で、自分が何をしようとしているのかを十分に理解しているのであれば、それは当事者たちの自由。もし、各国が国民にもっと多くの選択肢を与えることを考慮できれば、利点があるはずだ。しかし、アメリカは現在、この点で後退している可能性がある。

一番大きな要因はお金。ウクライナで代理出産をした人を知っているが、価格はアメリカより30%ほど安いだけ。エージェントの専門性などにはアメリカとウクライナでは大きな差がある。だからこの選択の理由はお金しかない。

**Q. ニューヨークに居住されていますが、この地域では、ゲイカップルの代理出産依頼や子育てに対してどの程度理解がありますか。マイクロアグレッションはありますか。**

ニューヨークでマイクロアグレッションを経験したことがない。それどころか、ここではとても歓迎されていると感じている。ベルギーでも差別を受けたことはない。

成熟した職業人なので、ゲイだからと言ってあまり差別された経験がない。夫はウォール街でかなり著名な人物で、いつも自分を夫として紹介してくれる。最初は少し驚くかもしれないが、それだけ。

子供たちがまだ小さかった頃、イギリスに旅行したとき、国境でたくさんの書類を見せなければならなかった。当時はとても差別されていると感じたが、今は状況が変わっているのではないかと思う。

**Q. 代理出産で親になろうとするゲイカップルに対してどのようなアドバイスがありますか。**

1. 親になることは大変なことなので、賢明に検討しなければならない。
2. 経験豊富で、医学的、法的な枠組みを提供でき、代理出産候補者を多く抱えているエージェントを探すこと。エージェントに対して信頼がおけるかどうか重要。自分でやろうとした人が苦労したという話をよく聞く。
3. 自分なら友人に代理出産を依頼することはないと思う。そういうことをしたらもっと複雑になるから。明確な境界線があるプロフェッショナルな取り決めによって、距離を置く方がずっと簡単。その場合、代理母の医療費に加え、毎月の支払いがあった。また、弁護士費用やエージェントの手数料も負担した。それは透明で明確なプロセスだった。

**Q. その他。**

今、カメラマンとして仕事に復帰している。必要なときはナニーに手伝ってもらうが、それ以外は自分と夫ですべてをこなしている。

(2022年10月)

### **Mr. Bart Heynen**

ベルギー出身、フリーランスの写真家である。現在は夫と 10 歳になる双子の男の子とニューヨークに暮らす。カリフォルニアで代理出産と卵子提供により、42 歳で双子の男の子の父親となった。

2021 年には、2016 年から 4 年間にわたってアメリカ中のゲイの父親像を記録した写真集『Dads』を出版した。

写真集：

Bart Heynen 2021 『Dads』

**Right to know of donor conceived in the  
state of south Australia.**

**南オーストラリア州における  
出自を知る権利**

**Interviewee**

**Dr. Damian Adams**

**Q. ご自身の経験について教えてください。**

南オーストラリア州で生まれた。親は自分がドナーから生まれてきたことを早い時期(大体3歳くらい)から教えてくれた。ドナーと初めて会ったのは2年前のことで、6月前にクイーンズランドで会った。

15歳になったとき、個人を特定しない情報を得る権利を得たが、クリニックから記録は失われていると言われた。その何年かあと、大学生の時に感染症にかかり、ドナーの医療情報をもっともらったほうが良い医者からアドバイスを受けた。それでクリニックに問い合わせをしたが、記録は破壊されていると言われた。最初に聞いたときと違う回答だった。数年後、病院は情報を提供すべきだという要望書を提出した。そしてわかったのは、自分は嘘を付かれていたということだった、これはドナーから生まれた人の間でよくあるシナリオだ。

自分が見た記録には二桁のドナーコードが振られていた。このコードはドナーの名前に関係していると考えている人もいる。おそらくはほとんどのドナーは医学生なので、医学部学生の記録を探したが、自分のドナーコードにあいそうな名前を見つけることはできなかった。

その何年か後、DNAテストを受けた(6箇所かそれ以上、いろいろな会社)。Y染色体の検査から、何人かの人とマッチングした。そして、そのうちの1

人の名前が、おそらくドナーコードに一致しているようだった。最終的に、ドナーのおじにあたる人にDNAテストをお願いすることができ、無事、ドナーを確定することができた。

ドナーの家族はとても大きく、何人かは死亡していたものの、ドナーとも連絡をとることができた。ドナーは南オーストラリア州の人ではなく、提供のために南オーストラリア州を訪問していたようだった。

**Q. クリニックにドナー情報を問い合わせたときの経験を教えてください。**

あまりよい経験とはいえなかったが、多くのスタッフはとても同情的だった。記録はあまりよい状態で保管されていないと言われた。ただ、出産の記録に関してはかなり詳細だった。

**Q. DNAテストに関してどんな感想をもっていますか？**

DNAテストの経験はポジティブで興味深いものだった。プロセスは結構早く進むものもあれば、数年かかるものもある。将来のための投資だと思っている。DNAテストはドナーから生まれた人たちのコミュニティにとって大きな朗報だと思っている。

**Q. ドナーの情報がなかったらどんな問題が生じますか？**

ドナーから生まれた人たちは、ドナーの情報を必要としている。その理由は以下のようなものだ。

- ・ドナーの家族とつながりを持ちたい、自分がどこからきたのか知りたい
- ・家族の歴史を知りたい
- ・医療に関わる自分の情報がない不安
- ・近親婚を避けたい

自分の子どもをもったとき、ドナーを知りたいという欲求は激しくなっ

た。ドナーと繋がりたいと思った。実の父は、10歳の時に亡くなった。両親はとてもオープンマインドな人たちで、とくに母親はとてもサポートしてくれ、法律の改正を求める活動も支援してくれた。ドナーの家族もまた、支援してくれた。

#### **Q. 南オーストラリア州で遡及的開示に対する医療界の態度を教えてください。**

あまりはっきりとした態度を示さない医療者も多い。概して、遡及的な開示には反対だと思う、提供時にドナーに匿名を約束しているのだ。しかし、医療者は当時、個人情報を開示するという選択肢をドナーに与えていなかった。いくつかの文献では、ドナーの気持ちは時間とともに変化することもある。それに当時の同意書は、契約書の要件を満たしていない。そもそも、まだ生まれていない子供の同意を取っていないのだから。

それに、医療界はオーストラリアの法律ではプライバシーは絶対的ではないということを知らなければならないと思う。ドナーから生まれた人たちの中には健康上の深刻な問題を抱えているもいて、彼らはドナーの情報が必要だ。

#### **Q. 2005年よりも前に生まれた人はドナーの情報をクリニックに問い合わせをすることになっていますが、クリニックではどのような対応をしますか？**

南オーストラリア州では、2005年以降に生まれた人は法律的にドナーの個人を特定できる情報にアクセスする権利がある。1988年以降、ドナーから生まれた人は個人を特定しない情報にアクセスすることができるので、情報が保管されているかどうか、クリニックに直接問い合わせをすることになる。

南オーストラリア州では、Queen Elizabeth Hospital と Flinders Fertility

がメインのクリニックでそれ以外にも医師が個人で運営している病院でも行われていたが、その記録は破壊されているものもある。

一般的にクリニックに直接問い合わせをして情報を得られるかはケースバイケースだといえる。いくつかの情報は大学に移され、そのあと州に渡されたものもある。記録が移動しているのでアクセスが難しい場合がある。クリニックが売却されるというような場合、その際に記録が失われてしまうこともある。

#### **Q. 現在クリニックに保管されている情報はどんな状態でしょうか？(開示を恐れる医療スタッフによって)破壊される恐れはないでしょうか？**

法的にアクセスが認められた人たちはもちろんよい状態の情報にアクセスできる。しかし80年代、90年代の情報の質はおそらくかなり悪い。

自分が知っている例で、ある個人病院の医師が記録を破壊したと聞いた。しかしその理由はわからない。

#### **Q. VIC州で遡及的開示に成功し、NSW州で失敗した理由は何だと思えますか？またSA州で遡及的開示がなされる可能性はあると思えますか？**

VIC州はこの分野では世界のリーディングケースだからだろう。VIC州で最初に法律ができたのは80年代に遡る。彼らはよりオープンで、ドナーから生まれた人たち、活動家の声も一番大きいから。

NSW州では、最近まで法律がなかった。SA州では、レジスターに関して法律改正がなされた。法律には「大臣はレジスターを維持しなければならない」と書かれている。しかしこれでは、政府が全ての利用できる情報をまとめる義務があるのかどうかはわからない。もしそうだとしたら、それは遡

及的なものになるだろう。しかしはっきりとしない。

**Q. ロビー活動の状況について教えてください。**

自分自身は、昨年、国連で子供の権利に関する年次会議でドナーから生まれた子供として発言した。

アドボカシーのグループとして、Facebook に色々なグループがあるが、プライベート設定になっているものも多い。自分が参加している一つのグループは 400 人もメンバーがいる。大臣や政府の役割に物申すためには、こうしたグループの力は必要だと感じたから。

Donor Conception Support Group of Australia というグループが有名だが、主要な活動家はもうあまり熱心に活動していない。自分は今は公的なグループからは身を引いている。

**Q. ドナーから生まれた人のなかで、ドナーにどうしても会いたい人と、あまり関心がない人がいます。なぜそのような違いが生じるのだと思いますか？**

いままでたくさんの人と話しをしてきた。ビクトリア州では contact preference を出すことができる。しかし、VARTA の調査ではほとんどのドナーはコンタクトを受けてもいいと答えている。

ドナーから生まれた人のなかには、ドナーに会いたいといえば家族が傷つくだろうと考えている人もいる。一方ドナーの方も、子供がお金や財産を要求したりするのではないかと誤解している人もいるかもしれない。

**Q. DNA テストの良いところと悪いところは何か。**

(良い点)

・クリニックでドナーの記録が失われていてもドナーを見つけることができる。

・レジスターではマッチングできないドナーきょうだいのマッチングが可能。

(悪い点)

・レジスターシステムの方が、明瞭にアクセスできる

・レジスターシステムの方が、カウンセリング体制が整っている。

・レジスターシステムの方が、情報の伝達がスムーズに仲介される。

・いろいろな DNA テストがあり、方法によって検出力が違っている。

**Q. VARTA はパターンリズムだと批判する人もいますが、どう思いますか？**

そのように捉えている人がいるのを知っている。たぶん組織があまりにもコントロールしようとしすぎているからだろうと思う。良い面と悪い面とがある。自分としては DNA テストに傾いている。というのは望まない接触を防ぐ法律は既に VIC 州で存在しているから。必ずしも公的機関に頼る必要はない。

**Q. ドナーから生まれた人にとって、ドナーはどのような存在なのでしょう？ (いろいろなケースがあると思いますが)**

ドナーを見つけることは自分にとって人生の穴を埋めるようなものだった。今はドナーに会えたので、自分の外見、特徴、興味、態度がどこから来ているか確認できる(もう 30 年来求めていたことだ)。この認識(またはその欠如)がいかに深くその人に影響を与えているか、説明するのが難しい。ドナーに会えてから、自分の人生に集中でき、穏やかになった。

ドナーを見つけたことにより、他の家族にもアクセスできるようになった。家族は自分が誰かを知るために最

も核となるものだ。ドナーとはコンタクトをとり続けている。

**Q. SA 州で法律が変わってからドナーの数や属性に変化はありましたか？**

SA 州では 2005 年からドナーの匿名性は廃止されている。そのことがドナーの数などにインパクトを与えるかどうか研究を行なったことがある(Damian Adams et al. 2016)。ドナーの数が減ったという主張はあるものの、自分の研究では、実際には増えている。なぜそうなったかはよくわからない。たぶんリクリートの方法を変えたからではないだろうか。だから匿名性はドナーの供給に関係がない(UK でも同じ結果だった)。

昔は医学生が圧力を受けて提供したというような話があった。でも実際には全てが医学生のドナーではなかった(レシピエント家族にはそのように伝えられていたかもしれないが)。

ドナーの年齢は上がっている。たぶんドナーの多くが自分の子供がいて、配偶子の必要性を理解し、提供精子を必要としている家族に対する共感があると考えられる。

**Q. ドナーとドナーから生まれた人の間でトラブルは聞いたことがありますか？**

**Contact Veto は必要だと思いますか？**

自分の意見では contact veto に対して反対だ。そんなものがどうしても必要だとは思わないが、それがあつて安全だと感じる人もいるのだろう。

養子の法律が遡及的な開示を認めたとき、contact veto が導入された。成果はたいしたものではなく、contact veto の大部分が取り下げられた。

**Q. これから研究したいことは？**

ドナーから生まれた人の長期の健康や福祉に与える影響を懸念している。

多くの研究が心理的な問題に焦点を当てていて、身体的な健康に対する影響を無視している。ドナーから生まれた人の多くが、そのことを知り、ドナーに会いたいと願うということからすると、そのような研究バイアスの存在は理解できるが。

(2022 年 4 月)

**Dr. Damian Adams**

南オーストラリア大学の Mawson Institute で助教をしている。

論文

Dr Sonia Allan, Damian Adams and Stephanie Raeymaekers. Donor-conceived and surrogacyborn children's rights in the age of biotechnology. BioNews (2020 年 1 月 27 日)

Marilyn Crawshaw, Damian Adams, Sonia Allan et al. 2017 Disclosure and donorconceived children. Human Reproduction.32(7):1535-36.

Sonia Allan and Damian Adams. All donorconceived people in Victoria now have the right to donor information. BioNews (2016 年 2 月 29 日)

Damian H Adams, Shahid Ullah and Sheryl de Lacey. 2016 Does the Removal of Anonymity Reduce Sperm Donors in Australia? Journal of Law and Medicine 23: 628-636.

**Speak out from donor conceived individual in Australia.**

**スピークアウト 精子提供で生まれた Myf**

**Interviewee**

**Donor Kinderen (Myf)**

**Q. 精子提供で生まれたことを知ってから、ドナーを発見するまでの経緯を教えてください。**

現在 40 歳で、メルボルンに住んでいる。子供はまだ小さい。法律関係の仕事をしている。同じドナーから生まれた弟がいる。

20 歳くらいの時に、両親が離婚したことをきっかけに精子提供で生まれたことを知った。1980 年にメルボルンの Royal Women's Hospital で行われた精子提供で生まれた。この病院では 1976 年から精子提供が行われている。

当時、ドナーについてほとんど情報を得ることができなかった。クリニックに問い合わせをしたら、あなたには情報にアクセスする権利がないと言われた。最終的に、強制的にカウンセリングが実施されたのち、ドナーを特定しない情報だけ入手することができた。

その情報を得たあと、さらにクリニックにプレッシャーをかけて、ドナーを探してくれるよう頼んだ。彼らの回答は、そういうことはしないということで、非常にパターンリスティックだった。そこで、電話帳で追跡して、ドナーに連絡して同意をもらってほしいと頼み込んだ。クリニックは結局ドナーを見つけることはなかった。

さらにやったことは、クリニックの倫理委員会に申請書を出して、ドナーの情報を VANISH に渡してほしいと依頼した。自分の申請書は却下された。クリニックから得られた情報は、ドナ

ーコード、血液型、提供時に既に 2 人の子供がいたこと、またドナーきょうだいが 3 人いるということだった。そのあと、オーストラリアの Donor Conception Support Group (DCSG) に参加した。2001 年に 11 月に約 24 名のドナーからの出生者がシドニーにあつまる全国集会があった。そこで、法改正を求めて政治活動していくことを決議した。自分はメディアに訴えて世論を喚起することに努めた。例えば The Australian Newspaper など取材を受けた。当時、社会一般の雰囲気は、遺伝的父親の情報が欲しいという自分たちの主張に対しては保守的な態度だった。

最終的に新聞記事に載ったのがきっかけで、ドナー(Michael Lynden)に会うことができた。彼の方も私に会いたいと思っていたようだ。提供したあと、名前を変えていたので、クリニックは彼を見つけられなかったみたいだ。

その後、People Conceived via Artificial Insemination(PCVAI)にも参加した。英国で行われた Rose vs. EWHC の裁判例にも関わって、証言をした。この裁判は、ART や donor-conception の法的側面に対する関心を喚起した。ラウンドテーブルへ参加したり要望書を提出したり、議員に会ったり、国会で証言したりもした。そしてそのような活動が功を奏して最終的に 2017 年にビクトリア州の法律は変化した。

**Q. クリニックの対応はどうでしたか？**

クリニックとのやりとりはめちゃくちゃストレスフルだった。法的観点からは情報の開示を妨げるような契約書は皆無だったものの、クリニック側はできない理由をあれこれつけてくるのが常だった。

**Q. ドナーとの対面は、遺伝的繋がりを確信させるものでしたか？**



自分にとっては、まさにそうだ。ドナーと会って、自分の遺伝的背景を知ったことで、自信を持つことができるようになった。自分はドナーと多くの面でそっくりだった。

自分がどこからやってきたかを知るのは、自分が誰かを知る、重要なパーツだ。自分がドナーから生まれたことを初めて知ったとき、崩壊し、極度の自己喪失を経験した。

自分の自尊感情はそのことに強く規定されてきた。いつも育ての親とは似ていないことで、家族とつながっていないと感じていた。外見について、そして、自分は誰かということについて、不安を生み出していた。遺伝的父に会ってから、自分に自信を持てるようになった。

**Q. もし、小さい時から告知されていれば、ドナーや代理母にそれほど強い愛着を抱くことはないと感じますか？**

自分はそうは思わない。子供の頃から知らされていてもドナーから生まれた事実は変わらない。自分の系譜に対する興味は、人生の中で強くなったり弱くなったりしながら続いていくものだ。

**Q. 親から告知され、代理母やドナーの情報をきちんと得られる体制を整えば、この技術は利用されて構わないと言えますか？どのように実施すべきでしょうか？**

自分の考えでは、最初からその状況について知らされていたなら、はるかに良い状況だっただろうと思う。そうすれば、自分やドナーきょうだいたちは互いに支え合うこともできる。

医学的に重要な情報がドナーから生まれた人にはないことも大きな問題だ。例えば、自分の場合、ドナー側の家族には乳がんのリスクが高い。

政府は法律を作り、法律を変えるべきだ。子供は情報にアクセスする権利がある。

それは、誰と関係しているか、誰が関与したか(ドナー/代理母)を知る権利も含まれている。最初からその情報は出生記録に記入すべきで、それは本人だけが閲覧できるようにするべきだ。それは、告知を義務付けることになる。そして恥や秘密を取り除くことにもなる。

自分の考えでは、donor-conceptionはオープンアダプションのような形で実施すべきだと思う。しかし、これはとても不都合(inconvenient)だと感じる人が世間には多いのも事実だ。その意味は、人々は、伝統的な西欧の考えに基づいた、家族とはこうあるべきだという保守的な考えを持っているということだ。オープンで正直であることが将来の子供の権利を擁護するために絶対必要だと思う。

**Q. 子供は、(本来)遺伝的繋がりがある家族で育てられるべきでしょうか？**

非伝統的な家族でもかまわないと思う。だから同性カップルが(donor-conceptionを利用して)子育てしても全然問題ないと思う。どの家族が他の家族よりいいということはない。しかし、意思決定の際、子供は遺伝的親を知るべきだということを明確にすべきだと思う。

**Q. 出生証明書に、ドナーの名前が記載されるべきですか？**

ドナーの記録は出生証明書や出生記録に記載すべきだと思う。それは本人だけが閲覧できるようにすることが不可欠だ。そうしなければ、その出生証明書は端的に言って嘘だということになる(それは法律違反と同じこと)。

**Q. 現在、当事者グループの中で様々な立場の人がいます。意見の相違は見られますか？**

ビクトリア州では情報へのアクセスに関していくつかの層が存在してきました。法改正以降に生まれてアクセス権がある人もいる一方、1988年以前に生まれた人にはその権利がなかった。議会でそのような状況を存続させるべきではないと証言し、2017年に格差は撤廃された。自分はグループの中で意見の対立があるとは思っていない。皆、同じ目標を持っている。

**Q. ドナーは家族の一員ですか？**

自分にはたくさんの半きょうだいがいて、皆ドナーの家族に好意的に迎え入れられた。何人かの半きょうだいとはとても仲良くしている。ドナーの父親のことをファーストネームで呼んでいる。

**Q. ドナーや代理母と、どのような交流のあり方が理想ですか？**

個人的で人格的な交流が必要だと思う。自分とドナーのマイケルはとてもよく似ていて、自分の人生に私が関係するのを歓迎してくれたのは良かった。反対に、ドナーともっと一線を引いた付き合いをしている友人も知っている。自分の考えでは、相手に期待しないこと、オープンで正直で親切、純粹で敬意を持って相手に接するのがいいと思う。

**Q. 生殖ツーリズムについてどのような法律やルールが必要ですか？**

生殖ツーリズムは残酷だと思う。先進国で規制を少なくすれば、海外に行くことが少なくなるというのは誤解だ。例えばUSAでは何ら法律はなく、ドナーは国内で調達できるが、人々は

それでももっと安い国へと出かけていく。

生殖ツーリズムの結果生まれた子供たちは代理母やドナーを知ることはできないだろう。だから生まれる前から子供たちは人権を侵害されていて、それを取り戻すことすらできない。自分は非常に懸念している。

オーストラリアでは、規制があるが、それにも関わらず、有償ドナーが使われている(アメリカやウクライナのドナーを輸入している)。そうすると、将来、ドナーから生まれた人たちは、ドナーはお金をもらって提供したということを知るだろうし、その事実は、ドナーと交流する可能性を奪うことに等しい。それはビクトリアの法律からみて問題ないのだろうか？ インフォームド・コンセントは取られたのだろうか？ 色々な疑問がある。

形式上、規制は可能だが実際には非常に難しい。ARTを提供するクリニックは、無節操だ。最終的には人が誕生するのだから、その人の権利と利益を考える必要がある。

国連でのスピーチの後、国連の子供の権利委員会に提出された、いくつかの文書の草案に関わった。しかしCOVID-19があり、その後あまり進捗していない。

(2021年5月)

**Donor Kinderen (Myf)**

2019年11月19日に国連で行われたスピーチ(Presentation UN 19 Nov 2019 Donor Conceived and Surrogacy Born Person)  
生殖テクノロジーとヘルスケアを考える研究会[忘備録]「国連でのスピーチ: ドナーからの出生者の声(2019年 Genova)」

## Donor detective in volunteer.

### ドナー捜索のボランティア

#### Interviewee

#### Donor Children(Matt)

#### Q. サイトを設立するまでの経緯について教えてください。

アメリカ中西部で1986年に生まれた。両親は異性愛者でキリスト教の家庭で育った。精子提供のことを知らされておらず、育ての父親を長い間、実の父親だと信じていた。しかし、父親の家族から切り離されたような感じがして、アイデンティティの問題を抱えていた。何か不自然なものを感じていた。思春期の12歳のころ、家族と一緒にジムを訪れ、その時、父親と身体面で似ていないことに気がついた。徐々に疑問を抱くようになり、自分を喪失するような感じに陥った。その後、大学では航空宇宙工学を学び、エンジニアになった。その間もずっと自分のアイデンティティについて悩んでいた。

21歳で結婚し、25歳で最初の子供が誕生した。子供を持ったことがきっかけで、自分の出自についての疑問が再び大きくなっていった。自分の父親は、精巣癌を患ったために子供を持つためには何らかの援助が必要だということを知っていた。両親はカンザス大学医療センター(UKMC)のサービスを使用した。しかし、これが精子提供のことだとは知らなかった。

父親にアプローチし、2012年6月6日、父親とは遺伝的に繋がっていないことがわかった。ものすごくショックを受けたが、合点がいった。ドナーは匿名で、自分と妹のケイティの両方に使われていた。

それから、遺伝的父親を見つける旅が始まった。母親から同意をもらって、UKMCの医療記録にアクセスすることができた。しかし、利用可能な情報は非常に薄っぺらいものだった。最終的にDNA検査サービスに頼った。Donor Sibling Registryに登録したが、これはお金がかかる上に全く効果がなかった。とてもフラストレーションが溜まった。

最終的にDNA検査で2013年に遺伝的父親見つけた。4番目に遠い、いとこを経由して。

#### Q. このウェブサイトの運営状況について教えてください。

2013年から活動している。このサイトは会費無料で運営している。当事者のソーシャルネットワークとして、グループを作成したり、写真や文書を共有したり、複数の人にメッセージを送れる。コミュニケーションを作ることが目的。このサイトには、KLMCクリニックで生まれた人たちのコミュニティもあって30人以上が集まって情報交換している。

色々なDNA検査サービスを利用してドナーを探すための手伝いもしている。彼らをサポートして繋がりを作る手助けをしたいと思っている。

このウェブサイトはドナーから生まれた人たちの基礎資料を作るのに役立っていると思っている。この問題を研究する研究者やメディア関係者が参加して自由に情報を収集してもらえばいいと思っている。

だから、メンバーシップやサービス料はかからない。寄付で賄っている。また、誰かがサイト上のリンクを通じてDNA検査を購入したときにわずかな手数料を受け取っているだけだ。サイトを運営し、他の人を助けることは、自分にとっても癒しの旅となっている。

そのサイトを作ったお陰で、様々なフォーラム(例えば、国連、マルタ議会、フロリダ州上院など)で講演するために招待されたりもした。

**Q. DNA 検査を利用した場合、どのくらいの確率で見つかりますか?**

何人が遺伝的家族を見つけたかのデータはないが、自分が個人的に支援した人は全員がドナーを見つけることに成功している。可能性を高めるには、すべてのデータベースに登録することが重要だ。自分は7箇所に登録した。サイトへの登録料はどんどん安くなっている。しかし、データベースの有効性は地域によって異なる(例えば、データが最も多いのは米国)。また、サイトを効果的に使用するためのノウハウも重要だと思う。

**Q. DNA 検査で見つけようとする場合、お互いに不快な思いをすることはないでしょうか?**

そのようなことはよくある。このような話は、Facebookの当事者グループなどでしばしば共有されている。自分の経験もかなりネガティブなものだった。最初に直面したのは、ドナーの過去だった。彼は刑務所に入っていたことがあり、医師免許を剥奪され、数百人の子供の父親になったなどと言われていた。

遺伝的父親との関係は、始めは緊張していたが、だんだんと打ち解けて親しくなり、直接会ったのは2回。自分はドナーのことを父親(father)だと思っている。

**Q. 遺伝子検査のメリットとデメリットを教えてください。公的な管理機関が必要だと思いますか?**

データベースは複数ではなく、1つに絞ったほうが効率的だが、アメリカ

人としては、自由な市場によってコントロールされたほうが良いと思う。自分の情報を共有することを恐れている人が多い。自分は政府がこれらのサービスをコントロールすることを望まない。商業的DNA検査は、有用な健康情報を人々に提供してくれる。過去にはFDAがそうした情報をコントロールしようとしたこともあったので警戒している。

1人の男性が提供できる回数に制限がないので、すべてのクリニックを包括する全国的なデータベースがあればとても有用だと思う。それは、ドナーの多様性を確保するのに役立つ。そうは言っても、自分はこの業界をサポートしたいわけではない。

**Q. ドナーに興味を持つ人もいれば、一方で全く興味がない人もいますか?**

知りたいという気持ちや、知りたくないといったことは、その人の世界観や、血縁と家族についての社会の見方、そして現実を直視する勇氣があるかなどに影響を受ける可能性が高いと思う。答えはひとつではない。自分は遺伝的父親を見つけようと強い決意をもってしたが、妹は、遺伝的父親について知れば、自分の人生に(大きな)インパクトを与えるのではないかと恐れていた。

ドナーから生まれた人々は、自分より他人のニーズを優先する傾向があると思う。多くの場合、彼らは、自分の家族やドナーの家族を混乱させたくないと思う。だから家族には秘密でドナー(やドナーきょうだい)を探そうとする。

**Q. 米国を含め、匿名ドナーを認めている国も多くあります。匿名性を禁止する法律を作るべきでしょうか? それとも親が選べるようにするべきでしょうか?**

DNA 検査があるので匿名性は現実的には不可能だ。

匿名性は禁止すべきだと考えている。しかし、葛藤も感じる。というのは規制をするということは、その行為を認めるということに他ならないし、何がしか倫理的だと認めることになるから。

米国では第三者生殖に関して説明責任は果たされていない。お金の事ばかりで、社会や生まれてくる人のことは考えていない。

自分が誰かを知る権利が全ての人にある。第三者生殖を利用するという親の決定は、自己中心的なものだ。依頼親は、この技術が不妊の問題を解決するという‘嘘’を売られているのだが、(不妊であるという)現実は何も変わっていない。

自分がドナーによる出生者だと知ってから、育ての親との間には大きな対立があった。

#### **Q. 米国では、ドナーの情報はどうに保管されていますか？**

自分が住んでいる米国ミズーリ州では、クリニックが閉鎖されたり、廃業したりすると、記録が失われたり、破壊されたりする。説明責任はほとんどない。

自分の経験は、非常にネガティブなものだ。アクセスできた記録はまばらで、ドナーに関する情報はほとんどなかった。

William J Cameron は UKMC の不妊治療医だったが、晩年、アルツハイマー病になった。そして、家に保管していたドナーの記録を全部燃やしたと聞いた(※おそらく医師はドナーの少なくとも一部だったので一日比野註)。真実はわからない。

#### **Q. ロビー活動はありますか？ どのような？**

The Centre of Reproductive Medicine が、誰がドナーになれるかに関する法律を作るためにロビー活動を行った。その法律があれば、不妊治療の医師がドナーになることを防ぐことができるだろう。

例えば、知り合いの Eve Wiley は、ドナーによる出生者の権利のために複数の州間で強力なロビー活動を行ってきた。彼女の母親の主治医の産婦人科医は、母親から同意を得ないで自分の精子を使って人工授精をした。

#### **Q. ドナーのことを何と呼びますか？ 育ての父のことは？**

遺伝的なつながりは自分にとって一番重要。近々、ドナーのファミリーネームに正式に変更する予定だ。次のように呼んでいる。

- ・ドナー = 父(father)
- ・育ての父 = 継父(step-dad)  
(家で‘Dad’ と呼ぶこともある)
- ・ドナーからのきょうだい = 兄(brother)  
または姉妹(sister)

#### **Q. donor-conception は禁止すべきですか？**

第三者生殖は現代の人身取引だと思う。多額のお金がかかり、お金で誰が生殖することができて、誰ができないかが決まる。

自分がネガティブな経験をしただけでなく、他の人が同じように苦しんでいるのを見てきた。第三者による生殖は有害だ。自分の遺伝的背景の半分しかわからない人をつくり出しているのだから。それは究極の虐待と言えるし、家族を蝕んでいる。

#### **Q. 子どもが小さい頃から繰り返し説明するのが良いとされていますが、これが最善の方法ですか？**

子供には十分な情報を提供すべきだと思う。秘密は信頼関係を損ない、関係は壊れる。親はアイデンティティに関する情報を子供に提供するためにできる限りのことをすべきだ。

**Q. 知らない方がいいという人はいますか？**

知らないことを好む人もいるかもしれないが、それはまれなケースだろう。多くは、ドナーから生まれたという事実に苦悩し、ドナーを見つけようとして、痛み、怒り、裏切られたという感情と闘っている。

**Q. ドナー兄弟が沢山いることは、当事者にとって歓迎すべきことでしょうか？**

全然思わない。無責任極まりない。

遺伝的父母が同一の妹の **Katie** のほかにもいるドナーきょうだいについて知りたいと思っている。ドナーきょうだいの一人、**Blake** とはとても親しくなったが、子供の頃から取り合っていたならもっとよかったのと思っている。

遺伝的に近いドナーきょう代いは、性的に惹かれやすいかもしれないという問題があり、近親婚のリスクが高くなるかもしれないと思っている。

(2021年5月)

**Donor Children (Matt)**



**Speak out from donor conceived  
individual in Belgium.**

**スピークアウト ～ベルギーの Steph～**

**Interviewee**

**Mr. Steph Raeymaekers**

**Q.自己紹介**

ベルギー出身で、現在 42 歳になる。ヘテロセクシャルだった両親は 8 年間子どもに恵まれず、父が不妊であると診断された。両親は不妊治療のパイオニアの一人として知られたベルギーの医師のもとを訪ねた。そこで、外見が父に似た精子ドナーを「解決策」として提案された。そのドナーは、健康な実子をもつ既婚者であるという保証が

ついていて、両親は「セット販売」を提案された。定額で何度でも人工授精できた。母は 2 回目の人工授精で私たち三つ子を妊娠した。私たちは女 2 人、男 1 人の三つ子として 1979 年の 1 月に生まれた。その際、医師は両親にドナー提供によって生まれたことを決して伝えないように助言していた。

ところが、私たちが生まれた 3 年後に母は父との子を自然妊娠した。父は、不妊であると診断した医師や、精子提供を勧めた母にだまされたという思いを抱いたようだ。毎日、三つ子の顔を見るたびに、この子たちは自分の子ではないのだと感じていたのだろう。父は、私たち三つ子とは距離を置いていたのに対し、下の弟とは、より親密な関係を築いていた。その中で、自分はずっと拒否されているように感じていた。

実子をもうけた父は、三つ子はいらなかったという気持ちと葛藤していたのだろう。父は仕事に没頭していった。だから子育ては母ひとりの肩に重

くのしかかってくる。それは母にとってもしんどいことだった。彼女も精神面で問題を抱え、それが子どもへの虐待（家庭内暴力）につながった。

高校時代に血液型について生物学の授業で学び、自分が父の本当の子どもではないことを知っていた。母はそれを否定したが、最終的に精子提供の事実について知った時には、さすがに驚いた。

25 歳の誕生日に、三つ子の兄弟から、精子提供によって生まれたと聞かされた。最初は冗談だと思ったが、徐々に現実を理解していった。(父の実子の)弟はそれを知ってとても困惑していた。まるで自分のきょうだいを失ってしまったように感じたのだろう。根本的に何かが変わったわけではなかったが、この事実によってやはり何かが変わった。

この時期に、私はパートナーとの子をもうけようとしていた。なかなか妊娠しなかったが、ついに妊娠した。今は、息子一人と娘が一人いる。子どもを持ったことで自分の出自を知りたいという気持ちをもっと強くなった。長い間、私もきょうだいたちも、精子提供で生まれた人たちが他にもたくさんいるということ知らなかった。ベルギーには子どもの権利について法律がなく、子どもは取引の対象とされている。

私はドナーを探したかったが、どうやって探せばよいかわからなかったし、今の状況に満足すべきだと人からは言われたのでなかなか踏み出せなかった。しかし子どもを持ったことで、ドナーを見つけないという気持ちに火がついた。子どもたちにもドナーの一部が入っているから。また、パートナーが自分の異母きょうだいなのではないかと不安になったりもした(実際はもちろん違う)。自分の子どもを見ると、自分が持っていないものを持っているように思えて、喪失感を感じる。いまだに帰属意識を求めている。

子どもたちが成長し、ドナー探しにもっと時間を割けるようになった。そしてインターネットで、当事者の証言を読み、同じ立場の人たちを探すようになった。他の当事者が経験していたことは自分のものと似通っていた。

ベルギーでは第三者生殖に関する法律は2007年に施行された。ドナー・レジストリーを設けるべきだと法律には書いてあるが、実際には存在していない。

DCからの出生者が安全な場所で交流できるようにフェイスブックのグループを作った。ベルギーではこの問題はタブー視されており、出生者がオープンに話すことがなかなかできない。

2012年には、思い切って写真つきでインタビューを受けた。自分の写真を見たドナーやドナーきょうだいから連絡が来るかもしれないと思ったから。ドナーを見つけることはできなかったが、ネットワークは広がった。当事者の集まりを組織することができた。ベルギーで出自を知る権利が認められるよう、ロビー活動をした。

自分を含めた三人きょうだいは、もしかしたら違うドナーから生まれたのではないかという疑いを持っていた。それで、DNA検査を行った。その結果、私と弟は同じドナーから、妹は別のドナーから生まれたということがわかった。つまり精子が混合されていたのだ。母は何も知らされておらず、医師から裏切られたと感じた(医師は、既に亡くなっていた)。こんなことは、感情的に決して容認できない行為だと思う。しかし、医師たちは、精子を混合して用いていたことについて、精子提供を継続するためには必要なことだったと釈明した。

ベルギーの一部の医師たちは、出自を知りたがっている出生者のことを“遺伝子原理主義者”と呼んでいる。とても侮辱的な感じがする。DCは非人道的だと思う。ドナー提供による出生者は決して“ユニーク”な存在であったり、“望

まれた”存在であったり、そこら中にドナーきょうだいがいるような状況を望んでいたのではない。親は実子を欲しがると、最後に選択肢がなくなって追い詰められてDCを選んでいるだけだ。

2年前、初めてドナーきょうだいを見つけた。弟が見つけたのだが、彼は興味半分で遺伝子検査を受けただけで、自分が精子提供で生まれたことは知らなかった。最初、母親は嘘をついたが、最後は認めた。ドナー兄弟と自分たちの誕生日はたった12日違いだった。ドナー兄弟は身体的に私には似ていなかったが、三つ子の弟とは行動がよく似ていた。その後、別のドナー姉妹も見つけた。彼女とは以前、理学療法士のオフィスで会っていたことがわかった。彼女の娘は自分の家の近くの学校に通っている。バルセロナにも別のドナー兄弟がいて、彼とは一番仲がいい。

ドナーは2017年に亡くなっていたことがわかった。それを知って落胆した。ドナーの実の姉妹の住所を探し当て、直接会いに行った。その時、家になかったので手紙を置いてきた。1週間後に電話をかけてみたが、その女性は自分のことを疎ましいと感じていた。ドナーとの関係が良くなかったようだ。最終的にドナーの他の家族にもDNA検査を受けてもらうことになった。それには弁護士も必要になって大変なことだった。DNA検査の結果が出て、ようやくその男性は自分のドナーだったことが確定した。

ドナーについて調べたところ、彼は癌で亡くなっていた。自分の将来のために、ドナーの診療記録を見たいと申し出た。目の具合が悪く、ドナーから来ているかを知りたかったから。これは遺伝性のものだと言われていたので。

三つ子の妹も、ドナーを見つけた。しかしドナーは彼女と関係するのを嫌がった。これは二度目の拒絶のようだ



った。そのことで彼女は非常にネガティブな影響を受けた。

#### **Q. グループについて概要を教えてください。**

オランダの友人が“Donor Detective”を設立し、自分は設立メンバー6人の一人として参加した。このグループのアイデアはすべての人は出自を知る権利があるということ。医師がドナー記録を破壊しないようにするだけでは足りない。DNA 検査があつてよかったと思う。

設立メンバーの一人のエイミーはDNA 検査でドナーを見つけた。グループでは、ドナーを見つける手助けもしている。グループはオランダとベルギーの当事者向けのクローズドのフェイスブックグループを持っている。設立メンバーは次々と血縁者（ドナーきょうだいなど）を見つけ出した。そして6人全員が自分の遺伝上の父親を見つけることができた。そして、その中で私が一番最後だった。

#### **Q. 育ての父親はどんな存在でしたか？**

育ての父親との関係は、最初からぎくしゃくしていた。

#### **Q. 3人きょうだいとのことですが、きょうだいの間で知りたい気持ちに温度差はありますか？**

ほかのきょうだいは私ほど興味がなかったが、私が探し始めたので、彼らもだんだんドナーを知りたいと思うようになったみたいだ。

三つ子の弟はどうでもいいといつも言っていたが、やめろということはない。私が遺伝上の父を見つけて写真を公開した時、弟は“やったね!”と言ってくれた。写真を見て、もっとドナーについて知りたくなったみたいだ。

#### **Q. 親と子どもの立場の違いについてどう感じますか？**

家族の中で、完全にはなじんでいないといつも感じていた。遺伝的に繋がった両親に育てられるのが一番良かったと思う。自分では全くコントロールできない状況に強制的に置かれたような感じ。もしドナーについて知ることができていれば、そこまで強烈に自分のアイデンティティを求めることはなかったのではないかと思う。仮に知っていたとしてもそれはそれで辛かったかもしれない。

なぜなら、ドナーは提供したとき、19歳だったから。良い関係を築けたとは思わないから。

ドナー家族の写真を見ると、自分の存在がその写真から抜けていると感じる。自分はその関係に乗り遅れ、チャンス逃したみたい。ドナーは提供後もずっと生きていたが、自分のアイデンティティを見つけられないようにあらゆることをした。私の方は、実の家族を見つけ出すためにメディアにも露出して、自分の悲しみを世間に晒すことになった。これは、非人道的なことだ。

#### **Q. DCは禁止すべきでしょうか？**

子どもの視点を第一に考えると、子どもが実の両親に育てられ、遺伝的に関係がある人たちのこともちゃんと知っていることが子どもの利益になる。DCで得をするのは親だけだ。

つまり、子どものことを第一に考えるなら、DCを正当化するのはかなり難しい。

#### **Q. ベルギーで養子の場合の出自を知る権利は認められていますか？**

里子には知る権利が認められている。すべての関係者の権利についてきちんとしたガイドラインがある。それ

が一番、正直で正しく、公平な方法だ  
と思う。

養子にも出自を知る権利が認めら  
れ、情報にもアクセスできる。しか  
し、養子について過去にスキャンダル  
があった。孤児として引き取られた子  
どもたちが大人になって真実ではない  
ことがわかった。彼らは赤ん坊の時に  
医師や修道女に連れ去られた。養子に  
は自殺する人も多い。

### Q. 家族の多様化が進んでいます。どこま で容認すべきでしょうか？

ゲイカップルから精子提供を受けて  
子どもを持ったレズビアンカップルと  
話したことがある。共同で子育てする  
という約束だったが、結局、訴訟に発  
展した。そのような例も知っている。

### Q. 早い時期から告知すれば、問題はなくな りますか？

このような例があった。まだ10歳の  
子供からの相談だった。彼女の母親は  
シングルマザーで、精子提供で生まれ  
たことを知らされていた。しかし、ド  
ナーが匿名であることに悩んでいた。  
しかし、心配しないように教えられて  
いたから質問できなかった。その子は  
とても頭のいい子だった。彼女は父親  
の姿をみたいと切望していたのに、ド  
ナーを知ることが許されていない状況  
に混乱していた。私が訪問した時に、  
彼女と1対1で話した。彼女はなぜ知  
ることができないのかと尋ねてきた。  
自分は今法律を変えようと頑張ってい  
ると彼女に伝えた。彼女はその後、  
ドナーきょうだいを実際に見つけるこ  
とができしたが、これは彼女にとって思  
いがけないことだった。

そのほかのシングルマザーたちから  
もコンタクトをもらっている。そし  
て、彼女たちの子どもがドナーを知り  
たがってれば、その手助けもする。

そのほかに印象的だったのは、ドナ  
ー提供によって生まれた12歳の男の子  
が1組の双子とマッチングしたこと  
だ。その双子はアイルランドのレズビ  
アンカップルの間に生まれた。彼女た  
ちはより手頃な価格で子どもを持つこ  
とができるムンバイに行った。しかし  
妊娠せず、結局デンマーク人ドナーの  
卵子と精子を使った。だから、12歳の  
男の子のドナーはデンマークにいる。  
ドナーはベルギーにいたと言われてい  
たので、とても落胆していた。ドナー  
きょうだいも大勢いるようだった。

(2021年6月)

#### Mr. Steph Raeymaekers

Donor Kinderen の代表であり、Donor  
Detective の創設メンバーの一人。  
精子提供によって三つ子の一人として  
生まれる。

25歳の時に自分がドナー提供により生  
まれたと知り、自分の子供を持ったこ  
とをきっかけにドナー探しを始め、ド  
ナーがすでに亡くなっていたことを知  
る。

#### 記事

I triplet, 1 cocktail of sperm

#### Donor Detective

ドナーから生まれた当事者のための非  
営利の自助グループ。情報提供や、相  
談にも応じている。ドナーやドナーき  
ょうだいを見つける手助けもする。4  
人のオランダ人、2人のベルギー人で  
構成される。クローズドのフェイスブ  
ックグループを持ち、当事者に交流の  
場を提供している。

## Importance of telling and empowerment for donor child.

### テリングとエンパワメント

#### Interviewee

Ms. Emma Grønbaek

#### Q. 自己紹介をお願いします。

精子提供で生まれ、現在 25 歳になる。顕微授精で生まれた 2 歳違いの双子の妹たちがいる。精子提供で生まれたことをこれまで不幸せだと思ったことはない。

ブログを運営して 7 年になる。ブログを始めようと思った動機は、Donor Conception (DC) で生まれた人たちが書いたブログを見て、自分のように最初からそのことを知っていた人は非常に稀だということを知ったから。自分のことについての本 (Donor Child-A Child of Love) も出版した。インスタグラムやフェイスブックも開設している。

#### Q. ブログの目的は? どのような人からコンタクトがありましたか?

ブログを始める前、DC についてオンライン上にどのような情報があるか、ほとんど知らなかった。DC で子供を持つことを考えていた友人から、ドナーから生まれた経験を聞かれた。そのことが、ブログを作ろうという考えを持つきっかけになった。すぐに、オンラインで公開されている経験談を見て、DC について幸せだと感じている人の話を見つけるのが難しいということを知った。だから自分のストーリーを公開して人々にシェアしようと決心した。

これまで、自分と同じように感じている当事者、依頼親、不妊治療の業界で働いている人たちからコンタクトを受けたことがある。特に、不妊治療に

携わっている人たちは、自分たちの治療の結果を知るのに長い時間を要するので、ドナーから生まれて成人した人からのフィードバック(肯定的であれ否定的であれ)をもらうことに興味を持っている。

DC を考えている親から週に何件かはオンラインのコンタクトページを通して連絡がある。その人たちが聞きたいことは、いま彼らがどの段階にいるか、例えばもうすでに子供がいるのかなどによって異なる。DC で生まれた子供をどのようにサポートしたらいいか、アドバイスが欲しいという親もいれば、不妊の問題を嘆いている人(特にヘテロカップル)もいて、自分のような DC で生まれた子供の経験を聞きたがる。例えば、DC で生まれたことがわかったとき悲しかったか? とか。不妊の問題と格闘している人たちは、両親の経験についても聞きたがっている。例えば、悲嘆の段階はいずれ過ぎ去るのか? など。

#### Q. 両親や家族は賛成、応援してくれましたか?

両親はとてもサポーターティブで、ブログで公開しているオンラインの動画にも出演してくれた。自分を妊娠したとき、両親は、子供には知らせないように周囲からアドバイスを受けたが、両親は一貫してオープンなアプローチを取り、DC を恥じることは決してなかった。

両親には、自分の経験を公開してもいいか、許可を得た。両親はとてもサポーターティブで、家族を始めるために格闘している人たちを助ける良いきっかけになると賛成してくれた。父は自分が話しているそばでライブビデオを回していて、視聴者が彼に直接質問できるようにしてくれた。

**Q. 両親からどんなふうにテリングを受けましたか？具体的なエピソードがあれば教えてください。**

両親は、精子提供で生まれてきたことをストーリーにした本を作ってくれた。何度も何度も、それを読み聞かせてくれた。そのおかげで、家族全員が、この話になじんでくつろぐことができるようになった。3歳くらいから、夜の読み聞かせに使っていた。

そのストーリーを完全に理解したのは何歳の時だったかわからないが、5歳のとき、卵子と精子の絵を描いていた。だから多分そのころだと思う。自分が描いた絵は、本の表紙に使われている。

自分も、両親も、そのようにしてきたことをとても良かったと思っている。

DCについて書いた子供のための本は当時、なかった。だから両親は自分たちで作った。両親にはその才能があった。

**Q. どんなとき、両親から愛されていると感じますか？思春期・反抗期はありましたか？両親との間に葛藤を経験しましたか？**

子供の時から精子提供で生まれたことを自慢に思っていた。両親がいかに子供を熱望していて、そのためにたくさんの時間と努力を割いてきたかを知っていたから。6年もの不妊治療に耐えて、自分を妊娠するのに成功したとき、養子をもらうプロセスを終えかけていたところだった。

両親はほとんど希望を捨てかけていた。両親はたくさんの時間とお金を投資し、そして自分が生まれるまで、辛い時期を耐えた。だから、自分はほかの子供たちよりも特別だといつも感じていた。

10代の頃、父親と口論したとき、「あなたは私のお父さんじゃない」という思いが浮かんだが、実際に言ったことはない。それは真実ではないし、

言えばその言葉を取り消すことができないことを知っていたから。父をそのような方法で傷つたくはなかったので、それは言うまいと決意した。

**Q. ほかの出生者たちとは交流がありますか？ほかの人たちの経験や考えについて、どう思いますか？**

初めて自分の経験を公開した時、同じ高校に通う女の子から接触があった。彼女も精子提供で生まれていて、レズビアン両親と暮らしていた。それ以来、彼女とはたくさん話して、オンラインの参加者向けにライブチャットを一緒にやったこともある。

ネガティブな経験をした当事者と話すのは難しいと感じている。彼らは自分たちの状況に不満を持っていることが多いので、彼らが経験したことを理解するのに苦労するから。反対に、自分と同じような見方をしているほかの当事者とは前向きな会話をたくさんしてきた。

ネガティブな経験をしている当事者が、自分と知り合った場合、彼らは大抵、自分に対して批判的になる。不妊治療業界からお金を稼ごうとしているだけだと言われたこともあった。

自分とは異なる経験をした人と積極的に関わりたいと思っているけれど、これまでのところ、その人たちは自分の話を理解できないことがわかった。

**Q. 精子提供で生まれたことは、インパクトの大きな出来事でしたか？それとも、もっと重要なことがありますか？**

精子提供で生まれたことは自分の人生で大きな位置を占めている。なぜなら、成長する過程でこれについてたくさんのお話を両親と話してきたから。自分の遺伝子の50%を知らないことは大きなことだし、特に医学的な事柄には関心がある。自分の家族歴にアクセスできないことにそこまで強いストレ

スを感じることはないが、ドナーの病歴についてこれまで知らなかったことを知り、それを自分の主治医に伝えることができれば、それは良いことだと思う。

オンラインコミュニティに積極的にコミットする前は、DCについてあまり話す機会はなかった。自分の経験についてたくさんのお話をしているが、それは今、自分がたまたまそういう時流に乗っているからだと思う。

#### **Q. 成長して、父親と遺伝的つながりがないということの意味をはっきりと理解した時、どう感じましたか？**

自分と父親が遺伝的に関係していないことを理解したときの、特定の瞬間や感情を思い出すことができない。いつもそうだと思って育った。ちなみに、自分は母親によく似ている。

小学校の1年生か2年生の頃、ドナーの外見にとっても興味を持っていた。自分はドナーと同じくちびるを持っているかどうか？ これらは家族内でのオープンに話されていた。自分の特徴について単純な好奇心を持っていた。

#### **Q. 学校で、友人の家族とは違うと気がついたとき、どう思いましたか？ どのように適応しましたか？**

自分の家族がほかと違うことは知っていた。学校の最初の年に、クラスの生徒に家系図(family tree)を描かせる時間があった。母親が医療分野で働いていたこともあり、「本当の」家系図がどうなっているかをすでに知っていたので、木を描くのは難しいと先生に告げた。先生はかなり否定的な反応になり、自分が特別に見えるように嘘をついていると言って両親に電話をかけた。それで両親は先生に実際の状況を説明しなければならなかった。

この先生の反応には驚いた。自分が悪いことをしたかのように扱われた。

自分の家族が愛情で満たされているということを自分は伝えただけなのに。

#### **Q. ドナーはどのような存在ですか？**

ドナーに会いたいとは思わない。ドナーは当時のデンマークの法律によって匿名の存在。今は希望すればオープンドナーを選べるけど。匿名のドナーでも満足している。ドナーの情報にアクセスすることができないが、それはドナーを探し求める必要がないということ。

ドナーに対しては、折にふれてあげようと心の中で伝えている。そして彼が自分の存在を思い煩わないように願っている。精子を提供したことを後悔して欲しくない。ドナーに会いたいとか、ドナーについて知りたいかと思わない。デンマークでは 23 and Me などの遺伝子検査は、米国ほどポピュラーではない。それらを利用することに特別関心を持ったことはない。どういう結果になるかわからないし、それがポジティブなものとは思えない。半きょうだいや、ドナーとコンタクトを取りたいとは思わない。

#### **Q. もし、将来、ドナーの方からコンタクトがあったら、会いますか？**

ドナーからどういう風にアプローチされたか、自分に何を望んでいるかによると思う。

もし、自分に会って、自分に問題がないか、そしてただコーヒーを飲むだけでそれ以上がないなら、それは問題ない。でも、彼が自分の人生に関係しようとしてきたりするなら、断る。

ドナーについては、自分の父親の特徴（瞳の色や身長）にマッチしていること以外、まったく何も知らない。ドナー番号すらも知らない。ドナーから生まれた人の多くにとって重要なことの1つは、ドナーが提供した動機だ

が、これは私にとっては大した問題ではない。自分の存在と人生を作ってくれたドナーの役割にとっても感謝している。しかし、ドナーの利得や彼の意図は、自分と自分の家族の幸せに比べれば副次的なものだ。

**Q. ドナーに会いたい人もいれば、あまり関心がない人もいます。‘遺伝的つながり’について、どのように感じますか？**

ドナーから生まれた人たちのコミュニティがあり、そこで活動している人たちの声は非常に大きくて、いろいろな研究の中でも過大評価されていると思う。自分のように感じている人たちの方が多いのではないかと思う。そういう人たちは研究に含まれていないだけではないかと思う。

誰かがDCで生まれると、多くの場合、裏切りがあった。それらの人々はしばしばドナーから生まれたことについて知らされていなかった。それは、その人たちがそれについてどのように感じるかにおいて決定的な役割を果たす。遺伝は重要だけれど、それに執着している人たちのことを理解するのに苦労する。それは私たちの文化、家族のイメージなどの一部だが、どんどん変化している。「あなたは、お母さんかお父さんに、よく似ている」とか言われるのは社交上のこと。しかし、DCが現れる前でも、片方または両方の親と遺伝的に関係のない人はたくさんいた。今日では、ドナーについてできる限り多くの情報を得るために、規制を求める声が強くなってきている。

**Q. オープンドナーの方が望ましいでしょうか？これから親になる人は、どちらを選ぶべきですか？**

これは難しい質問だと思う。両親が自分たちの決定に確信を持っていることが重要。オープンドナーでも、匿名ドナーでもどちらでも良いと思う。ど

ちらを選ぶかより、ドナーから生まれた事実を、子供との会話の中で親がどのように扱うかの方が重要だから。つまり、どのように子供に伝えるか、その結果、子供が出生の事実についてどのように感じるかということ。

デンマークでは、オープンドナーに期待を寄せる依頼親も出てきている。18歳以上になれば、ドナーの情報を得られるという期待を持って子供が待ち続けた結果、どうなるかは十分わかっていない。何が起こるかまだわからない。それぞれに長所と短所があるので、それは簡単な選択ではない。

**Q. デンマークのドナーに関する法律について、どう評価しますか？**

これも難しい質問。何か法改正をするなら、それは子供と家族にフォーカスすべきだ。

どのような選択をし、何を期待するのかについてより良い決定ができるよう、両親に対するサポートがもっと行われるべきだ。

ドナーから生まれた事実を子供のmedical historyに記載するというオプションもあるだろう。そうすれば、フォームなどに記入するときに、この情報を提供できる。現在は、医療領域の知識が不足しているため、ドナーから生まれた人々にとって不利益になる可能性がある。

**Q. ドナーから生まれた人のためのサポートグループに参加していますか？**

ほかのサポートグループでは活動していない。自分のネットワークを持っていて、共同で何かをしたいと思っている人から連絡があったときは、進んで手伝う。両親もほかのグループに参加していない。両親は自分のチャンネルに対してサポートしてくれたけれど、自分たちの仕事に忙しい。

(2021年12月)

数ヶ月前、両親の仕事仲間の子供が、家族を作るためにDCを使用することを検討していたため、DCについて自分と自分の両親と、非公式に話をした。このように、求められたら、積極的に応じるようにしている。

**Q. 将来、ご自身が、(もしそのような状況になったら) 精子/卵子提供で子供を持つことはありえますか？ 養子についてはどうでしょう？**

もちろん、そうする。DCでも養子でも。

**Q. “Donor Child”でよかったと思うことは何でしょうか。逆にどのような困難がありますか？**

いつも自分は特別だという気持ちがあり、その気持ちを人生の他の領域に向けることができた。それはエンパワーメントと言える。

課題は主に、ドナーから生まれたことの結果として、自分が知らない事柄に関連している。たとえば、20歳のときに、乳糖不耐症であることがわかった。それを知るのに長い時間がかかった。将来自分の子供か欲しいと思ったとき、これらの、わからないということが、チャレンジとなるかもしれない。

**Q. その他のコメント。**

2歳年下の双子の妹たちがいる。彼女たちは精子提供ではなく、顕微受精で生まれた。

その技術は、自分の時には使えなかった。よく聞かれるのは、父親と遺伝的につながっている妹たちがいて、自分は父親と繋がっていないということについてどう思うかということ。少なくとも自分の家族について言えば、そのことは家族の関係性に影響することはなかった。

### Ms. Emma Grønbaek

1996年に匿名の精子提供で生まれた。双子の妹たちは、1998年、顕微授精(ICSI)で生まれ、両親と遺伝的に繋がっている。テリングは、幼いころから受けている。看護師として働いている。

著書



Emma Groenbaek, *Donor Child: a child of love*. Copenhagen, Saxo, 2021

## Self-therapy for donor conceived.

### 自己セラピーの方法:ドナーからの出生者

#### Interviewee

#### Mr. David Berry

#### Q. 自己紹介をお願いします。

ニューヨークのローチェスターで育った。そこには、イタリア系住民の大規模なコミュニティがある。大学で学ぶためにフロリダに移り、それ以来そこに住んでいる。3年前に結婚し、現在、生後9か月の息子がいる。デジタルマーケティングエージェンシーを経営している。自由時間には、自転車に乗ったりボクシングを楽しんだりしている。

数年前、義理の兄の家族と一緒にクリスマスディナーをしていた。義理の兄は、イタリアの祖先をととても誇りに思っていた友人についての話をしてくれて、それが印象に残った。(その友人は入れ墨もしていたらしい)。この友人は、DNA検査を受けて、実際にはアイルランド人の祖先を持つことを偶然発見した。この話を聞いて、自分の祖先について考えるようになった。父方の祖父は、父が7歳のときに亡くなった。だから、祖父についてほとんど知らない。父方の祖先についてもっと知りたいと思ったので、すぐにDNA検査キットを注文した。数ヶ月後に結果をチェックしたとき、自分がまったくもってイタリア人ではなかったことに驚愕した。これをきっかけに、自分はドナーから生まれたことを徐々に知ることになった。

#### Q. いつ・どのようにそのことを発見しましたか？ その時の気持ちは？

精子提供で生まれたことに気づくのにかなり長い時間がかかってしまった。今から振り返って考えてみると、それは少しバカバカしい。しかし、父親の系譜については多少なりとも疑問があった。

DNA検査の結果を知ったとき、最初は別の説明を考えていた。そして、真実を本当に理解するのに半年もかかった。最初、両親のどちらかにユダヤ人の血が混じっている可能性があると考えていた。しかし、DNA検査で近親者を発見したとき、そうではないことに気づいた。また、叔父の一人が軍隊にいた間に精子を提供したのではないかと考えたりもしたが、この理屈も誤りだとわかった。

早い段階で自分が発見したことについて両親と話し合った。当時、家族の秘密を暴いたとは思っていなかった。両親は、自分がドナーから生まれたことを知っていたが、知らない振りをし、真実を明らかにしようとしなかった。

自分と同じ頃に生まれた人物とDNAが一致していることを見つけたとき、両親は最終的に真実を認めた。33歳の誕生日の直前のことだった。そのときかなり感情が揺さぶられた。出生の真実を認めるのは難しいことだった。特に、実の妹が実際には半きょうだい(ドナーが異なる)だとわかったのはショックだった。それでも、自分のことをちゃんと愛してくれている両親には感謝している。

発見してから1年間、家族に亀裂は生じなかった。両親はそれを家族の他のメンバーに秘密にしておきたいと思っていたが、自分はそれを永久に秘密にするようなことはできなかった。そして、それを隠すように頼まれるのは不当だと感じた。道を見つけるまで突き進んだが、その間ずっとフラストレーションを感じていた。半きょうだいの中には、片方の親しか生きていないため、両親に自分の出生について尋ね



ることができない人もいます。里親として育てられた人もいます。それに比べれば、自分は両方の親と自分の状況について話し合うことができよかったですと思っている。

**Q. 自分がドナーから生まれたということは、全く想像もしないことでしたか？ それとも、子供の頃から、家族の中に違和感がありましたか？ 父親に似ていない、と感じたことはありましたか？**

知る前と比較したことはなかったが、真実を発見したあと、それはすべて理にかなっているように思えた。父親とはまったく似ていない。自分は社会的で外向的だが、父親は控えめで静かな性格。父親は困難な子供時代を過ごしたので、これが彼の性格に影響を与えた可能性があると思う。

自分は母親に似ている。外見は父親にまったく似ていない。妹のサラは父親に似ている。これは、若いときからずっとそう思ってきた。

**Q. ブログの目的は？ どのような人からコンタクトがありましたか？**

これまで、ブログを介して10人くらいの人と連絡を取りあった。そういう人にいつも手を差し伸べて、彼らの弱さを受け入れる能力があるわけではなかった。自分の経験が誰かの共感と呼んでいることはありがたいが、すべての人と個別に関わるのは難しかった。

自分の経験について書くことは、自分にとってセラピーのようなものだった。頭の中にごちゃごちゃした考えがあり、それを書き出して初めて意味になることがよくあった。ブログは、自分の考えを論理的に整理して理解するのに役立った。

**Q. 両親に対して、どのような気持ちですか？ 現在、どのような関係ですか？**

自分は母親と仲がいい。両親に対して同じ愛情を持っているが、性格は母親に似ていると思う。

秘密にしておくという両親の選択について、当時は、今とはまったく時代背景が異なっていて、両親はDNA検査が将来、そのように普及するとは思っていなかったのだろう。また、父方の家族とは仲が悪く、近くに住んでいなかった。父親は複雑な家庭環境の中で育っている。そういうこともあって、両親は、適切な時期ではないと感じ、話すのを先延ばしにしていたのだろうと思う。

もし自分だったら、もっと違う選択をしていただろうと思うが、両親がしたことを理解はできる。

**Q. 父親はイタリア系、ドナーはユダヤ系とのことですが、それを知ったとき、大きなアイデンティティ・クライシスになりましたか？**

父方の家族と親しい関係を持たないことの利点の1つは、彼らとの関係を「失う」ことはないし、彼らに会う必要性から解放されていることだ。自分はアイデンティティの危機を経験しなかった。しかし、新しいアイデンティティが意味する事柄と格闘した。それは、自分がどこから来たかとは関係がなく、自分がどのようにしてここにたどり着いたのかということと関係していた。自分の祖先についての謎が絡み合って自分の前に続いていた。

**Q. イタリア系だと思っていたとき、自分のアイデンティティの中に、イタリア系であるということはどのように位置づけられましたか？**

イタリアとのつながりは個人的なアイデンティティの中で主要な部分ではなかった。自分はローチェスター出身で、そこには大規模なイタリア人コミュニティがあるので、イタリアの要素を部分的に受け入れていた。例えば、

学校でイタリア語を進んで勉強したりしていたが、それは自己意識の中心ではなかった。

ドナーから生まれた事実を発見する前と後に、イタリアに旅行した。自分がイタリア系ではないということがわかって、特に旅行の経験に影響はなかった。知る前と後で特に違いはなかった。

**Q. 現在、遺伝的父親がユダヤ系だとわかりました。ユダヤ系というアイデンティティは自分の中にどのように位置づけられていますか？**

このことは、とても興味深かった。ユダヤ人とのつながりには神聖なものを感じている。今の妻にプロポーズしようとしていた頃に、この事実を知った。自分の妻は養子縁組されていて、ユダヤ人の家庭で育った。自分が一部ユダヤ人であることを知ったので、妻の家族と一緒にテーブルにつけると感じている。息子が生まれたとき、再度、この意識を新たにした。自分と妻は敬虔なユダヤ人ではないが、ユダヤ人の主要な休日を祝うなどして、ユダヤ人の信仰で息子を育てている。

自分は詐欺症候群(imposter syndrome)ではないかと感じている。自分の一部はユダヤ人だが、必ずしもユダヤ人のストーリーに対する権利があると感じているわけではない。たとえば、ホロコースト生還者の経験と同一視することに抵抗がある。というのは、自分はユダヤ人のアイデンティティに突然出くわしたように感じていて、自分はその一部であると主張する権利がないように感じているから。

**Q. 精子ドナーに対して、どのような気持ちですか？**

精子ドナーは母親の主治医だった。この事実について強い疑念を抱いている。不妊治療中に医師の精子を使用す

ることに同意した女性はいなかった。それなのに、現時点で、少なくとも10人のドナーきょうだいを発見している。1年くらい前にドナーと電話で話した。最初、ドナーの娘とコンタクトを取り、彼女は協力的で、DNA検査を受けることに同意してくれた。結果を待っている間、検査の結果で自分の身元が確認されたら、ドナーは連絡を拒否する可能性が高いと考えたので、その前に直接連絡することにした。

医師に、自分が父親になる前に、自分のユダヤ人の伝統について学びたいとメールを送った。30分後、医師から電話がかかってきた。彼は、自分の家族と起源について多くのことを話した。デビッドは自分の出生について直接彼に聞いた。医師はそれを否定しなかった。それは友好的な会話だったが、その医師と二度と話したいと思わない。もし、医師とまた話をする機会があるとすれば、自分の精子を使って患者を妊娠させた彼の動機を知りたい。電話での会話からは、おそらくエゴイズムが動機だったと思う。しかし、一部はユダヤ人の伝統に対する医師の情熱もあったと思う。不妊に苦しんでいる家族を「助けたい」という気持ちもあっただろう。といっても、それは彼の心の底からのものではなく、自分自身のエゴから、あくまで治療の結果を得ることがゴールだったのだろうと思う。ドナーが誰かを知ることが、すべてを解決してくれると信じていたのに。母親は、自分が同意していないのに、自分の精子を使用した医師に対して複雑な感情を抱いている。それを受け入れるのが難しい。総じて、彼女は問題ないと言っているが。それについて話すことで徐々に慣れてきたようだ。父親はそれについてあまり話さないが、母親と同じように感じていると思う。

**Q. ドナーきょうだいは何人いますか？ その人たちとの関係は？ ドナーきょうだいが増えることは嬉しいですか？ それともフラストレーションを感じますか？**

10人いるドナーきょうだいたちのほとんどと話をし、最初に出会った2人とは特に親しい関係を持っている。残りのきょうだいたちとも友好的につき合っているが、最初に出会った半兄弟と半姉妹とは、お互いを発見した後すぐ、とても親密になった。しかし、後でもっとたくさんの半きょうだいがいることがわかり、驚いた。

ドナーきょうだいの中には、少々アグレッシブな人もいて、あとから輪の中に加わったことで、自分が取り残されている、パーティーに遅れてきたかのように感じている人もいるようだ。ドナーきょうだいとの関係には全面的に感謝している。

今は、もっと多くの半きょうだいを発見することは、嬉しいことではなく、フラストレーションを感じる。世界中にきょうだいがいて、全然知らない他人に親密さを感じることは難しい。ドナーきょうだいが増えるということは、それらの人々に対して、ドナーから生まれた事実を初めて告げることになる。それは大きな責任を伴う。

**Q. ドナーから生まれたことによって gift がありましたか？**

自分と何人かのドナーきょうだいは、社会的にみて、業績を積んでいる。自分の遺伝子が最初に考えていたものとは違うことがわかったので、アイデンティティはより複雑になった。両親は大学に通っておらず、高校を卒業しているが、自分は修士号を取得している。今では、このような知的資質は、自分の勤勉だけでなく、自分の(ドナーから受け継いだ)遺伝的構成に部分的に起因していると感じている。

反対に、自分は背が低く、ひざが悪く、19歳の頃から髪が薄い。これらの

特徴も遺伝的にドナーから引き継いだものだと思う。

**Q. 自分のアイデンティティの中で、ドナーから生まれた事実はどのくらいの比重を占めますか？**

ドナーから生まれた事実は大きい。これはめずらしいことなので、自分の会話の大きな要素になっている。それにもかかわらず、家族や親しい友人に囲まれているとき、自分は以前と何ら変わらないと感じていて、それは嬉しいことだ。

ドナーから生まれたことがわかって、ドナーきょうだいとの関わりを通して、いろいろな可能性に出会った。例えば、ドナーきょうだいの多くは、高い成果を上げ、社会的に立派だ。これを「きみならどうする？」というタイトルの本と比較する。これは、異なる環境のもとで育てられた人についての洞察を与えてくれる。それは、ハードワークをすれば達成できることを教えてくれる。謎と好奇心を持ってこれに取り組んでいる。

**Q. ドナーからの出生者にとって、子供の福祉や権利とは、何でしょうか？ 禁止すべきですか？ それとも子供が小さい頃からテリングすれば、問題ないでしょうか？**

自分の場合は、意図せず DC 活動に関与するようになった。ドナーによる出生者たちの世界は小さく、互いに強く結びついている。DC に関する詐欺を防ぐため、不妊治療に関する法律を可決させることを目的に、ワシントンにある Right To Know という非営利団体の仕事を手伝ったことがある。自分の動機は、自分に起こったこと—すなわち、自分の精子を使用する医師—は違法であるべきだと考えている。一部の州では、人々は医療記録や病歴を請求する権利を持っていない。不妊治療を

受けた女性患者は、非倫理的な行為をする医師に対抗する手段がない。

ドナーきょうだいのひとりの女性は、9年間、精子ドナーとなった医師の患者だった。それは、彼女がその医師が自分のドナーだと知る前のこと。彼女が自分の生物学的娘であることを知っていたにもかかわらず、その医師は彼女を治療し続けていた。医師は自分の行動に責任を持つべきだ。

きちんとした規制があれば、DCは家族を作るための貴重な方法であると思う。多くの場合、ドナーの医療記録や身元調査を行っていないので、システムをより良くするために、透明性と真実（そして定期的な健康チェック）がもっと必要だと思う。これらの措置が講じられれば、DCを支持する。IVFは依然として高価な治療で、患者にとって法外な費用負担がかかる。

#### **Q. これから DC で子供を作ろうとする親に対して、どのようなことを伝えたいですか？**

何よりもまず、真実を語って欲しい。今では、真実を知らせるための方法についていろいろなりソースがある。いずれにしても、早い段階で知らせることで、それは子供の物語の一部になる。親自身の恐れや不安を子供に投影しないで欲しい。子供が自分自身のことに関心を持つのは普通であるということ、他の子と違っていても、何の問題もないことを子供に知らせて欲しい。

自分の両親は、真実の価値と真実に対する子供の権利に苦しんでいた。子供は財産ではなく、人間だ。子供たちは成長して、自分で考え、呼吸し、自分の感情を持つようになる。誰もが自分自身についての真実に値する。

また、親が子供にとって善いことを行っている限り、半きょうだいの発見が両親から居場所を奪ったり、子供と

の関係を台無しにするようなことは決してないということを保証する。

#### **Q. 伝統的な核家族(父親と母親、遺伝的に繋がった子供)が、子供にとって最も理想的だといえますか？**

理想的な家族について、自分ももっとも広い視野を持っている。ある友人に自分が精子提供から生まれたことを告げるとき、その友人は冗談めかして「私の本当の父は役立たずのクズなので、自分の父が精子提供者だったらいいのに」と言ったことを思い出す。

これには心を動かされた。自分が父親を持っていることがどれほど幸運であるかを思い知った。伝統的な家族がより多様な選択肢よりも子供を育てる能力が優れているという保証はない。子供は家族から安定と愛を得るのに値する存在だが、それは家族の形態とは無関係。

#### **Q. いくつかの国では、出自を知る権利が認められ、成人したらドナーの情報にアクセスできるように法律が制定されています。成人するまでドナーを知ることができないことは、子供にどのような影響を与えたいと思いますか？**

自分は経験がないので、その立場からコメントすることはできないが、年齢制限はおそらく子供にかなり大きな影響を与えるのではないと思う。自分はそれに取り組む必要がなかったのはよかった。子供たちに情報を提供することが、子供の最善の利益だと思う。

#### **Q. その他、コメント。**

過去に DC についていくつかのインタビューを受けた。1つはマイアミの地元のニュースプログラム（ドナーを発見する前）、もう1つは10代の女の子たちの高校のプロジェクトのため、

そして最後の1つは、つい1週間前フランスに拠点を置く非営利団体から。研究者からのインタビューは今回が初めて。

現在、約8か月間、ブログを更新していない。自分自身の癒しの観点から必要なものを書いてきたが、今後も記事を書いてゆきたい。

(2022年3月)

### **Mr. David Berry**

イタリア系の住民の大規模コミュニティがある、ニューヨーク州ローチェスターで育った。DNA検査で、自分の祖先がイタリア系ではなく、ユダヤ系だとわかる。ドナーは母親の主治医だった。自分の気持ちを整理するため、ブログを書いている。

The Berry Chronicles(ブログ)

My Middle School Classmate is my Brother



## Having Gay Dads.

### ゲイの両親を持つということ

Interviewee

Eli Kessler

#### Q.自己紹介をお願いします。

19歳になったばかり。家族は現在ワシントン州に住んでいる。前はハワイとカリフォルニアに住んでいたこともある。父の仕事の関係で引っ越してきた。現在、オレゴン州のポートランドで大学に通っている。心理学を専攻している。今は春休みでワシントンの実家に戻ってきている。

#### Q.家族構成について教えてください。きょうだいはいどのように誕生しましたか？きょうだいとの関係はどうか？

両親はジョナサンとデイビット。遺伝的父はジョナサンだが、遺伝的な繋がり云々はあまり考えない。自分にとっては、それは大きな問題ではない。それは自分の家族から学んだこと。もっと重要なのは人とのつながりで、これが家族を作るものだと思う。たとえば、ハワイの文化では、血の繋がりがある人だけでなく、親しい人のすべてを家族と見なしている。

両親は、自分が生まれる約10年前に出会った。デイビットはその前に女性と結婚していたが、妻がレズビアンであることに気付いた後、離婚した。彼らには3人の子供がいた。その関係から自分には3人の年上のきょうだいがいる（彼らはすべて40代になっている）。

両親が一緒になった後、卵子提供と代理出産で子供をつくることを決めた。ジョナサンはデビッドより11歳年下で、自分の子供が欲しかったので、

ジョナサンの精子を使った。ジョナサンはデビッドの子供たちと良い関係を持っている。両親が一緒になった時、前妻との子供たちはすでに高校生になっていた。

双子の妹とはとても仲がいい。彼女は現在ミネソタ州の大学に通っていて、かなり遠く離れたところに住んでいる。妹と離れたのはこれが初めてで、つらい。年上のきょうだいたちとは遺伝的には関係がないが、彼らとも親しい関係。しかし、彼らは20歳くらいも年上なので、世代間のギャップがある。彼らはかなり遠くに住んでいる。2人はカリフォルニア州オークランドに住んでいて、もう1人はコロラド州に住んでいる。皆、自分の子供を持っている。これほど年上のきょうだいを持つことは非常にユニークだと思う。自分の友人で同じような人はいない。

#### Q.父親と遺伝的関係がある・ないということについて、家庭内ではオープンに話されていますか？

遺伝的関係があるかないかで、両親との関係やコミュニケーションの仕方が変わることはない。成長して思春期を迎える頃、自分はジョナサン（遺伝的父親）に非常に似ているということに徐々に気づき始めたが、それだからといって両親に対する見方は変わらない。彼らは同じように自分の両親だと思う。このことについて父とは何度か話しをした。それは彼らの感情を苛立たせるものではなく、単に事実というだけのこと。それはたいしたことじゃない。

#### Q.父親のことをそれぞれ、どのように呼んでいますか？父親二人は、育児や家事をどのように分担していますか？

子供の頃から、ジョナサンを‘Papa’、デイビットを‘Daddy’と呼んでいる。家

族がハワイとカリフォルニアに住んでいたとき、両親は二人とも働いていた。現在、デイビット自宅で仕事をしていた、ジョナサンは家にいて求職中。だいたい、ジョナサンが家事や家の中の飾り付けなどをやることが多いが、料理は半々くらいで分担している。

子供の頃、自分と妹は家ではジョナサンがより「母親」のような人物だと思っていた。彼はデイビットより少し女性的だ。それは家の中での、ちょっとした冗談だった。

#### **Q. 両親から出自をいつ・どのように知らされましたか？ どのように感じましたか？**

代理母がいることを最初から知っていたという感じ。子供の頃、それが何を意味するのか本当にはわからなかったけど、自分と妹は、生まれる前に自分たちは‘オープン’（代理母）の中にいた、とよく言っていた。代理母とは、ある程度親しい関係を持っているけれど、匿名を希望した卵子ドナーについてはほとんど知らない。

数年前、両親に卵子ドナーについて初めて尋ねた。両親は、ジョナサンが遺伝的父だが、当時の法的上、両親の養子になった形だと教えてくれた。父たちはいつもオープンで、自分たちの出生についての情報を、聞けばいつでも教えてくれる。

両親は子供に出生の物語を伝えるための定型化された方法を持っていなかった。だから両親は、それについて事実そのままに話した。例えば、こんな調子で。「...私たちには卵子を提供した卵子ドナーがいた。ドナーから採取された卵子は研究室に運ばれ、卵子をジョナサンの精子と受精させて代理母に入れた、そして妊娠が起こった...」。リアルな意味でそれは「物語」ではなかった。

ほかの子どもたちには、父親と母親が一人ずついるが、自分には父親が二

人いて、母親がいないということを経験から知っていた。自分がほかの子と違うことを知っていたが、実際にそれを分析したり、自分の経験を他の人と比較したりはしなかった。子供時代にはそのことから影響を受けなかった。母の日には少し厄介なこともあったけれど。その時は、母の代わりに近くに住んでいた叔母さんのためにカードを作ったりした。

#### **Q. 子どものとき、「ママはどこ？」と聞きましたか？「母親」がいないことに、すぐに納得できましたか？**

自分には母親がいないということが他の子供たちの間で話題に持ち上がったことがよくあった。「ママがいないのに、どうやって生まれたの?!」「生まれるためには、ママがいなくてはいけない!」などと言われた。当時、自分が生まれるのに母親が必要なかったことを説明する方法が本当にわからなかった。それでときどき、「ママは死んだ」と答えた。注意を引くためにそれを言って、それが何を意味するのか本当にはわかっていなかった。

一人の子供から、「両親がゲイだから、あなたもゲイになるの?」、「両親のせいであなかもゲイなの?」とよく聞かれたことを覚えている。これが本当だとは思わない。自分自身がゲイであるのは、全くの偶然。自分の妹も、同じ経験をしたのではないかと思うけれど、それについて妹と実際に話したことはない。

#### **Q. あなたにとって、「母親」というのはどのような人のことを指しますか？ 代理母や卵子ドナーはどのような存在ですか？**

自分の見方では、母親と生物学的に関係している必要はない。子供の時、卵子ドナーや代理母のことを母親だと言っていたこともあったが、その後、遺伝的つながりは中心的なことではな

いと気づいた。そうではなく、母親というのは、子どもに愛情を注いで世話をする親のうち、女性の人物のことだと思ふようになった。

卵子ドナーは、母親とは言えない存在。彼女の名前を知らないし、彼女について非常に限られた情報しか持っていないから。代理母のことは「私の代理母(my surrogate)」とか、彼女の名前で呼んでいる。彼女はテキサスに住んでいて、子供の頃に直接見たのが最後。あまり話をしないけれど、お互いにポジティブな気持ちを持っている、遠い家族のような関係。自分と妹がここに存在するのは代理母のお陰なので、彼女に対して親しい気持ちと感謝を感じている。

#### **Q. 卵子ドナーに将来、会いたいですか？ どのような気持ちを抱いていますか？**

卵子ドナーについてほとんど知らない。父親が彼女をドナーとして選んだとき、父親に渡されたファイルのコピーを持っている。30 ページの紙に、ドナーのプロフィールとして、彼女の出産歴、身体的特徴、学歴、性格、家族歴、病歴、彼女の子供に関する詳細が書かれている（当時、彼女には自分の子供が1人いたので、少なくとも1人の半きょうだいがいることがわかる）。ドナーのプロフィールは、彼女の自己申告による情報。彼女は匿名を選んだので、彼女が自分の卵子が使われたことを知っているかどうか、確信がない。

近い将来、自分と妹は、23&Me や Ancestry.com を使って DNA 検査を行い、ドナーきょうだいを探したい。可能であれば、ドナーやドナーきょうだいと関係を持ちたいと考えている。ドナーが提供した場所のポートランドには、半きょうだいがいる可能性があると思っている。両親が使用した会社はもう運営されていないので、卵子ドナーの記録は削除されている。以前、父

がドナーの住所と電話番号を聞いたが、父が彼女に連絡したとき、つながらなかったの、彼女はおそらく家を引っ越したのだらうと思う。

ドナーの写真を見たいと思っている。ドナーについてプロフィールにもう少し情報があったらいいのと思う。彼女が誰であるか、彼女が何をするのが好きか、彼女の見目、彼女の性格を知りたい。性格上の特徴が遺伝子を通して伝わるのかどうかを知りたい。これまで、ドナーとコンタクトを取ったことがないので、互いの接触がなくとも、性格上の特徴を共有しているかどうか、これを知ることができれば興味深いと思う。

#### **Q. 将来、家族を作りたいという希望はありますか？ 子育ては、男性パートナーと一緒にやりたいですか？**

将来、子供を作りたい。いつもそう思っている。自分はゲイだから、それをどうやってやるのが一番いいかを考えなければならない。自然に妊娠できる人と関係することを想定していないから。生殖補助医療を利用するコストやハードルなどの要素を検討する必要がある。たぶん IVF を選ぶだろうと考えている。可能であれば、将来の子供たちと遺伝的に関係を持ちたいと思う。自分と妹はジョナサンの家系の最後にあたるので、家族の遺伝的系統を継続したいと考えている。

子育ては、パートナーと一緒にしたい。ひとり親になるのは難しいと思う。子育ては大変だから。

#### **Q. 学校や住んでいる地域に、Gay Dads の家族はいますか？ 偏見や差別に遭遇したことはありますか？ そのことは、両親に話しましたか？**

ハワイに住んでいるとき、自分たち以外に、Gay Dads の家族はいなかった。しかし、カリフォルニアでは、中



学校に Two Dads がいる子供がほかにいて、その子が、ゲイの父親で娘がいる別の家族を知っていた。自分の父デイビッドの元妻も、レズビアンパートナーと一緒に女の子を養子にして育てている。

自分の家族やセクシュアリティに関する動画をソーシャルメディアにたくさん投稿していて、特に TikTok ではオンライン上で差別に遭った。時々、これらのネガティブなコメントを両親と共有した（例えば、オンラインで初めてオカマ ‘faggot’ と呼ばれたとき）、しかしほとんどの場合、それを単に無視する。フィードバックのほとんどは前向きなもので、元気がでる。

**Q. Men Having Babies などのサポートグループに参加していますか？ Gay Dads をもつ他の子どもたちと交流したことがありますか？**

Men Have Babies のことはよく知らない。

DC に特化したサポートグループにも参加していない。ハワイに住んでいるとき（それは同性婚が合法化される前）、両親は、「両親が結婚できるようにして」と書いたポスターを自分と妹に持たせて、写真を撮った。そのほか、両親はプライドパレードなどに行っていた。

今まで、ゲイの両親をもつ子供を探したことはない。似たような経歴を持つ人々がソーシャルメディアにコメントしてくることがある（自分もゲイの両親がいる等々）。それ以外にはない。

**Q. ドナーから生まれた人や LGBT の両親をもつ人に聞くと、自分の出自や家族構成について、ネガティブにとらえる人、ポジティブにとらえる人、いろいろいるようです。今まで悩んだことがありますか？ そのことは両親に話しましたか？ 逆に、ポジティブと感じている点がありますか？**

自分の出自のことや、両親がゲイであることに関して、特に悩んでいない。両親はとても愛し合っていて、さらに一歩進んで、子供を作る決心をした。両親の愛情と子供を持つことへの熱意はポジティブなものだったと思う。

**Q. 今、一番関心があることは何ですか？ 代理出産で生まれたことや、Gay Dads を持つことや、自分のセクシュアリティについて、それらは自分の人生やアイデンティティにとって、どんな位置づけですか？**

現在、カレッジに通っていて、心理学の勉強に取り組んでいる。心理学を専攻している。将来何をするかを決めたい。医療関係か、研究の分野かのどちらかがいい。人を助けるために問題を解決したり、研究をしたいと思っている。

ドナーから生まれたという事実は、自分にとっては何でもないこと。それは自分の人生のごく一部で、誰でも他の人とは異なる自分だけの特徴をもっているのと同じこと。それが自分の場合、やや珍しいものであることを認めているけれど、それだけのこと。

自分のセクシュアリティについても同じように感じている。TikTok で「両親がゲイだから、その影響でゲイになったの?」とよく聞かれる。それに対しては断固としてノーと言う。自分は他の子供たちと同じように育ったし、子供のときにクィアネスに接したとしても、それは自分自身のセクシュアリティの発達には影響を与えなかった。興味深いことに、自分には2人のゲイの父親がいて、自分のセクシュアリティを支持してくれることをわかっていたが、それでも両親にカムアウトするのは怖かった。

自分のセクシュアリティを両親に打ち明ければ、自分に対する両親の見方が変わり、扱いが変わるのを恐れていた。それは傷つきやすい瞬間だった。

両親に伝えたとき、両親はすでに知っていたと言った。息子が打ち明ける心の準備ができるのを待っていたと言った。

**Q.一部の国で子宮移植が臨床応用されつつあります。子宮移植で子どもを産むことは選択肢になりますか？**

そういう可能性を今まで考えたことがなかった。子宮を持つインターセックスの人々なら可能だろうと思っていた。自分のことをトランスジェンダー（非バイナリー）と思っているので、子供を産むなら、それが性別の感覚にどう影響するかわからない。それによって自分がどう感じるか確証がない。

子宮移植にとっても興味がある。子宮移植の理論が発展して現実的になるのを見たいと思うけれど、それが実際、どのように機能するか、疑問がたくさんある。特に男性の体が、胎児の成長をサポートするように設計されていないことを考えると。その背後にあるサイエンスについてもっと知りたいと思う。

**Q.その他、コメント**

これまで正式にインタビューを受けたことはないけれど、自分のストーリーは ThisisLife という Snapchat チャンネルで取り上げられている。セグメントのタイトルは「ゲイであるということ、ゲイの両親を持つということ」で、2021年に投稿された。

自分と妹はとても似ているが、彼女はレズビアンではないし、趣味も彼と異なっている。自分も妹も、医療分野に関心を持っていて、妹は看護学校に通っている。

**Eli Kessler**

ゲイの両親を持ち、卵子提供と代理出産で生まれた。現在、19歳で、双子の妹がいる。オレゴン州のカレッジで心理学を学んでいる。両親が住む実家はワシントンにある。

Instagram: Eli Kessler (@mightbealizard)

YouTube: mightbealizard

TikTok: TikTok (@iitselii)

Snapchat feature:

My dads are gay and so am I

(2022年3月)

**Doctor inseminated his sperm to her mother's womb without consent.**

## ドナーは主治医だった

Interviewee

Ms. Eve Wiley

**Q. 両親から、精子ドナーから生まれたことを知らされていませんか？ そのことについてどう感じていましたか？**

1985年頃、両親が不妊に悩んでいたとき、医師から精子ドナーを使うことを勧められた。ドナーを選び、医師はそれを秘密にするように勧め、当時は匿名が普通だったので、匿名でプロセスを進めた。

7歳の時に父が亡くなった。その頃、両親の実子である妹は、家族に心臓病の病歴があったため、ある医療検査を受けなければならなくなった。それをきっかけに、母親は、娘のドナーの健康歴について関心を持つようになった。彼女はクライオバンクに情報を求め、ドナーについてより多くの情報を得る方法についてサポートグループに支援を求めた。

16歳の時、母親のメールを整理していたら、クライオバンクに送られた「精子提供で生まれた子供の情報」というメールを見つけた。そのメールの一番下に自分の生年月日が書かれていて、それで自分がDC(donor conception)で生まれたことを知った。当時、自分はDCの複雑な仕組みを理解していなかった。何年も前に父親を亡くしたのに、まだ父親がいるような気がして、とてもうれしかった。この人とおとぎ話のような関係を築きたいと考えていた。「ダグ(Doug)が私のパパではないことは知っているわ」と母親に打ち明けた。母親はショックを受けた。それでも、自分と母親はすぐに行動的な考え

を持ち、ドナーを探すことにした。自分は家族の誰とも似ていないため、成長過程で遺伝的なミラーリングを行うことができなかった。また、趣味も違うので、友達からは「養子に違いない」とよく冗談で言われた。ずっと、何か秘密があることは分かっていたが、それが何なのかは分からなかった。このことがわかった後、全てに合点がいった。

父親であるダグのことを今でも「パパ」と呼んでいる。ダグが亡くなった後も、母親はダグの思い出を大切にしている。

**Q. ドナーに会うまでの間、ドナーについてどんな人か空想を巡らせたりしていましたか？**

父親を早くに亡くしているため、父親がいたことを実感することがほとんどない。ドナーが自分のことを知りたがっていると素朴に思い、この関係の可能性にワクワクしたりしていた。

16歳になると、誰もが「自分探し」をするようになる。自分の場合、実の父親がわからないということが、この感覚をより強めていた。自分は、DCの複雑さを理解しておらず、すぐに父親を見つけることができると思い込んでいたが、それを阻まれ、現行の制度に苛立ちを覚えた。手書きの手紙を何通も書き、ドナーと連絡をとろうとした。そして、ネット上の掲示板やフォーラムで、幸せな再会は不可能かもしれないということを知った。

**Q. Donor106に会ったときのことを教えてください。嬉しかったですか？ 特別な繋がりを感じましたか？ それとも、違和感がありましたか？**

カリフォルニア・クライオバンクがドナー106（「スティーブ」）を見つけるまで、約1年かかった。手紙を用意して、見つかったら転送してくれるよう

に頼んでいた。当時、オースティンの大学で学んでいた。自分のところにスティーブが訪ねてきてくれた。みんな(クライオバンクや彼女の母親など)は彼がドナーだと信じていたので、自分も何の疑問も持たなかった。

スティーブはとてもオープンで、受け入れてくれる人だったので、とても付き合いやすかった。二人の関係が打ち解けたものになるには少し時間がかかったが、最初からつながりがあり、無理やりという感じはなかった。それは、2人の性格が似ていたからかもしれない。現在もスティーブと連絡を取り合っている。

#### **Q. DNA 検査がなかったら、わからないままでしたか？**

答えは、イエスでもありノーでもある。

おそらく自分の医療プロフィールが、将来のある時点で事実を浮き彫りすることになったはずだ。そうであれば、スティーブが実の父親ではないことはいずれ明らかになっただろう。

しかし、彼がドナーだと聞かされた後では、DNA鑑定をすることは思いつかなかっただろう。自分は最初からそれを真実として受け入れていた。

せっかくスティーブと知り合ったのに捨てられることを恐れていたのに、彼に真実を伝えるのはすごく抵抗があった。事実を知った彼は泣き出してしまった。彼をなだめすかし、なんとかすべてを説明した。彼は"これで少しは変わるけど、全部じゃない"と言っていた。二人は今でも仲が良い。

#### **Q. 母親はこのことについてどのように感じていますか？ 主治医の精子が使われていたことがわかった後、家族の雰囲気は変わりましたか？**

自分がこのことを知るまで、母親は娘からドナーを知る権利を奪ってしま

ったことに苦しんでいた。母親は、病歴を気にしながらも、罪悪感も感じていた。不妊症のこと、そしてそれが結婚生活に与える影響について、未解決の感情を抱いていた。スティーブが見つかったことで、そのようなやり場のない気持ちが和らいた。彼女は、すべてがうまくいったように感じ、安定した状態になっていた。

母親は、娘のドナーに関する偽装を知ったとき、ショックを受けた。医師について「彼は絶対にそんなことをしない」「私たちは彼のことをずっと知っている」「彼は私たちのコミュニティでとても尊敬されている」と言い、処理しきれなかった。娘の存在に感謝しながらも、妊娠したことに動揺するといった、相反する感情を抱くことがトラウマになっていた。施術の現実を考えると、母親は自分が医学的にレイプされたような気がすると言っている。医師は、母親が隣の部屋にいる間に、興奮した状態で精子を採取したのだ。母親は、欺瞞が発覚するまで、この医師の患者だった。そのことがわかったとき、娘の自分は28、29歳だった。

#### **Q. なぜ医師は自分の精子を使ったのでしょうか？ その動機や背景についてどう考えますか？**

さまざまなことが考えられる。例えば、

- 1) 医師によれば、106番ドナーは「妊娠させる能力がない」とのことだ。しかし、実際にスティーブの精子を使って、イブと同年代の14人の子供が誕生しているのだから、そんなことはないだろう。
- 2) 医師が医学生だったころの古いバイアルを使ったと言っている。当時はクリニックが運営されていなかったため、これも嘘。ありえないことだ。
- 3) お金や「成功したい」というエゴに駆られた可能性がある。

- 4) 同期の医師たちの間で、誰が一番多く赤ちゃんを産ませるか、という賭けや競争があるという噂を聞いたことがあるので、それが動機の一つだった可能性がある。

その医師(Dr. McMorries)は教会の中心的人物。彼は優生学に興味があるのでと推測している。医者である自分の精子に価値があると思っているのだろう。「神が授けられない子供を、私が授けることができる」と信じていたのだろう。このナルシシズムが、彼の行動に重要な役割を果たしている。また、彼はケチで、おそらく(精子バンクに支払うための)お金を節約しようとしたのだろう。

ドクターの信仰が診療に影響する。モットーは「キリスト教の強固な価値観」を実現することだそう。セックスや不倫と、他の男の子供を身ごもることを分けて考えるのは、ある種の宗教的な物語と結びついているのだろう。

彼は非常に保守的である。自分が UT オースチンの大学に進学することを知ると、母親に「リベラルな考え方に洗脳される可能性がある」と説教し、部屋を出て行ったという。彼が自分の精子ドナーであることが発覚する前のことだ。

医師は自分のしたことについて、何の反省も後悔も表明していない。医師との間のコミュニケーションは、弁護士のアドバイス通り、すべて文書で行われている。彼は、「私はあなたの両親に贈り物をした」「私はあなたの父親ではない、ただのドナーだ」などと言っている。彼は、自分の精子は他のものより「優れている」、だから自分の子供は賢いのだと言う。しかし、彼がドナーになった子供の半分は現に高校を中退しているので、彼はこの物語を当初より強くは押し付けないようになった。

彼に対する批判は、「自分に対して匿名ではいけない」ということ。もし、彼がやったことに非倫理的なことがないのなら、なぜそれを隠すのか。彼は、自分のしていることが間違っていると知っていたのだ。

#### Q. 批判すべき点は何ですか？ 精子提供そのものは、出自を知る権利が保障されるなら、容認しますか？

- 1) ドナーから生まれた人の最善の利益になるよう行動するために、業界がやるべきことはたくさんあるはずだ。子供たちが中心でなければならぬ。自分は、オープンな養子縁組に賛成で、誰もが家族を作ることができるように、ドナーと両親の両方を教育するという考えに賛成だ。
- 2) 自分の遺伝的文化や祖先から切り離されたことを是正するためのスペースが必要だ。自分は、レシピエントの親に会い、自分の遺伝子の残りの50%を知りたいという子供の気持ちを尊重する必要があることを伝える。この業界が、非常に透明性の高いものになることを支持する。
- 3) 一人のドナーから生まれる子供の数を厳しく制限する必要がある。これは、ドナーから生まれた人同士の近親相姦を防ぐために重要なこと。
- 4) 医療技術を管理する方法をアップデートする必要がある。アメリカでは、医師がやりたいことをやっているだけ。例えば、デジタル記録のない手書きのメモを残したいというなら、それはそれでいい。悪質な業者が悪事を働かないようにするためのチェックポイントがほとんどない。
- 5) ART が女性の身体に与える影響について、より多くの研究とデータが必要。特に卵子提供の場合、ドナーの最善の利益を中心に考えない、利益だけを追求する輩が存在する。1980年代の改正により、連邦政府の資金援助が認められないため、こ

の業界は民間資金で運営されている。

- 6) 精子ドナーから提供された情報(健康、医療、教育情報)の確認がなされていない。提供される情報の多くは不完全だ。ドナーがまだ 18 歳の場合、質問の答えを知らなかったり、嘘をついたりすることがよくある。ドナーが開示した内容を確認する仕組みがない。
- 7) DC で生まれたことを子供に伝える方法について、レシピエントである親はもっと教育を受けるべき。DNA 検査により匿名性は失われているが、伝えることが当たり前になるような教育があれば、親の不安を解消することができる。
- 8) ソーシャルメディアのグループが、ドナー精子を求める倫理観を侵食している。ドナー精子を求めるための Facebook グループ(クリニックを完全にパスする)が増えてきている。マイノリティはクリニックを通さない道を選ぶ傾向がある。倫理的、道徳的に正しいことを行いながら、経済的な観点から皆のためにスペースを確保するにはどうしたらいいのだろうか？
- 9) 政府等の公的機関で情報を管理するという話がよくあるが、これは LGBTQ コミュニティや不妊症の人々のリストを政府に渡すようなものだという事実に敏感でなければならない。これは良いアイデアとは思えないし、反発があるのも理解できる。ドナーの登録は、そのギャップを埋めることができるかもしれない。

**Q. 「遺伝的つながり」についてどのように考えますか。それは、宿命のように切り離せないものでしょうか。育ての親の存在とどのように異なりますか？**

遺伝子のつながりは自分にとってものすごく大切なものだ(incredibly

important)。遺伝的父親と関係を築けないことがわかったとき、とてもがっかりした。この人のことを知りたいと強く思っていたから。

ある意味で、自分はより大きな善のために、ドナーと関係を築く可能性を犠牲にしなければならなかったと感じている。発見したドナーきょうだいたちとは、大切な関係を築いている。

**Q. 全米で、主治医の精子が使われていたケースは、何件くらい報告されていますか？**

67 人の医師が、このような行為に関わっていることを特定した。また、多くの秘密保持契約が結ばれているのを知っている。同じような境遇にある人たちから相談があり、利用可能な選択肢についてアドバイスを求められる。例えば、法律を変えるためのロビー活動、調停、非開示、メディアへの告発、訴訟、何も無い、など。それは、とても個人的な決断だ。

1980 年代に行われた自己申告による調査では、医師の 2% がこのようなことに従事していたことが判明している。それは、確実に広まっていた。

**Q. その主治医から生まれた人は何人いますか？ まだまだ増えそうですか？ これらの人たちと連絡を取り合ったり、連帯していますか？**

医師の精子から生まれた 13 人のうち、3 人は彼の妻との間にできた子供。残りの 10 人はドナーきょうだいだ。テキサスでは DNA 検査に不信感を持つ人が多いので、実際にはもっと多いかもしれない。ドナーきょうだいの中には、自分の健康状態を知るために DNA 検査を受け、その後見つけた人が何人かいる、Facebook で見つけた人が 3 人、1 人がニュースで自分を見て、その後、医師(Dr. McMorries)の写真を見て知った、クリスマスに遊び半分で検査

を受けた人など、さまざまな人がいる。また、あるきょうだいとの間には緊張があるが、きょうだいのうち、3人とは仲が良い。

医師のもとで働いていた看護師たちと話をした。その中の一人は、不妊を公表したくないという母親との契約を守りたいという気持ちと、自分を助けたいという気持ちの間で板挟みになっているのがわかった。彼女は自分にいくつかの「手がかり」を与えた。それを解明するのは大変な作業だった。

自分の話を公にすることで、まだ自分がグループの一員であることを知らない人もいるのに、自分がグループのために選択をしなければならぬような気がした。何人かのドナーきょうだいは、医師が提供から生まれた人を知りたいという気持ちを持つのを自分が妨げていると考え、腹を立てていた。医師の妻も、「夫の時間を他の女性に取られるのは嫌だ」と自分に腹を立てていた。ドナーきょうだいの一人は、命を与えてくれたマクモリス博士にとっても感謝しており、自分の活動を失礼だと感じているようだ。

感じ方に男女差がすごくある。息子たちはあまり気にしないが、娘たちは気になるようだ。これは、彼女らの多くが、事実を知る前に主治医として診てもらっていたからかもしれない。医師から骨盤の検査などを受けていた。

#### **Q. ロビー活動の成果について教えてください。法律が導入された州は？ 現在議論が進んでいる州は？**

2019年に活動を始めたとき、弁護士は、法律がなく、医師賠償責任の時効はわずか10年で、“no discovery rule”が適用されるため、民事も刑事もないと助言した。医師会には、時効はないので医師免許を剥奪するオプションがある。医師はその後、医師免許を剥奪しようとする自分の試みを訴えるため、接近禁止命令と法令を申請している。

その結果、法律を変えようと決心した。テキサスの上院議員に会い、性的暴行の刑法の中に条文を入れさせた。他の州でも法律が制定され、フロリダ、コロラド、アーカンソー、アリゾナ、ユタ、ケンタッキーで被害者と関わった。各州の法律はかなり違う。連邦法を成立させるには、多くのモデルが必要で、7月にそのための申請書が通過した。とても時間がかかる作業だ。

#### **Q. 大変だったことは？ サポートは得られましたか？**

最初の頃はまだ自分のストーリーのトラウマと闘っていた。何度もストーリーを繰り返すことは難しかったが、自分のストーリーに目的を見出し、自分のためのプラットフォームを作ると、それは容易になった。

COVIDが発生したことで、議員に会うために全国を飛び回る必要はなくなった。Zoomに切り替えたから。個人として活動する方が、NPOとして活動するよりもずっと楽だと思った。その方が、自分の意図が金儲けではなく、法律の抜け穴を塞ぐことであることが明確になる。技術の進歩に法律が遅れていることに、議員たちは気づいていない。

ロー対ウェイド裁判の崩壊後、胚の破壊を禁止する法律が導入される危険性がある。現在、人々は残った胚を提供するか破壊するかを選択することができる。このような禁止法は、自分の遺伝子をコントロールできなくなり、望まれない実子などが生まれる可能性がある。また、人身売買につながる可能性もある。

不妊治療の過失に関する記録はない。データは訴訟から引っ張ってきたものだけ。専門的なガイドラインはあるが、それは基準ではないし、報告もほとんどない。

多くの議員は、不妊治療業界にこれほどまでに規制がないことを知らない。デリケートな話題なので、みんなびっくりしている。関連する判例がないため、同じような法的状況に陥っている(「子供を持つことが傷害であるとは言えない」)。法律を変えるには長い道のりが必要なので、多くの人がお金をもらって秘密保持契約書にサインすることを選ぶ。

#### Q. その他

自分の仕事は、トラウマセラピストで、主にDVや性的虐待の被害者である子どもたちと接している。息子が一時期病気になり、セラピストとしての仕事を休まざるを得なくなった。自分の活動は「無報酬の仕事」だ。現在、本の執筆を終えたところ。DCの領域で意識を高め続けたいと考えている。業界が責任を負うことを望んでいる。また、共に家族を築く方法について人々が決断することを支援したいと考えている。不妊症の割合は増えているが、目的に沿った形で業界を改善する必要がある。

(2022年9月)

#### Ms. Eve Wiley

精子ドナーから生まれる。18歳の時にドナー (Donor 106)に会うが、その後、DNA検査で、実際には主治医がドナーだとわかる。不法行為に対する法律の成立に向けてロビー活動をしている。

2019年には、母親とともにテキサス州オースティンで開かれた上院の刑事司法委員会に出席。20以上の立法機関を訪問し、法案の成立を働きかけてきた。専門カウンセラーの資格を持ち、セラピストとしての活動もしている。

Woman on quest to find sperm donor father finds shocking truth about her conception  
Eve Wiley Texas Woman Fighting to Make Fertility Fraud a Crime (insider.com)

Dallas woman advocates expanding fertility fraud law | wfaa.com

ABC's '20/20' features Dallas woman who found out her mother's fertility doctor is her father (dallasnews.com)

IVF bombshell: Dallas woman learns her biological father is mom's fertility doctor | wfaa.com



## **23 & Me: A Christmas gift from the husband.**

### **23 & Me : 夫からのクリスマスプレゼント**

**Interviewee**

**Mr. Eric Mobley**

#### **Q.自己紹介をお願いします。**

現在 28 歳で、アメリカのケンタッキー州ローウェルに住んでいる。全米のオンライン大学で高等教育のアドミッション（入学試験）に携わっている。夫と結婚して 6 年になり、犬を飼っている。

#### **Q. 精子ドナーから生まれたことを知った時の衝撃をどのように表すことができますか？**

2019 年のクリスマスに、夫から 23&Me キットを贈られた。検査を受ける前、自分がドナーから生まれたことなど全く思いもよらなかった。自分の祖先に対する好奇心から検査を受けたが、遠縁の親族などを探そうとは特に思っていなかった。

2020 年 1 月 7 日、仕事中に遺伝子検査の結果を受け取った。その結果から、自分には異母兄弟がいることがわかり、それが偶然にも高校の同級生だった。その人と血縁関係があることを知って驚いた。その人に連絡を取った。彼は、自分が精子提供で生まれたことを子供の頃から知っていたが、自分は父親が実の父親ではないことを知らなかった。この偶然に発見した情報が、自分を苦しめた。その日、仕事に集中できないので早退した。

退社後、実家に直行し、母親と対面した。その時初めて、母親は自分が精子提供で妊娠したことを明かした。その頃、父親は肝臓がんで闘病中だった

こともあり、状況はもっと厳しかった。

父親の体調が悪かったこともあり、父親と精子提供について話す機会がなかった。もっと話す時間があればよかったけれど、パンデミックが発生し、父親の病状が悪化したため、距離を置く必要があった。父親は 2020 年 5 月に他界した。

その後、母親と話し合う時間を持った。二人は今、お互いに礼儀正しくしていて、おおむね問題ない関係だ。精子提供の話を持ち出すのは気が引けるし、母親はもっと早く言っておけばよかったと罪悪感を抱いているようだ。精子提供で生まれたことを知ったこと、父親の死のトラウマを解消するために、2 年間セラピーに通った。父親は親友だと思っていた。父親は 3 回結婚しているので、年上の異母兄妹が複数いる。一番年の近い兄（12 歳上）も精子提供で生まれていて、母親は父親の 2 番目の妻だ（自分の母親は三番目の妻）。

ドナーから生まれたことが分かってから、何人かの半きょうだいを見つけた。同じドナーから生まれた兄弟が 2 人、姉妹が 3 人いる。長男は今年 30 歳、次男は 28 歳で、年齢も近い。2 人はケンタッキー州に住んでいて、残り はアメリカ全土に散らばっている。

半きょうだいからドナーを知り、何度か彼に連絡を取った。彼は自分の家族を持っていて、自分に対してよそよそしい。2021 年 1 月に一度だけ、ランチのために直接会ったことがある。彼は優しくだったが、プライバシーを要求した。そして、これ以上関わりたくないと言われた。ドナーに対して、時間を割いて会ってくれたことに感謝している。ドナーは 自分と同じ町に住んでいて、彼にとって自分は不安を誘発する存在だ。

自分は、起こったことすべてを多少なりとも受け入れるよう努力してきた。

**Q. 真実を知った後、家族との関係は変わりましたか？ どのように？ 育ての父親のことは、今でも父親と感じていますか？**

しばらくの間、父親を他人として見ていた。自分を育ててくれた人であり、親しい関係であったにもかかわらず、最初はそう感じていた。この感覚は、父親が体調を崩してほとんど話せなくなるまで、数カ月間続いた。自分を育ててくれた父親を「他人」と思うのは、とても不思議な感覚だった。

それは、母親との関係にも影響を及ぼしている。一緒に過ごしながらも、母親に対しては常に裏切られたという感覚がある。何が起きたのか、もっと早く教えるべきだったのにそれをしなかった、母親には責任があると感じている。その結果、二人の関係はギクシャクしている。夏休みに一緒に休暇を過ごしたが、母親と一緒にいても楽しくないような気がした。

**Q. もし、両親が小さい頃からドナーから生まれたことを教えてくれていたなら、その事実とうまく適応していたと思いますか？ ドナーに対する興味関心はどうなっていたと思いますか？**

もし小さい頃から教えられていれば、間違いなく、その知識に順応していただろうと考えている。理想を言えば、18歳のときに教えてほしかった。半姉妹の一人は、16歳のときに告知され、今でも苦労しているが、自分よりはうまく対処している。彼女は、両親から直接告げられた。だから遺伝子検査で知ったのではない。彼女は、半兄弟と同じ学校に通っていたこともある。

たとえもっと早い時期にドナーの存在を知っても、ドナーと会い、彼を知りたいと思ったはずだ。しかし、もっと後で知った場合、その熱意の程度は変わっていたかもしれない。

**Q. メンタルヘルスに影響しましたか。回復するためには、何が必要ですか？ どのくらい時間が必要でしょうか？**

精子提供で生まれたことがわかり、それは確実に精神状態に影響を及ぼした。(パンデミックもあったが) しばらくは、何もしたくない、どこにも行きたくないというくらいに落ち込んでいた。不安になって、仕事に集中できなくなった。

その後、精神状態は確実に良くなってきている。夫に多くの注意を払うことに専念し、また犬を飼い、それが大きな支えになっている。健康で活動的であることに力を注ぎ、体調を整え、ジムに通うようになった。

今、ケンタッキー州やその他の地域にいる半きょうだいと一緒に過ごしている。先月は、半きょうだいの一人とその家族を訪ねて、夫と一緒にテキサスへ行った。この半きょうだいには2人のお母さんがいる。

**Q. 小さい頃、家族の中で、父親に似ている、母親に似ているなどと、話をした記憶はありますか？ 家庭の中に、何か緊張や違和感を感じていましたか？**

思春期を迎えて足の毛が生えてきた頃を思い出す。父親には足の毛が生えていなかったの、ある時、何気なくそのことを父親に話した。父は、「母方の遺伝だろう」と答えた。この説明に疑問を持つことはなかった。

母親から、自分が人工授精で妊娠したことを聞かされていた。その時、父親の精子を使ったのだと信じて疑わなかった。それが、この事実を知ったときにショックを受けた大きな理由のひとつだ。

自分は、母親にもドナーにもよく似ている。精子提供で生まれたことを知るまでは、説明のつかない緊張感はなく、疑うこともなかった。

**Q. 人の性格や能力の形成にとって、環境と遺伝の役割は？ どのように感じていますか？**

いろいろなことが遺伝していると考えている。ドナーが大学で美術史を専攻していたことがわかった。自分も人文科学を専攻した。半きょうだいは皆、歴史、美術、芸術史、演劇に興味がある。両親が大学教育を受けていないため、これは遺伝的なものだと考えている。父親は高校も出ていない。

育ちの要素という点では、確かに育ての親からいろいろなことを吸収できると考えている。例えば、自分はとても社交的で、誰とでも気軽に話すことができる。それは両親と同じだ。

**Q. ドナーきょうだいと会ったときのことを教えてください。似ているところがありますか？ 特別な絆やつながりがありますか？ どのような存在ですか？**

ドナーの半きょうだいとの間に色々な共通点を見出した。皆、同じ年頃で、大まかな趣味も同じ。例えば、飲みに行くとか、食事に行くとか、コンサートに行くとか。しかし休暇をどこで過ごすかなど、違うところもある。

半きょうだいたちとは、みんなとても仲がいい。よく話をしたり、時間があれば会ったりしている。「兄弟」「姉妹」と呼びあっている。半きょうだいの2人は近くに住んでいて、会いたい時に会うことができる。他の2人とも会ったことがある。また、新たに見つけた半姉妹も、数週間後に会いに来る予定だ。自分たちの間には間違いなく絆があると感じている。グループ・テキスト・チェーンがあり、お互いに支え合っている。とても心強い。

育った家庭の兄弟姉妹とは、かなりの年齢差があるため、親密さに欠ける場所があった。一番上の兄弟はもうすぐ60歳になり、一番下の兄弟はまだ12歳も年上だ。そのため、彼らとの間に共通の興味はあまりない。一緒に育

った姉妹のことは大好きだが、彼女たちは50代。

**Q. ドナーとあったときのことを教えてください。似ているところはありましたか？ すぐに打ち解けましたか？ 特別な絆やつながりがありますか？**

二人が出会ったとき、ドナーは自分と連絡を取り続けると信じ込ませていた。去年の夏のある日、ドナーとメール交換をしていた時、初めて彼はこれ以上連絡を取るのをやめたいと言ってきた。自分は彼の意思を尊重した。

それは仕事の合間の即席のミーティングだった。直前のミーティングであったため、緊張し、圧倒された。初デートのようなもので、「この人は僕を気に入ってくれるだろうか」と心配になった。ドナーは質問に答えてくれたが、自分はあまり直接的な質問をしなかった。もっと一般的な、自分たちの興味などについて話した。ドナーは、2年間、2週間ごとに提供していたことを話した。

ドナーに会ったとき、特別な絆を感じた。大学を卒業し、人文科学を専攻していたことを話した。実は、二人は同じ大学に通っていた。また、芸術や旅行など、共通の趣味の話もした。二人の間に多くの共通点があることを感じた。彼はとても誇り高い父親のように見えたので、自分の子供にもそのように振舞ってほしいと願っている。ドナーには4人の息子がいる。そのうちの1人にコンタクトを取り、会った。彼と最初は問題なかったが、しばらくして仲違いしてしまい、今は連絡を取っていない。

もしドナーが見つからなかったら、今もドナーを探し続けていただろうと考えている。今でも定期的に送られてくる23&Meのメールに目を通し、新しい兄弟姉妹のマッチングがないかどうか確認している。大抵は、いとこだけなんだけれど。

母親がドナーについて知っていたのは、彼が地元の大学の医学生であることだけだった。

**Q. パートナーの男性と一緒に、将来子供を育てたいですか？ Yes の場合、養子を希望しますか？ 代理出産ですか？ 遺伝的つながりがある親子関係と、ない親子関係、それぞれどんな advantage と disadvantage があると思いますか？**

自分の子供を持ちたいとは思わない。自分が精子提供で生まれたことを知る前から、夫と二人でそう決めていた。犬を飼って可愛がっている。

自分に 23&Me をプレゼントしたのは夫なので、夫は最初、この状況に罪悪感を覚えたらしい。しかし、「あなたのせいではない」と言い、夫を安心させた。自分の体験を目の前にして、夫は瞠目したが、とてもサポートティブで、一緒にテキサスまで半兄弟の家族に会いに行ったこともある。

**Q. DC は認められますか。**

全体として、親が子供に真実を伝える限り、Donor Conception(DC)には賛成。不妊の問題を抱えていたり、親になりたいと思っても相手がいなかったりする友人もいるので、この方法を支持するが、今はもう 1980 年代や 1990 年代の時代ではないので、子どもには真実を伝えなければならない。ドナーのプライバシーは尊重するが、匿名は難しいと考えている。自分が経験したようなネガティブな体験を他の人にはしてほしくない。

**Q. グループに参加していますか？**

Facebook で "We Are Donor Conceived" というグループを知っている。これは、自分の話や半きょうだいの写真などを公開するのに最適な場所。サポートが必要な場合は、ここが良い発散の

場所になると思う。また、ポッドキャストも聴いている。

**Q. 自分の経験を語ることにはどのような意味がありますか？**

自分の経験を話すことで、認識を広めることができると考えている。商業的な遺伝子検査の結果、自分が DC からの出生者であることを知るのは、まだ新しい概念であり、そのショックは自分の心に大きな傷を残した。両親との絆は、真実を知ったことによって崩れ去った。もし、18 歳くらいのときに両親が教えてくれていたら、もっと違った見方ができただろうと思う。親子関係に影響を与えるので、子どもに隠し事をしないことが大切だ。このことを理解してほしいという思いから、自分の体験を話している。自分は母親に対してずっと裏切られたという思いがあり、同じような経験を他の人にしてほしくないという思いがある。

DC のことが分かってから、自分の経験について YouTube にビデオを投稿している。また、主に不妊の問題に関連するポッドキャスト「I Want To Put A Baby In You」にも出演している。また、高齢の親を持つ人たちのためのパネルにも出演した（彼らは DC の人の視点を求めていた）。ポッドキャストでネガティブなフィードバックを受けたことはないが、YouTube のビデオには、「ご両親はあなたを愛しているし、生まれてきてほしかった」というようなネガティブなコメントがあった。このような人たちは的外れなことを言っていると思う。

半きょうだいの関係にはとても感謝している。一緒に育った兄弟姉妹とは、年齢差があるため、本当のきょうだいではないような気がすることもあった。今は、年齢が近く、共通の趣味を持つ複数のきょうだいがいる。そのことに感謝している。

自分の物語を『アナと雪の女王』のエルサや『ハリー・ポッター』のようなポップカルチャーの登場人物に重ね合わせることがある。彼らは家族に関する衝撃的な事実を乗り越え、成功を収めた。これは、自分にとって良い対処法になっている。

(2022年10月)

### **Mr. Eric Mobley**

現在28歳で、アメリカのケンタッキー州ローウェルに住んでいる。夫から贈られたDNA検査で、2020年に精子提供で生まれたことを知る。大きなショックを受けるが、ドナーとドナーきょうだいに会い、ドナーきょうだいたちとの関係からエンパワーされている。家族は夫と犬。

自分の経験についてYouTubeにビデオを投稿している。また、主に不妊の問題に関連するポッドキャスト「I Want To Put A Baby In You」にも出演している。

I found out I was donor conceived from 23&me - YouTube

Episode 152: DNA Test Surprise Part 2 – Eric Mobley — I Want To Put A Baby In You

## Experience of past sperm donor.

### 精子ドナーの経験 (オーストラリア・ニューサウスウェールズ州)

#### Interviewee

Dr. Haydn Allbutt

#### Q. いつ頃どんな風に提供しましたか。

現在はNSW州に住んでいるが、提供した当時はビクトリア州に住んでいた。だから自分の精子提供はビクトリア州の法律が適用されることになる。Monarch IVFで提供した。提供する時には色々な検査をやったよ。6ヶ月後にも改めて同じ検査をやって、問題がないことを確認してやって提供できる。感染症などのチェックだけでなく、妊娠に適した品質があるかどうかも重要だ。初めて提供したのが1997年だったと思う。ビクトリア州の配偶子提供はとてもオーガナイズされているので有名だ。そして、2000年にチェックしたとき、自分の精子からは2人の子どもが生まれていることを知った。これはMonash IVFのドナーコーディネーターに確認して知ったことだ。最終的にこれまでの提供で11家族に16人の子どもが生まれている。これは規定の人数よりも多いが、何かのミスがあったからだと思う。

#### Q. 子どもに会いましたか？

自分には知っている限り、16人の子どもがいるが、そのうち実際にコンタクトをとったのは2家族だけ。1組は母親と話した。そして提供で生まれた2人の子どもの写真を見せてもらった。実際に子どもに会ったのは1人だけだ。

とても良い経験だった。あったことがなかったので、少し複雑な気持ちも

あった。どんなことを話していいか。ちょっと心配だったけど。彼らには、ドナーを知らないことで、アイデンティティの問題があると聞いていたので。だから良い印象を与えたかったんだ。ちょっとナーバスだったかな。

子どもはそのとき8-9歳だった。とても良い経験だったので、全員に会いたいと思っているよ。でも、今のところ会えたのはその子だけ。

男の子だったんだけど、自分の家族では男の子は皆似ているんだ。例えば自分は父親がその歳のときと全くそっくりだった。そして、その子も全く同じ。その上、会った時は、同じ黄色の上着を着ていたんだ。服まで一緒だったんだね。それに、自分は科学を専門にしているけれど、彼も科学に興味を持っているということもわかった。普通は遺伝じゃないと考えられていることでも、そんなふう似ているということを見つけた。他の二人の子どもについても、一人はエンジニアをやっているし、もう一人は数学の成績がいいんだ。だから環境じゃなくて遺伝なんだと。つまり行動までもが(遺伝によって)似ているんだ。

#### Q. レシピエント家族はあなたにとってどんな存在ですか？

自分はドナーとして、子どもに対する権利はないし、向こうからアクセスがないかぎり、自分から会うという権利はないということはちゃんと理解しているよ。それはカウンセリングでちゃんと説明してもらったし。向こうがもし会いたいと言ってきたら会えるけど、ほとんどの場合、会えないだろうと。だから子どもにいつの日か会えるかもしれないというのは頭の中だけの想像に過ぎなかった。でも自分はいつもの可能性を考えるのが楽しかった。そして子どもたちに会うということにはとても興味があった。でも一方で、ビクトリア州の新しい法律に対し

ては、多くのドナーが個人情報を知られたくないと懸念していることも知っている。だからそういうドナーの場合は、子どもたちには会いたくないだろうし、知られたくもないだろう。でも自分の場合は違って、知られても問題なかったし、会いたいと願っていた。ただ子どもたちがどうしているか知りたかった。興味があったんだ。それは彼らの人生の一部になりたいとか、自分の人生に彼らを組み込みたいとか、そういうことではないよ。ただ純粋に興味関心だけ。

#### **Q. 提供した当時と今とでは考え方に変化がありましたか？**

全く変わっていないよ。当時から、自分がやっていることをはっきりと理解していたし。子どもたちからコンタクトはないだろうとわかっていたし、それでもいいと思っていた。でも、提供した当時、ビクトリア州で法律が変わるということは既に知っていたんだ(※1998年以降の提供からドナーが非匿名化された)。だから子どもたちが自分を見つけ出すかもしれないという可能性のあることもわかっていた。

#### **Q. 家族は知っていますか？**

自分の家族はもちろんそのことを知っているよ。隠し立ては一切しない人間だから。会話でそのことが出てきた時に、言ったんだ。それに家族以外にも、そのことを知っている人はいるよ。

#### **Q. 子どもの知る権利についてどのように考えますか？**

自分には提供で生まれた子どもが16人いるとわかっているけど、自分から探したりはしないよ。それは自分がやることじゃない。あくまで向こうが知りたければ、自分は喜んで会う

よ。でも、いろんなウェブサイトやフォーラムなんかで子どもたちの考えを見ていると、遺伝的親(biological parents)を知りたいという子どもたちは少ないと感じる。育ての親と一緒に過ごしていて幸せだと感じているみたいだ。だからそんな家族に入り込んだり邪魔したりしたいとは思わないよ。提供について知っていてもドナーを知りたくないケースの他には、その数はわからないけれど、親が教えていないので、子どもたちがそのことを知らないケースも一定数はいると思う。11家族に16人の子どもがいても、今まで連絡があったのは、たった2組だけだったしね。

ビクトリア州の法律は良い法律だと思う。遡及的開示には反対だけど。いうのは、子どもには知る権利があると思うから。そしてドナーは、子どもが遺伝的起源について知ることを妨げる権利はない。誰もそれを妨げることはできないと思う。だから解決策は、自分の情報を提供してもいい人だけが配偶子を提供することだ。法律は子どもを守らなければならない。彼らは生まれる前で自ら同意することができない存在だ。過去のドナー情報が破壊されたりしているのを知っている。でも子どもたちは今も生きて存在している。たとえ、ある人たちが、子どもたちはそれらの情報を知る権利がないと考えているとしても。それは正しいことではないと思う。

#### **Q. 遺伝子検査を使ってコンタクトを取れたケースはありますか？**

そういえば、二人の子どもは、クイーンズランド州に住んでいるんだ、そして母親が遺伝に興味があってね。23andMeとか、いろんな遺伝子検査サービスを利用していったんだ。それで、データベースに登録されていた自分の親戚とつながったみたい。つまりクリニック経由を取らずに、私の情報とつ

なだったんだ。それに、親戚の DNA 情報から追加でいろんな情報を手に入れることもできた。そういうことは結構あるみたいだね。でもこの方法では、個人を特定することまではではないよ。ファーストネームまではわかるけど、フルネームはわからないし、住所も書いてないし。でも遠い親戚とかおじ、おばとかまでわかるんだ。そしてその DNA の持ち主がどの国に住んでいるとかまではわかる。だから電話番号とか写真しかないから特定まではではないと思うよ。

(2019年8月)

#### **Dr. Haydn Allbutt**

学生時代に精子ドナーとなり、16人の子どもが生まれた。現在、シドニー大学の医学部で生理学を教えている。精子ドナーとしての経験は、“**Man fathered 16 kids as a uni student**” (Queensland Times, 2018年9月28日)にも取り上げられている。



**Surrogacy as the ultimate altruism:  
Interview with the first surrogate in the  
UK.**

**代理出産は究極の人助け  
～イギリス最初の代理母として～**

**Interviewee**

**Ms. Kim Cotton**

**Q. 代理母になった時の経験を教えてください。**

アメリカのエージェントを通して1985年に代理母になった。イギリスのマスコミに見つかり、メディアに引っ張り出された。それをきっかけに、イギリスで、商業的代理出産と、代理出産の広告を禁止する法律が可決した。世論に基づいたお決まりの対応だった。

代理母となった時、孤独を感じた。ほかに話ができる代理母がいなかったから。他の人には同じような経験は味わってほしくないと思った。その後、代理母を経験した女性に出会い、1988年に私たちは共同でCOTSという団体を立ち上げた。

代理出産は素晴らしいことだとずっと言い続けている。それこそ人生を変えてしまうくらいに。人を助けることがすごく好き。代理出産では、他者との関りからもたらされる心地よさを得られる。ものすごく価値あることだと思う。依頼者に子どもを渡したときの高揚した気持ちを思い出す。

だから、関わる人がきちんとサポートされていると感じられるようにしたいし、代理母を探すお手伝いをしたい。イギリスでは広告が禁止されているので、難しい面もある。

**Q. 代理母は不足していますか？**

代理母は、いつでも不足している。需要が供給を大きく上回っているから。

COTSでは2年間登録を中止していて、空きがあったらその都度、対象者に連絡し、対応している。

イギリスの代理出産法には、これまで抜本的な変化はないが、同性カップルが親決定の申請ができるようになってから、需要が急増している。COTSは追いつくのにいっぱいいっぱいだ。

COTSでは、メンバーを慎重にセレクトしている。現在約30組のカップルがいて、15組が妊娠中だ。何度も出産している代理母も結構いる。一番多い人で、15回も出産した代理母もいたが、彼女はCOTSの規則を破ったので他へ移って行ってしまった。別の代理母は10人ほど出産したが、実子は一人も持たなかった。彼女は妊娠するのが好きだったから。これまで、COTSから1089人が誕生した。

**Q. 代理母に応募してくる女性は、代理出産について十分に理解していますか？**

今のところ、ちゃんと理解していると思う。妊娠はひとりひとり違うし、健康が損なわれたり、合併症を引き起こす可能性もあると、COTSではきちんとわかるように伝えている。通常、自分の子どもを産んでから代理母になるよう勧めているが、皆がそうするわけではない。それでも、女性たちは非常によく理解している。

**Q. 出生前検査は、代理出産でどのくらい実施されていますか、その結果、中絶を受け入れる代理母はどのくらいいますか？**

金銭的に余裕のある依頼者は、ほぼ出生前検査を実施している。この検査は今では一般的になっている。多くの人は2年間保存できる凍結胚を持っているので、選択肢がある。障害のある

子どもを産むことは代理母にとってかなりショックなことだ。

中絶になる例もあるが、それほど多くはない。今まで、障害がわかった胎児の妊娠を継続した例はなかった。代理母と依頼者のマッチングの基準として中絶についての見解が一致することを入れている。だから一致していなければ、そもそも契約は結ばれることはない。

### **Q. 代理母にはどのような人が多いですか？**

代理母に共通するような属性は特にないのではないかと思う。共通することといえば、皆、“無謀”(mad)だということ。言い換えれば、“パイオニア精神”がある。コンフォート・ゾーンから出ることに抵抗がない。周囲や世間からたびたび批判され、この感覚がより強くなるようだ。代理出産をよしとしない人もある程度いるので、代理母は自分の決定に確信を持つ必要がある。

代理母は色々な職業についている。看護師、助産師、教師や保育士なども多いけれど、決まったパターンがあるわけではない。皆、自分の子育てを楽しんでいて、妊娠も楽しかった。彼女たちの余った時間を生産的なものにしてくれるのが、代理出産だ。

### **Q. 現在、COTS では、依頼者は何組ほど待機していますか？**

目下のところ新しい依頼者は受け入れていない。Facebook のアカウントには、定期的に参加希望の申し込みがある。その中から最も切実な人だけを選ぶようにしている。もしマッチする相手が見つかりそうもない場合は、受け入れを保留にする。とりあえず受け入れて参加費だけ徴収するようなやり方はしない。待機している依頼者のプロフィールの保管をやってみたこともあ

ったが、あまりにも負担が大きかったのでやめた。

代理母を見つけられるチャンスはとても少ないので、依頼者は積極的に行動する。つまり、自分たちで代理母を見つけようとする。アジア人カップルは文化の違いから希望に合う代理母を見つけるのが難しいが、フェイスブックを使って自分の出身のコミュニティで代理母を見つけた南アジア出身の女性もいる。ムスリムのカップルになるともっと難しい。彼らは秘密にしたいと思っているので、COTS で見つけるのは困難だ。南アジアでは不妊に強いスティグマがついている。

### **Q. すぐに代理母を見つけることができる依頼者はどのような人ですか？**

いちばん大事なものは、ライフスタイルと人間性。関心を共有していることも大事。代理母と依頼者の友情と信頼は、代理母が生まれた子を手元に置く決断をしないため重要な要素だ(※イギリスでは代理母に決定権があり、子供を依頼者に渡さないで自分で育てることも可能)。

### **Q. 英政府は、規制緩和をして、代理母を増やせるような対策をすべきでしょうか？**

代理母を増やせるように何らかの対策をすべきだと思う。現在、代理出産法の改正に向けて協議が進んでおり、COTS も、そのプロセスに関与している。見通しはかなり明るいと思う。代理出産の広告が認められ、事前親決定が認められ、子どもの誕生と同時に依頼者が法律上の親になれる(※これまでのように裁判所で親決定命令を受ける必要がなくなる)。

また、精子と卵子両方の提供(double donation)を受けての代理出産が認められることになりそう(単身者はすでに申請ができる)。そのため代理出産を希望する人たちが押し寄せてきている

がCOTSではまだその人たちの受け入れができていない。まずは、すでにリスト上にいる待機中のカップルをなんとかしなければならぬ。また、多くの代理母（私も含め）は単身者に子どもを渡すのは心配になる。すでに多くのひとり親家庭が存在している。しかし、自分は、(どちらかに何かがあった場合に備えて)親がふたりそろっていることが望ましいと考えている。第一、ひとりで子どもを育てるのは負担が大きいし大変だ。

代理母を増やすためには教育も役立つ。学校の性教育は妊娠しないようにする方法を教えるが、不妊については教えない。不妊の問題、特にある年齢になると卵子の質が落ちることは教えるべきだ。女性が母親になろうとする年齢はどんどん高くなっている。後回しにするリスクを(男性も含めて)若い人たちに教えておく必要がある。

#### **Q. 外国人の代理母はイギリスで代理母になることはできますか？**

イギリスで居住権(residency)を持っていればできる。NHSに確実にアクセスできれば大丈夫。

外国人の代理母の場合、依頼者としては、代理母が赤ちゃんと一緒に飛行機に乗って消えてしまわないかという心配が生じるかもしれない。

#### **Q. 海外での代理出産の問題点は何でしょうか？**

COTSは海外での代理出産は扱っていない。トラブルが多いのではないかと思う。イギリスや海外にはそのような代理出産を扱うエージェントがある。

Brilliant Beginningsという海外での代理出産を取り扱うエージェントがある。とても高額な料金がかかる。今、COVID-19のため、多くの赤ちゃんがウクライナやカナダ、アメリカで立ち

往生している。赤ちゃんを引き取ることができない依頼者が多く出ている。

代理出産の料金はUKで約30,000ポンド、アメリカで約200,000ポンド、カナダは約150,000ポンド。ウクライナ30,000-40,000ポンドだが、ウクライナでは同性カップルは利用できない。

#### **Q. 代理母と依頼者は継続的にコンタクトを取りますか？**

ほとんどの依頼者がそうしている。はじめのうちは写真、日々の報告など頻繁にコンタクトをとるが、目新しさがなくなってくると徐々に連絡を取らなくなる。何を求めているかによる。

私が代理母になって産んだ双子は現在ニュージーランドに住んでいて、30歳になる。今も双子の母親のリンダと定期的にスカイプで話したり、Facebookを通して連絡を取り合っている。彼らがイギリスにやってくたら、落ち合う。リンダは私の母の葬儀にも参列した。拡大家族のよう。私たちはお互いどうしているか関心がある。それは思いやりのある叔母のような役割で、心配はするが責任はとらないという関係に近いかもしれない。

#### **Q. 子供への告知は行われていますか？**

子どもが(親から知らされておらず)自分でそのことを発見するのは良くないと考えている。親はきちんと知らせること、これはCOTSのガイドラインに書かれている。たくさんの本が出ている。私には、卵子提供で生まれた孫もいる。私の娘は孫に卵子提供についての本を読み聞かせている。これは後で知ってしまった時のショックを防ぐことができる。

COTSでは子どもに伝えることを条件にしている。かつては伝えない人が多かったが、現在はオープンで正直であることが絶対条件だ。

### Q. 代理母と依頼者の交流は、子供に良い影響を与えますか？

子どもにとっては間違いなく良いことだ。COTS で生まれた子どもの例で、現在 20 代前半で医者になるために学んでいる女性がいる。彼女は遺伝上の母親や、父親の違うきょうだいと連絡を取り合っている。巨大な拡大家族のようだ。彼女は COTS のアンバサダーとなり、代理出産法改正の審議で、保健省で証言した。彼女は代理出産で生まれた子どもとして独自の視点を持っている。

ケンブリッジ大学の教授が幼少期から十代後半までの、代理出産で生まれた子どもについての研究を行った。その結果、子どもたちは社会に適応し、信じられないくらいうまくやっていることがわかった。

### Q. 代理出産法改正案の内容についてどう思いますか？

広告が解禁されたならそれは大きな利点となる。一方、商業的代理出産は引き続き禁止されるべきだ。法案の悪い面は、クリニックを通して代理出産を行う場合に、依頼者と代理母はそれぞれ弁護士をつけるという、余計な条件が課せられたことだ。いうまでもなく、これは弁護士に利益をもたらすものだ（そして、この条件を推し進めたのはほかならぬ弁護士だ）。依頼者にとっては余計なコストがかかる。COTS には顧問弁護士がいて、代理出産の最初から最後までカップルをサポートする。そんな難しいことではないのに。

また、カウンセリングを受けることが義務になる。しかし COTS を利用するカップルは既に受けている。COTS のカウンセラーからの報告書が認められるべきだが、クリニックでは認めないだろうから、さらに費用がかさむことになる。

私は、代理母は堂々と支払いをうけるべきだといつも言ってきた。現在、

補償をどうするか、状況は不明瞭だ

（仕事として捉えるか、完全に利他的なものとするか）。負担を考えると、概ね 15,000 ポンドくらいは支払うのが妥当と考える。

家庭裁判所は、子供の最善の利益に基づいて、代理母に 15,000 ポンドが支払われたケースで親決定命令を出している。余分なお金が支払われたという理由で子供を「返す」のはばかげているから。

代理母以外は皆支払いを受けることが許されている。かかった費用だけといって約 2,000 ポンドだけなんてばかげている。弁護士やカウンセラーは利益を得ているのに、代理母には何も支払われぬ。代理母は相当の補償を受けべきだと思う。逸失賃金などもカバーされるべきだ。

代理母たちはそのお金を療養や休暇にあてたいと考えている。すでに使い道を決めている人もいる（家族でディズニーランドへ行く、車の購入、家の改築など）。

### Q. 妊娠中に依頼者と代理母が感情的に対立することはありますか？

妊娠が進むにつれて、代理母がもうたくさんだと思えるようになって、ほんのわずかな亀裂が入ることもある。依頼者がイラつかせることを言ったりすると、一触即発となる。文字でのやりとりは誤解を生むことがある。依頼者はとても心配しながらも期待に満ち溢れているから、いつも今どうなっているのか知りたがる。それで、フラストレーションと緊張が高まることもあるが、子どもが産まれてしまえば解消する。COTS が間に入って仲裁することもある。

### Q. “Altruistic Surrogacy”と“Commercial Surrogacy”の違いは？

イギリスは利他的代理出産を維持すべきだと思うが、宣伝はできるようにして欲しい。

COTS がやっているのは、まぎれもなく利他的代理出産だと思う。出産後も、子どものため、何ヶ月も依頼者へ母乳を提供している代理母もたくさんいる。それは利益のためではない。COTS の資金も微々たるもの。これまで金銭面で大変な思いをしてきた。

商業的代理出産では、クリニックが依頼者から多額のお金をとる。COTS に加入すれば、費用は 850 ポンドだけ。Brilliant Beginning なら 12,000 ポンドになる。あそこのエージェントでは、最初の電話だけで 650 ポンドもかかる。

ほかの国のことはあまりわからないのでコメントできない。ただ、前に、アメリカのエージェントを訪問したことがあり、そこはとてもよかったので人に勧めたことがある。一番いいと思ったのは、代理母たちは毎月、カウンセラーのミーティングを受けていたこと。15 から 20 人の代理母に対して一度に行われていた。感動したし、イギリスでも同じようにやったほうがいい。素晴らしいシステムだ。そのエージェントを始めた男性は自身も不妊で、依頼者と代理母を同じようにケアして、プロフェッショナルでありながら心のこもった経営をしていた。

#### Q. Covid-19 の影響は？

COTS の運営でも、対面ミーティングができなくなったが、Zoom や Skype がとても役に立った。結構うまくいったと思う。クリニックで代理母に初めて会ったという依頼者もいた。

ソーシャルディスタンスが問題となっているが、何とか乗り越えてきた COVID19 のせいで、代理出産の手続きに遅れが生じたこともある。

#### Q. 子宮移植についてどう思いますか？

今まで、考えたことがなかった。亡くなったドナーからのみ行われるものだという印象。

技術が発展して男性も妊娠できるようになったらどうかと思う。それは冗談だが、もし子宮移植ができるようになれば、人口はかなり減るのではないかという気がする。

(2021 年 6 月)

#### Ms. Kim Cotton

英国の代理出産の非営利団体 COTS (Childlessness Overcome Through Surrogacy) の創始者。1988 年に創立され、1,078 人の子どもが生まれた。

1985 年にイギリス初の代理母となる。1991 年にも双子を代理出産。双子の家族は現在ニュージーランド在住だが、現在も Facebook などを通して繋がっている。

**Gestational surrogacy in the US and UK:  
From ex-surrogate's perspective.**

**米国と英国における代理出産:  
元代理母としての経験から**

**Interviewee**

**Ms. Alyssa Martin**

**Q. 米国と英国では代理出産に対して全く異なるアプローチをしています。代理母経験者として、それぞれ pro と con を教えてください。**

代理母として最初の経験は、2014年に米国カリフォルニアで子どもを出産したこと。エージェントに登録してフランス人カップルとマッチングした。双子を妊娠していたが、38週まで実際にそのカップルと対面することはなかった。それまでは、スカイプやメールを通しての会話ができるだけだった。最終的に関係を築くことはできたが、難しかった。

米国のやり方で良かったのは、“Prebirth order”の制度があったこと。これは、赤ちゃんが生まれたらすぐにカリフォルニア州の出生証明書に依頼親の名前が記載されるという手続きのこと。この制度は、簡単に手続きができ、契約書として法的強制力もある。これとは対照的に、英国では出生証明書に掲載されるのは私と夫の名前で、それを依頼親に変更するまでに9か月もかかった。

2度目の代理母は、2020年に英国で経験した。Brilliant Beginningsという非営利団体に登録した。最初、依頼親とのマッチングまでに多くの時間を費やした。依頼親が私の子どもたちと交流する機会があり、依頼親の人となりを判断することができた。しかし、その後の体外受精は何度も失敗し、妊娠するまでに約18か月もかかった。辛かつ

たが、依頼親とは強い絆をつくることができ、それはかけがえのないものになった。

米国と英国のどちらが良いとは言えない。どちらにも良い点と悪い点があるから。でも、もう一回代理母になるとするなら、依頼親とは親密な関係を築きたいと思うし、実際に会いたいと思う。米国での最初の代理出産は遠距離だったためそれが難しかった。英国は法的な面で改革が必要だ。

**Q. 代理母になる前と後で、代理出産のリスクについての理解に違いは生じたか？**

それはあった。最初の代理出産の時は、急いでいたと思う。意欲はあったものの、実際のプロセスについてはよくわかっていなかった。そして、当時世話をしてくれていたエージェントは比較的新しく、経験も少なかったので、十分な準備ができていなかった。

Brilliant Beginningsは全てを網羅しているエージェントだと思う。依頼親と代理母が、国ごとの法律の違いも含めて、法律についてきちんと理解する時間をとってくれた。

**Q. 代理母になりたい女性の属性、動機や、報酬に対する期待、依頼者との交流希望、などについて、米国と英国で違いは見られますか？**

ある。商業的代理出産の場合、対価が生じるので代理母と依頼親の力関係は対等になる。そして、依頼親は、よりバランスが取れた方法で感謝の気持ちを表すことができる。利他的代理出産では、依頼親がお礼を表す具体的な方法がない。だから代理出産の期間中に代理母が大きな力をもつことになる。しかし利他的代理出産は、依頼親が多額の謝礼金を申し出ることを防ぐことにもなる。出産後、代理母はすこしだけ悲しい思いをすることがある。

依頼親は自分たちの新しい生活に移り、別のところに関心が向いてしまい、代理母に関心がなくなる。

もし対価を認めれば、代理出産に興味はあっても、色々な理由で参加を躊躇していたより多くの女性に門戸が開かれると思う。代理母の側から見ると、それによって多くの時間や労力が失われたり、家族との時間が失われたりするから。そもそも、どんな代理出産にも、利他的な要素はあるものだ。ある程度やりたいというボランティアの気持ちがあれば、対価があってもやらない。報酬があれば、後押しになる。利他的欲求を優先することができ、そのために失う時間と金銭を犠牲にすることもない。

両方経験してみて、私は自分の夫と子供たちが払う犠牲を考えると、商業的代理出産に参加するほうが妥当だと思う。

#### **Q. ご自身のお子さん、夫には、代理出産についてどのように説明し、理解してもらいましたか？**

最初の代理出産の時は、子どもは息子ひとりで、まだ幼かったので理解していなかった。夫はとても協力的で、対価が払われると聞いて驚き、喜んでいました。

2度目は夫と私が共同で決定した。私が英国で出産できるようにするため、夫は前もって子どもたちを連れて日本へ行った。夫のサポートは不可欠だった。彼に恩返しをしたい気持ち。

Brilliant Beginnings では、代理母のパートナーが協力的な場合のみ、代理出産のプロセスを進める。パートナーがいない場合でも、少なくとも誰かひとりにはサポートしてくれる人物が周りにいないといけない。

2度目の代理出産の時、私は自分の子どもたちには正直に、分かりやすく説明した。子どもたちは依頼親に何度か会っていたので、代理出産の考え方を

を理解することができたうえ、他人に話すことも抵抗がなかった。最近では、赤ちゃんはどうしているかなどと聞いてくるようになった。最初から、赤ちゃんは自分たちのきょうだいではなく、一緒に暮らすこともないということをやっと理解していた。

#### **Q. 代理母と依頼者の関係が悪化した場合、その原因は何でしょうか？どのように解決すればよいでしょうか？**

コミュニケーションが一番大事な要素。コミュニケーション不足で誤解が生じていると思う。

Brilliant Beginnings では、先着順で代理母と依頼親を機会的にマッチングしていくようなことはしない。そうではなく、双方のプロフィールを吟味し、直接話すのがよいか、それともメールがよいかなど、どのようなコミュニケーション方法を望むかというような細部にまで注目してマッチングする。

特に最初の時は、「連絡がこない」というような不満が出る時がある。早い段階で報酬などお金に関する話を話し合うのは難しいだろうから、Brilliant Beginnings は誤解が生じないようにこのような会話がスムーズにできるよう手助けしている。

#### **Q. 代理出産で、ハッピーな場面、困難と感じる場面、それぞれを教えてください。**

一番ハッピーな場面は、依頼親が初めて赤ちゃんを抱いた様子を見るとき。自分と依頼親が協働したすべての集大成をみるのは魔法のような瞬間。愛情が育っていくのを見るのは素晴らしい。あらゆる痛みと苦悩を経て、投薬そして治療をやった甲斐があった。この瞬間を捉えるために写真を撮ることを強く勧める。

辛かったのは、2度目の代理出産の時、流産と体外受精の失敗が重なったこと。最初の代理出産はとても簡単だ

ったが、2度目は5回の移植に失敗し、3回の流産を経験した。これは肉体的に大変だったし、依頼親が成功させようともがいているのを見るのは心理的につらかった。異性カップルの場合は、たいていは代理出産を始める前にすでに数回のサイクル治療を経験している。だから、彼らにとってはさらに失敗が増えたことになる。難しい話し合いがなされる局面もあった。代理母と依頼親ともに強いレジリエンスが要求される。

**Q. 代理母へのサポートは米国とイギリス、どちらが充実していますか？ 代理母同士のネットワークやサポートグループはありますか？**

米国のほうがサポートは充実していると思う。これは現在、米国の多くの州が代理母を守り、代理出産契約を認める包括的な法律を持っているから。特に、カリフォルニア州には、代理母は21歳以上で、自身の子どもを持つ女性に限るという厳しい法律がある。これは、感情面に対処する準備が整っていない若い女性が、代理出産に臨むことがないようにするため。また、代理母が子どもを手元におくことはできないようになっており、依頼者の権利は保護されている。

米国では中絶の問題など事前に話しあっておかなければならない重要な問題を確認するために契約を交わす。

**Q. 妊娠中に胎児に障害が見つかった場合の中絶について、代理母経験者としてどのような見解を持っていますか？**

それは依頼親が決めることだと思う。子どもと一緒に暮らすのは彼らだから、彼らが決めればよいこと。自分の選択とは違ったとしても、口を挟むべきではないと思う。この点について代理母と依頼親は見解を統一すべきだと思う。クオリティ・オブ・ライフな

どキーとなる概念について掘り下げて定義することが大切。「中絶しなさい」と言うのに倫理的な方法はないが、依頼親が望まないのに妊娠を続けるのは、代理母にとっても同じように苦痛が伴うことだと思うから。自分の身に危険がない限りは、依頼親の希望に従う。ダウン症の子どもを育てたいという希望があったり、子どもが出生後に亡くなることがわかっているのに妊娠を続けてほしいと言われたら、そうする。

私は妊娠初期に通常の血液検査と超音波を行ったが、依頼親はその後の遺伝子検査を希望しなかった。彼らは子どもの性別を知りたがらなかった。私だったら別の選択をしたと思うけど、依頼親は子どもが誕生するまで性別を知らなかった。

代理出産がほかの妊娠と比べてより危険だとは思わない。しかし例えば、ほかの子どものためにはできないが、自分自身の子どものためなら対処できるリスクがある。2型糖尿病になるリスクや抗不安1うつ薬の処方をやめることなど、自分のための妊娠と代理出産の場合とで対処が異なるケースがある。Brilliant Beginningsでは、この二つを区別して考えるようアドバイスしている。

**Q. 代理出産で産んだ子供たちと今も交流していますか？ このような交流の機会は、代理母にとって重要ですか？**

今も2組の依頼親と連絡を取っている。どちらの関係も、彼らのために赤ちゃんを産み、渡すことをきっかけに始まったものだ。

英国に住んでいたころは、3-4か月に一度はフランスに住む双子に会いに行くことができた。とても楽しかった。私の子どもたちは、フランスの双子のことをフランスのいとことして認識していた。双子の母親はほぼ毎月のようにメールで写真を送ってくれる。私た



この関係は自然で無理のないもの。そこにプレッシャーはない。

もしその時、英国への渡航が可能になっていたら、クリスマス後に2回目の代理出産の子どもと家族に会いに行きたいと思っている。その母親とも毎月のようにコンタクトを取っている。Brilliant Beginnings は依頼親と代理母のマッチングに多くの時間をかける。米国のエージェントはビジネスライクで依頼親と代理母が理解を深めるための時間をそれほどとらない。その点はかなり異なる。

#### **Q. イギリスとアメリカで代理母になって、それぞれいくらもらいましたか？**

米国では航空券代、宿泊費、医療費と保険を含む経費として約20,000米ドル受け取った。また、報酬として30,000米ドルと、双子を身ごもっていたために発生する追加費用(双子用のマタニティウェア、安静が余分に必要となりその間のチャイルドケアの費用)として、さらに5,000米ドル受け取った。

英国ではすべてをカバーした基本経費として15,000ポンドを受け取った。当時のCOVIDの方針に従って、依頼親は私立病院への転院を希望した。これにより、依頼親は追加で最終月のマタニティケアと出産時に病院で過ごした二日分の経費12,000ポンドを追加で支払った。

双子の妊娠はもう嫌だ。たとえ追加の対価が払われたとしても。とにかく大変だったから。双子を産んだ時の対価は適切な額だったと思うけれど。

#### **Q. 白人の依頼者は白人の代理母を、アジア系の依頼者はアジア系の代理母を好むなどのパターンはありますか？**

英国と米国ではかなり異なる。英国の人口の85%が白人だから、依頼親と代理母の白人比率も高い。

米国では、白人カップルは代理母の人種についてこだわりがない人が多いように思う。それに比べ、黒人カップルは、共通の文化や経験を持つ黒人の代理母のほうがやりやすいと感じているように思う。

必ずしもそのように要求するとは限らないが、似通った経済状況や文化的背景を持っていたほうが関係はうまくいく傾向がある。

白人家庭のほうがお金持ちで社会的に受け入れられているので、白人のほうが代理出産を利用する傾向がある。しかし、黒人の数も増えてきている。

過去10年でみると、代理出産を依頼するアジア系、ヒスパニック系の家族の数が顕著に増えたというようなことはないと思う。今後どうなるかを予測することはできないが、ヒスパニック系家族では、カトリック信仰を持っていることが多いので、受け入れられにくいのでは。

#### **Q. 日本では不妊治療を受ける患者が非常に多いです。日本の文化に代理出産は合うと思いますか？**

日本人カップルにとって、代理出産は良い選択肢になると思う。日本では仕事重要で人々は忙しく、妊娠するタイミングを見つけるのが難しい。代理出産はその妥協策となりえるのではないか。政府は援助すべきだ。

もし代理出産に対価が払われるとすれば、仕事復帰を望まない女性にとって、在宅で家族を養う手段となるかもしれない。

#### **Q. Brilliant Beginnings で代理出産を依頼する英国人の中で人気の渡航先はどこですか？ その理由は？**

Brilliant Beginnings では3つのオプションがある。一つ目は英国内で行うこと。しかし代理母不足のため、現状では代理母を見つけるのに2-3年待ちが

ふつう。二つ目は米国。保険と旅費の面でかなり割高になる。三つ目はカナダで、こちらも費用がかさむのは同じだが、米国に比べれば抑えられる。

カナダと米国は比較的早く進む。マッチングから子どもの出産までが2年以内で進められる。

Brilliant Beginnings では海外での代理出産を基本的に勧めていないが、非営利団体として法律事務所 NGA と提携しており、ジョージアなど海外から英国に子どもを連れてくる親のために法律面での助言を提供することができる。

#### **Q. 代理母不足はどのようにすれば解消できますか？**

対価を支払うことができれば、英国で代理母になろうとする女性を増やすことができるだろう。すでに興味を持っているが、家族のために金銭的な対価を得られないことが引っかかって決断できない女性が少なからずいる。対価が発生すれば、時間と労力と犠牲を払う価値のある事と感ずることができるようになり、代理母の数を増やす一助となるのではないか。

米国では、代理母は今もやや不足している。しかし、それはプロセスと関係がある。代理母が十分に理解し、準備ができているかを確認するのに時間がかかり、急いで進めることができない。これには6か月かかる。

#### **Q. ゲイカップルの依頼者は代理母を探すのがより困難だということはあるですか？**

米国と英国では、そのようなことは感じなかった。Brilliant Beginnings は少し偏っているかもしれない。なぜなら、ゲイカップルやトランスジェンダー、そしてシングルの人々をもクライアントとして積極的に取り込んできたから。そのため、ほかの団体より多様なクライアントを抱えている。

#### **Q. Brilliant Beginnings では、渡航先の国について何か特別なコネクションや情報を持っていますか？**

持っている。Brilliant Beginnings と NGA は、英国の法律が時代遅れだったため、法的プロセスを容易にするために努力してきた。

子どもの誕生から英国に連れて帰るまでにかかる平均日数は6-8週間。書類に不備があればさらに延びる Brilliant Beginnings は依頼親に、確立された方法に従うようアドバイスをし、国境を越える際に使うレターのテンプレートを提供している。

#### **Q. インドやタイ、カンボジアなどでは代理母の搾取が問題になり、商業的代理出産が禁止になりました。何が代理母の搾取に当たりますか？**

搾取の問題を注意深く取り除かなければならない。女性が必要に迫られて代理母になったり、強制的に妊娠させられたりする状況におかれるべきではない。

代理出産に際して代理母のウェルビーイングが確実なものとなるためにきちんとした法律を作らなければならない。依頼親を法律で守ることも重要。依頼親に何かあった場合に誰が子どもの面倒をみるかなどにまで広げて考えなければならない。

#### **Q. Brilliant Beginnings は代理出産法改正についてどのようなロビー活動を行なっていますか？**

Brilliant Beginnings は、イギリス政府に影響を与えようと尽力している。私たちは法律を変えるために議員や地方自治体に接触している。時代遅れの英国の法律を変えるために精力的にキャンペーンを行っていたが、COVID-19でその勢いはやや失われた。

特別なロビー団体はないが、重要人物と率直に対話を進め、英国の代理出

産の現状と法律の限界について政府や国民に知ってもらおうと努力している。

**Q. 子宮移植について、どう思いますか？  
代理母で、他の女性のために自分の子宮  
を提供してもいいという人がいると思いま  
すか？**

子宮移植はスカンジナビアで試験的に行われていた2012年ごろに初めて耳にした。その後、2018年に米国で行われていた時にも耳にした。ほかの人の助けになるのであれば、喜んで自分の子宮を提供したい。ほかにも同じように思っている女性を知っている。もし自分の家族を作り終えたら、必要とする人にそれを渡してもいいのではないか。手続きが簡単であればもっといいと思う。

(2021年8月)

**Ms. Alyssa Martin**

英国と米国で代理母として出産した。

現在は、英国での代理出産の際にサポートを受けた非営利団体 **Brilliant Beginnings** において代理出産のマネージャーとしてサポートしている。

家族は米軍勤務の夫と二人の息子。インタビュー時は日本に在住。

## Gay Dad Australia.

### ゲイカップルの親たちのコミュニティ

#### Interviewee

#### Mr. Rodney Chiang-Cruise

#### Q. このグループについて教えてください。

親になりたいゲイカップルをつなげるために6組のゲイカップルがコアになって13-14年前に設立された。

当時ゲイカップルの養子はできず、里親はできたがかなり限定されていた。共同親権で親になる方法か代理出産があった。当時、代理出産はまだかなり新しい方法だった。このグループのメンバーは代理出産で親になるゲイカップルがメイン。代理出産にアクセスできるのは、当初は、高学歴の専門職で高収入、高年齢のゲイカップルだけだった。

いまオーストラリアに会員は1,000人ほどいる。各州にもサブグループがあり、全部合わせると3,0004,000人くらいになると思うが、入れ替わりも結構ある。メンバーになるためには審査がある。Facebookで連絡を取り合う方法が今は主流だ。その他にメールや実際に会うこともある。互いに自分の経験を交換しあってメンバーが成長できるモデルを作っている。

各州のサブグループの中でRainbow Familiesと連携しているNSW州のグループが政府から支援を受けている。タスマニアと北部準州にはメンバーが少なく、グループはあるが参加者が少ないので他州のグループに参加してもらっている。首都特別地域についてはNSW州と統合されている。

#### Q. 代理出産で親になるゲイカップルは増えていますか？

SBSで、代理出産で親になったゲイカップルのドキュメンタリー(Tony and Lee “Two men and a baby”2008)を見たことがきっかけで代理出産に興味をもった。そしてすぐにそのカップルに連絡をした。代理出産に興味をもつゲイカップルのためのグループが必要だという認識を共有できた。それがきっかけで、このグループが始まった。代理出産に関心を持つゲイカップルは多くいて、メンバーは飛躍的に増加していった。グループでは今、メンタープログラムをメンバーに提供している。専属のメンターがついて、これから代理出産に取り組むカップルに助言をする。代理出産のプロセスはとてもストレスフルで“The emotional rollercoaster”のようだから、そういったサポートがあると心強いと思う。グループには代理出産で親になろうとする息子を心配する母親からのコンタクトもよくある。

#### Q. 養子と代理出産のどちらが主流でしょうか？

断然、代理出産が主流だ。養子はゲイカップルだけでなく、全てのカップルにとってとても難しい。4万人の待機があるのに対して毎年17人しか養子候補となる子どもがいない。永久里親(permanent foster care)で最終的に養子にできる制度はNSW州では少し緩められたが、ビクトリア州ではほとんど可能性がない。

#### Q. 伝統的代理出産と体外受精(借り腹)型の代理出産のどちらが一般的ですか？

QLD州では伝統的代理出産ができるが、ゲイカップルの間では卵子ドナーを使う代理出産の方が圧倒的(99.99%)に選ばれている。現在の渡航先は、アメリカとカナダがメイン。

体外受精型の代理出産が好まれる理由として、依頼者の方は代理母の心変わりを恐れているし、代理母の方も同

じように依頼者の心変わりを恐れているからだと思う。卵子ドナーを依頼した方が、両者にとって都合がいい。

愛着(Bonding)の問題はある。ゲイカップルの依頼者としては、(生物学的)母親と子どもを無理やりに引き離すようなことはしたくないという気持ちがある(※卵子ドナーを使えば、そうした懸念が緩衝されるという意味)。

#### **Q. ゲイカップルとレズビアンカップルの双方が協力して子を持つケースはありますか？ そのメリットとデメリットは何でしょうか？**

共同親権は、以前はかなり行われていたが、今は代理出産があるので、少なくなってきた。代理出産と共同親権の両方で子を持っているカップルもいる。共同親権は親の数が多いので難しい問題があるし、それに代理出産のようにきちんとスクリーニングがなされていない。また、法律家に関与することもあるが、どちらか一方の立場についてしまう。だからむしろソーシャルワーカーとか家族関係のセラピストに、もしこうなったらどうするかなどブレインストーミングをしてもらったほうが良いと思う。レズビアンカップルの多くはIVFクリニックを使うのを好んでいる。

#### **Q. ゲイカップルが国内で代理出産にアクセスする時に何か障壁となるものはありますか？**

特にないと思う。異性カップルでも代理母を見つけるのは難しい。ただ、代理母から見るとゲイカップルは好まれやすいということはあると思う。異性カップルと代理母の関係はどうしても緊張しがちだから。異性カップルの中には不妊治療を長年受け続けて失敗している人も多いので、心理的な負荷が代理母に対して非常にかかってくる。

ゲイカップルの場合は代理出産が初めての取り組みなので、もっとハッピーな気持ちでスタートできる。

ゲイカップルは代理母に人気だといわれている。とくにエージェン特では、良い代理母を選ぶことが重要だし、良い代理母がいるエージェン特は顧客からの良い評価につながる。それはエージェン特的の宣伝にとって非常に重要なポイントになる。

問題は、多くのゲイカップルが子どもを抱くことが大の関心事で、そのことばかり考えて代理母の幸せにはあまり無関心がない人もいる。そういうこともこのグループでは共有して対応している。

#### **Q. オーストラリア国内で代理出産にアクセスするのが難しいですが、海外での代理出産を利用する場合、ゲイカップル固有の障壁や難しさはありますか？**

以前はインド、タイ、カンボジア、ネパールなどがゲイカップルに代理出産を提供していたが、犯罪的な行為によって、今は禁止になった。ジョージア、ウクライナ、ギリシアはゲイカップルを受け入れていない。これらの国でゲイカップルに代理出産を提供しているエージェン特もあるみたいだが、違法だし、オーストラリアに帰国する際に問題になると思う。今残っているのはアメリカ、カナダ、そしてメキシコでもおそらくやっている。

現在、アメリカが一番信頼できるシステムだと思う。カナダでは利他的だということになっているが、代理母に28,000ドルまでの補償が認められていて、アメリカより費用はかからないものの代理母を見つけられる機会はアメリカより限定されている。

#### **Q. 海外で代理出産を依頼した場合の卵子ドナーは匿名がほとんどだと思います**

## が、子どもの出自を知る権利についてグループではどのように考えていますか？

ビクトリア州では出自を知る権利が法律で認められていて VARTA が管理している。しかし海外では匿名の卵子ドナーが使われるケースが多い。そのことに関して、グループではメンバーに対して慎重に考えるように促している。アメリカの卵子ドナーは若くて報酬(〜12,000 ドル)が目的の人がやはり多い。以前、グループでは、過去に匿名ドナーを依頼したメンバーの要請を受けて子どものために情報を提供してくれるかどうか、卵子ドナーに尋ねてもらえないかとエージェントを通して依頼したこともある。そういうこともあるので、やはり事前に十分に検討すべきだ。

## Q. 子どもたちは代理出産や卵子提供で生まれたことをどのように受け止めていますか？

やはり一番大事なことは初めから話すことだと思う(ゲイカップルの場合はそれしか選択肢がないのだが)。これまでわかってきたことから、ドナーの情報にアクセスできることが保障されており、その上で、子どもに真実を話すことによって、子どもは自分自身のことをよりよく知ることができる。そうやって子どもが自分自身の物語をしっかりとつくることで、卵子ドナーに会う必要性がなくなる。そしていつだれにこの話をするか、自分で決めることができるようになる。嘘をついて後からそれがわかると、子どもが混乱し、卵子ドナーに会いたいなどと言いつつ出すようになるのではないと思う。

自分の子どもたちにはどうやって生まれてきたのかきちんと説明しているので、子どもたちはそれほど気にしていない。子どもたちのアイデンティティは家族とか愛がある環境の中で作られる。自分とパートナーは子どもたち

のために代理母の写真も入れて、ストーリーブックを作った。

## Q. ゲイカップルと子どもたちは、卵子ドナーや代理母たちとはどんな関係性を持ちますか？

卵子ドナーより代理母との方が近い関係をもつことが多い。アメリカやカナダで代理出産を依頼した場合、代理母とは妊娠中からしょっちゅうコンタクトをとって、出産の時も立ち会うことも少なくない。だいたいはそのあとも関係は続く。タイで依頼した場合、代理母はコンタクトを望まないし、英語を話せないのでコミュニケーションが難しい。

自分の見解では生物学的関係は重要なことではない。ただ代理母は子どもの出生に関わる物語の中で重要な人物だと思う。アメリカでは、代理母とそのあとも関係を持ちたいか持ちたくないかでエージェントがマッチングをしてくれる。

卵子ドナーに関しては、80%のゲイカップルはコンタクトをしていないと思う。あとの2割は少しだけコンタクトがある。ただ代理母ほど親密ではない。その理由は、卵子ドナーは若いので、(比較的高齢な依頼親と)話が合わないというのもあると思う。

## Q. 海外代理出産の場合に子どもとの法的親子関係はどのように成立しますか？

国内で代理出産をやる場合は、親権は裁判を経て付与される。異性カップルでも同性カップルでも変わらない。海外代理出産の場合、オーストラリアに子どもにとっての法的親はいない。オーストラリアの法律では、精子を提供した人物はただのドナーで、法的権利はない。あくまでも現地の代理母とその夫が法的親(彼らが親権を放棄していたとしても)とみなされる。たとえ現地で発行された出生証明書に依頼親の



名前が書かれていたとしても、それは法的親を決定づけるものではない。そこは異性カップルとは異なる。裁判を得て正式な親権を得ようとするゲイカップルもいる。できないことではないが、お金も時間もかかるので簡単ではない。

このような状況は、子どもにとって理想的とは言い難いのは確かだ。しかし現在のところ、代理出産で親になるゲイカップルは社会経済階層が高く、子どもたちの教育に対する関心も高い。彼らは、子どもたちには家族は(法律ではなく)愛で結ばれていると教えている。そういう考え方をこのグループでは大切にしている。

法的親子関係がないので、子どもたちに資産を相続させるためには手立てを講じなければならない。これは両親と祖父母にとって重要なことだ。また、医療的なケアを指示する場面で、子どもは両親に対する法的権利を持たないことになる。ただ、実際に親子関係を証明する必要性は、日常生活の中では低い(例えばチャイルドケアのサービスを申し込むときなど、そこまで証明する必要はない)。子どもの市民権の申請やパスポートの更新時は少し複雑になる。それ以外の日常生活は割とスムーズな方だと思う。

#### **Q. ゲイカップルの家庭内での家事・育児の分担はどうなっていますか？**

それについての研究もあって、それによると、異性カップルと同じようにどちらかが家にいるというパターンが多いようだ。これは働き方やどちらが収入が多いかなどの要因で決められる。どちらも家において子どもの世話をしたいが、代理出産はお金がかかるのでどちらか収入が多い方が働き続けなければならない。夜勤をする人もいるので、その場合は子育てを交代にすることもできる。ゲイカップルでは授乳ということがないので、子育てを平等

に分担できる。どちらか一方が消耗するというような関係ではない。この点で、ゲイカップルは、女性から羨ましがられることもあるくらいだ。

#### **Q. Gay Day Australia では政治に対する働きかけをしていますか？**

Rainbow Families ではロビー活動をやっているが、このグループではやっていない。当事者に対するサポートや啓発を提供するのがグループの目的だから。

#### **Q. グループとしてこれから代理出産を希望するメンバーに対してどんな啓発をしていますか？**

四つの側面でメンバーにサポートをしている。

一つは心理面。母親がいないことになるが大丈夫か？ あなたたちが親になるが大丈夫か？ 両親には話したか？ カミングアウトを済ませているか？ (※半分以上が白人+アジア人のカップルだから家族はとても重要で、家族にすらゲイだとカミングアウトできていない。)

二つは経済面。国内でやるのか海外でやるのか？ 後まで経済的に大丈夫か？

三つはプロセスについて。エージェント探しから子どもの誕生まで。そのプロセスはとにかく emotional

rollercoaster だ。たくさんを決めなければならないし、やることはたくさんある。

四つは子どもが生まれてからのことについて。出国のための準備。病院、保険、飛行機にどうやって乗せるか、親権、出国審査などなどについて準備が必要だ。

#### **Q. ご自分の経験をシェアしてください。**

パートナーは台湾人で、13歳の息子はアメリカでの代理出産で生まれた。さらに、自分の知り合いのカップル(一

人は台湾人)で精子提供が必要だったので、パートナーが精子を提供して二人の子供が生まれた。共同親権を持っていて週末に会うような関係を9年間も続けている。また2015年頃だったと思うが、精子提供をして欲しいと自分が頼まれた。それで Monash IVF で施術してもらって子どもができた。さらにそのパートナーも妊娠したいとあって、6ヶ月前に子どもが生まれたばかり。

自分はこのように家族が広がっていくという考えがとても好きだ。これ以外にも精子提供で5人の子供が生まれている。自分のパートナーはアジア系だが、アジア系ドナーへの需要があるから。だから自分のパートナーは3組の異性カップルに提供して5人の子供がいる。

自分たちカップルは Monash IVF で提供したとき、ドナーがモノとして扱われているような違和感を覚えた。女性にフォーカスしていて、精子ドナーはクライアントではなくただの suppliers だと考えられている。だから精子ドナーはもっと敬意をもって扱われなければならぬと思っている。

自分たちは旅行をするときにも、同性カップルの結婚に寛容か、代理出産に寛容かを気にして移動する(乗り換えも含めて)。USA なら場所による。サンフランシスコやニューヨークは良い。でもロスには避ける。中東、アフリカ、東ヨーロッパ、フランスやドイツは避ける。どうしても必要な時はとても注意している。台湾と日本は今まで問題はなかった。

(2019年12月)

Gay Dad Australia

Gay Dads  Australia



## Support group in Belgium.

### ベルギーのサポートグループ

#### Interviewee

#### Donor Families (David)

#### Q. このサイトとグループの活動について簡単に教えてください。

Donor Families は DC による子どもを持つ親のためのグループで、2013 年に設立された。ベルギーには、対面のサポートグループはそれまで存在していなかった。匿名のオンラインコミュニティはあったが、実際に連絡を取り合うことは容易ではなかった。Dr. Astrid Indekeu の研究に参加したことが、このグループ結成のきっかけになった (英国の Donor Conception Network は、不妊治療の専門家の支援を受けた親によって開始された。Donor Families の設立の経緯とは違っている)。当初のメンバーは 4 名から出発した。

Donor families は、ボランティアで運営している。すでに親になった人だけでなく、これから家族を作ることを検討している人たちのサポートをしている。

COVID-19 以前には、“family day” と称して、メンバー同士の交流会を開いていた。この交流の目的は、通常の方法では家族を作ることが不可能な人たちの困難な状況を和らげるのに役立っていると思う。参加者からはポジティブな反応をもらっている。

また、年間を通して、専門家を招いて、当事者が有益な情報を得ることができるようなイベントを開催している。すでに親になった人たちとこれから親になろうとする人たちの交流会として、リビングで話すようにリラックスした環境で質問してアドバイスをもらったり、色々な情報を交換したりで

きるような機会も設けている。グループ内でのメールでのやり取りも可能だ。

#### Q. 精子提供だけでなく、卵子提供や代理出産の親も対象にしていますか？

精子提供だけでなく、卵子提供や受精卵提供の場合でもグループのメンバーになれる。ただし代理出産に関してはベルギーでは法的には不透明な状況だ。今まで代理出産の親からコンタクトはなく、メンバーもいない。

これまでのメンバーは異性カップルとシングルマザーだけだが、ゲイやレズビアンのカップルも大歓迎だ。まだ一組も参加していないが。

#### Q. 子どもへの告知についてはどのような考えですか？

ベルギーでは、ほとんどの配偶子提供が匿名で行われている。例外は、親族や知人に提供を依頼できる場合だ。そういうケースでは、ドナーは非匿名になる。ベルギーの匿名ドナーはとても厳格で、ドナーもレシピエントもお互いの情報を全く知ることができない。

自分と妻が約 15 年前に提供を受けたとき、DC はコミュニティでほとんど知られておらず、メディアで取りあげられることもなかった。クリニックでは、何ができるかについての幅広い選択肢を提供してくれなかった。ただ、匿名の精子ドナーの使用が、自分たちの問題の解決策となるとだけ言われた。当時は選択の余地はなく、自分も何が適切かわかっていなかった。当時は匿名性について、悪くはない選択だと感じていた。当時、精子提供に関する情報はほとんどなく、匿名は法律で決められたことだった(それ以外の選択肢はなかった)。デンマークの精子バンクと交流があるクリニックが Flemish にもあり、情報をオープンにしている

ドナーもいるということを知ったのは、もっと後のことだった。

Donor Families では、匿名性についてあまり詳しくサイトに載せていない。それは、依頼者がより柔軟に選択できるようにとの配慮から。ベルギーでは、配偶子提供について、5、6年前に法律の改正について審議がなされたが、結局は何も変わらなかった。

最近ベルギーでは政府がデータバンクを始め、養子やドナー提供による子供たちが DNA を提出して実の親を見つける可能性がでてきた。これは 10 年ほど前からオランダで存在しているモデルと同じものだ。

**Q. ベルギーでは、匿名ドナーについて、親はどの範囲の情報をもらえますか？**

依頼親に対して、匿名ドナーのいかなる情報も提供されることはない。クリニックによっては、特定の身体的特徴とマッチさせることもあるが、どのような身体的特徴を用いたかを知らせることも法律違反となる。

**Q. ベルギーでは、匿名ドナーか非匿名ドナーかを選ぶことができますが、どのようなことを考慮して親は決めますか？**

ドナーを見つけることが難しく、匿名か非匿名か、現実的に選ぶことは難しい。卵子提供の場合はドナーの身元を知ることが可能な場合もある。知人をドナーとすること結構あるから。詳しくはわからないが、Cross-donation と呼ばれる方法が使われることもある。それ以外にも、海外から精子や卵子を輸入するやり方が使われている場合もあると聞いたが、法的にはグレーだ。

**Q. 匿名、非匿名かを親が決めなければならないことについて、プレッシャーはないでしょうか？**

現時点では、匿名ドナーがほとんど唯一の方法だが、依頼親に対して提供される情報は、今はかなり良くなった。

提供は匿名だが、クリニックはドナーと子供をリンクする情報を持っている。ドナーに用紙を渡し、そこに自分の情報を記入して、ドナーファイルにつけるオプションを提供しているクリニックもあるくらいだ。

これにより、将来的に法律が変更された場合、子供がより多くの情報にアクセスできる可能性がある。しかし、これが可能かどうか、そしていつ起こるかは誰にもわからない

**Q. DC における子供の最善の利益とは何でしょうか？**

自分は、匿名性は完全に廃止されるべきだと考えている。子供にとって、自分が誰かを知るため、他の子どもたちと自分は何が違うかを親に聞くのは当然だと思う。

自分と妻は、家族がどのように作られたかについて、子供たちには完全にオープンにしてきた。子供たちはたくさん質問してくる。何かを隠しているのは不自然だ。そうは言っても、自然に妊娠できないカップルが、匿名性について事前に深く考えることはあまりない。親にとって、まだほんの赤ん坊のステージを過ぎて、子供が自分のアイデンティティに疑問を持ち始めるようになるのを前もって想像するのは難しいから。

**Q. ベルギーの親の告知に対する態度は？**

状況はどんどん変化している。Dr. Astrid Indekeu はこのトピックについて本を執筆し、将来の親には、家族がどのように形成されたか、子どもにオープンにするようアドバイスしている。Donor Families でも販売しているし、人

気がある。依頼親にこれを読むように推薦しているクリニックもある。

ベルギーの依頼親がどのように考えているかはわからない。Donor familiesは、すでにオープンな考えを持つ勇氣ある親たちを惹きつけるかもしれないが、オープンにすることに対して疑問を持つ人たちは、おそらく連絡してこないだろう。Donor Familiesは、PRのためにいくつかのクリニックを訪問した(何人かのカウンセラーはすでに私たちのグループを紹介してくれていた)。医師は我々のサービスにあまり寛容ではないようだ。多くの場合、匿名性に関するグループの立場について尋ねてくるが、それによって医師らは、このグループの目的に賛同しないことを暗にほのめかしている。医師とのコミュニケーションは難しいが、徐々に変化しているのを感じる。一部の医師は、患者に秘密を推奨していた過去の過ちを認めてすらいる。

**Q. 最近、告知を勧める考え方が非常に強くなっています。告知しない親は、サポートを受けるのが難しいという問題はありますか？**

Donor familiesは、オープンな考えを持ち、告知することをためらわない家族だけにフォーカスする嫌いがある。告知しないことを選択した人々も歓迎するが、グループからのアドバイスが子供に伝えることであるため、彼らから嫌煙されるだろう。

**Q. もし、小さい時から告知していれば、子供がドナーや代理母にそれほど強い愛着を抱くことはないと思いますか？**

自分の考えでは、早めに告知したとしても、ドナーに対する興味に変化することはないと思う。子供が大きくなってから伝えられると、育ての親との関係に与える影響ははるかに大きくな

る傾向があり、信頼関係が崩れることはあるだろう。

ベルギーには、ネガティブな方法(両親が離婚したなど)で自分がドナーから生まれた子供だと知った人たちによってつくられたグループがある。これらの人々はその事実で苦悩し、怒りを感じる傾向がある。そして、それらの人々の中には、第三者生殖を利用することに反対する人がいるのも知っている。こういう考え方が出てくるのは、匿名だったことに関係していると思う。

自分は子供たちに対しては非常にオープンに接していて、全て話している。すべての質問に答えられないかもしれないが、子どもたちの疑問にきちんと向き合い、避けるようなことはしない。

**Q. 遺伝的繋がりについて、どう思いますか？ 実際に子育てをしていて、どのように感じますか？**

これは、生まれか、育ちかというとても難しい問題に関わっていると思う。家族や友人とは遺伝の問題について議論しない。他の親が「そこは私に似ている」などと子供について言っているのを聞くと、少しだけ心に刺さるものがある。遺伝は重要であると思うが、絶えずそのことが頭にあるというわけではない。

**Q. ドナーやドナーの家族、同じドナーからのきょうだい、代理母との交流については、どう思いますか？**

こういう状況を想像するのが難しい。なぜなら現在のベルギーの法律では完全な匿名性が義務付けられているから。もし子供たちがドナーを探したいといえば子供たちをサポートするつもり。しかし、そうするなら、そのプロセスはきちんと専門家からサポートしてもらいたい。ベルギーの厳しい匿

名性のせいで、ドナーの側の気持ち、交流可能性は、ドナーをオープンにしている国とは異なる可能性が高い。

それでも、オンラインでの DNA 検査サービスがあるため、今日では匿名性ほとんど不可能なことだ。多くの人が自分の DNA を提出すれば、どこかの時点で匿名性が完全に失われるだろう。自分はその時のために心の準備をしておくべきだと考えている。

**Q. ドナーはどのような存在ですか？ 会ってみたいと思いますか？**

匿名だったので、自分にとってドナーは実在しているようには感じられない。

**Q. オーストラリアのビクトリア州やイギリスのように、匿名性を廃止して、政府がドナー情報を管理するシステムについてどう思いますか？**

それがいい。最も嘘のない方法だと思う。オランダでも同様のシステムが導入されている。しかし、ベルギーでは、クリニックと医師はこれに強く反対している。

**Q. 遺伝子検査を受ける人が増えています。どのように捉えていますか？**

子供が望むのなら、このようなサービスを利用することをサポートする。しかし、どちらかといえば公的機関の DNA データバンクを使用してもらいたい。オランダにベルギーの人でも利用できるサービスがある。双方の当事者に配慮でき、うまく対応してくれる公的機関によるサポートを受けるのがいいと思う。

**Q. どのような法律やルール作り、当事者への支援が必要でしょうか？**

イギリスとオランダで実施されているようなものが良いと思う。例えば、匿名性の完全な廃止など。親がより多くの情報にアクセスできるようにするため、オープンにできるファイルをつくるのも選択肢の一つかもしれない。最も重要なことは、子供が開示を希望すれば、子供にきちんとしたガイダンスを提供し、その後でドナー情報を提供することだ。プロフィールが親に対して完全にオープンにされるか、一部だけオープンにされるべきか、どちらがいいか自分には判断できない。

**Q. ヨーロッパ内で移動して生殖補助医療を受けることは一般的ですか？ 統一したルール作りは必要ですか？**

国境を越えるのが一般的かどうかわからない。しかし、Donor Families は過去にスペインの組織から連絡を受けたことがある。また、英国とロシアのサンクトペテルブルクに行った人を知っている。Donor Families は、ビジネスが強いサービスを利用することには賛成ではない。

ベルギーでは、精子ドナーも卵子ドナーも補償金を受け取っている。その額は卵子ドナーの方が多い。しかし、それでも提供は無償のものだと考えられている。体外受精を行う施設は大きな病院の中にあるのが普通なので、ビジネス色はあまりないと思う。他の国ではもっとビジネス的に行われているケースもある。

子供を持つことが「権利」であるかどうかについてはこれまで議論されてきた。親ではなく子供たち自身に焦点を当てるべきだと考えている。我々の社会は、子供を持つために非常に多くの手段を与えていると思う。それらの手段をどこまで許容するかについては議論があるだろう。

(2021年5月)

### **Donor Families**

2013年に発足した、ベルギーではまだ珍しい自助グループの一つ。子どもを持つ親たちに交流の機会を設け、これから親になろうとする人たちにアドバイスをしている。ドナーやドナーきょうだいを見つけるサポートもしている。

### **David**

匿名の精子提供で3人の子ども(息子が1人、娘が2人)を持った父親。Dr. Astrid Indekeu と出会い、Donor Families を設立、中心メンバーとして活動している。親たちからの相談・質問に自身の経験を踏まえて回答している。

**Donor Conception Canada (DCC).**

**～カナダの親のためのグループ～**

**Interviewee**

**Mr. Vince Londini**

**Chair and Co-Founder of DCC**

**Q. 精子提供で父親になった経緯についてお聞かせください。**

カナダのオンタリオ州西部のロンドン市というところに住んでいる。(オンタリオ市から車で2時間離れた郊外)。米国で生まれ育ったが、2000年6月にカナダに移住した。

1994年に妻のLoriと結婚した。子供が欲しかったが、なかなかできなかったので自分から検査を受けた。その結果、自分が不妊だとわかった。それはものすごく大きなショックだった。無精子症だったので、妊娠の可能性はゼロだった。最初の3年間は、何も治療をしないまま過ごした。

カナダに移住し、健康保険を使って不妊クリニックで治療を受けることができるようになった。養子について調べはじめ、Beginnings Family Servicesの研修会にも出席した。最終的に、妻が自分で子供を産みたいと言ったので、精子提供に決めた。精子提供を利用することで、妻とともに家族を作ることができた。

1990年代半ばから不妊治療クリニックでカウンセリングをやっていた

Dr. Jean Hayes から夫婦でカウンセリングを受けた。彼女は、患者が選択した生殖補助医療について、それがどのようなことを意味するのか、子供にどのように伝えるかをカウンセリングしていた。

彼女のアプローチは当時の医師たちのメジャーな態度とは異なっていた。医

師たちは完全な匿名を好んでいたから。Jean からカウンセリングを受けられたことを良かったと思っている。それは自分の精子提供に対する態度を方向づけるものだった。

妻との間に3人の娘が産まれた。2005年に最初の娘が、2006年に2人目の娘が、そして2008年に流産があり、2010年に3人目の娘が産まれた。当時、カウンセラーのJeanが患者のためのサポートグループを開催していた。自分と妻はそれに参加していた。

当時のことで思い出すのは次の2つのことだ。自分と妻が出ていた養子縁組の研修会には20組ものカップルが出席していたこと。そして、Jeanが主催していたサポートグループのミーティングで、同じように不妊の問題を抱えた人たちと経験を共有できたこと。

2010年にJeanが退職し、そのグループのコーディネートを引き継いで欲しいと言われた。

**Q. このグループの概要について教えてください。**

Donor Conception Canada (DCC)はもともと、Southwestern Ontario Donor Conception Network という名前だった。英国のDonor Conception Networkに着想を得ている。それから、オーストラリアのビクトリア州にある色々なグループからも。

1997年から2010年までJeanがサポートグループを主催していたときは、彼女のスケジュールが空いた時間に非公式に行なっていた。当時の標準型は対面でのグループミーティングだった。メンバーリストを作ってメンバー登録し、図書館の一角をレンタルして、20-80人もの人たちが出席した。円になって全員が順番に話した。

現在、パンデミックで対面でのミーティングは中断されている。2020年からは、ビデオ会議システムやZOOMを使ってミーティングを行った。現在、

当事者による二種類の自助グループ方式のミーティングを行っている。一つは、バーチャル・グループで、その時間帯に時間がある人はそのテレカンファレンスに参加できる。だから、コスタリカ、米国モンタナ州、米国バージニア州、カナダ全土(ブリテッシュコロンビア州、アルバータ州、オンタリオ州、ケベック州)から参加している。

もう一つは対面のグループミーティングで、パンデミック前には、ロンドン市とトロントで定期的に対面のミーティングを開催していた。パンデミックが落ち着いたら 2022 年には再開したいと思っている。バンクーバーでも新たにミーティングを立ち上げたいと思っている。

オンラインミーティングは、もっとフォーカスを絞った会話をする機会になった。例えば、DC で子を持ったシングル親のための ZOOM ミーティングを開催した。他には DC でまだ小さな子供を持つ親のための ZOOM ミーティング、また、これから donor-conception を利用したいので調べている段階の人たちのための ZOOM ミーティング、などなど。パンデミック以降、こうした的を絞ったミーティングは 60 ほどにもなった。

現在、DCC のメーリングリストには 400 人以上の登録があり、そこでミーティングについて告知している。フェイスブックには 380 人のフォローがあり、ほとんどがオンタリオ州の在住者だ。現在、公式のメンバーシップ制度はなく、会費も取っていない。ミーティングの時に寄付を募っているほか、業界の関係者から少額の寄付をもらっている。しかし、自分としては、業界の関係する企業やクリニックの影響からは距離をおいて独立したいと思っている。DCC では、出版物を出していないが、色々なサポートやメリットを会員に対して提供している。

DCC は、ビデオ会議でのミーティングが始まる少し前に、連邦の NGO に組

み入れられた。それにより、少額の予算がついているが、フルタイムの職員はいない。だからグループはまだボランティアの力に頼っている。NGO となったとき、名前を変えて、公式に DCC という名称になった。それによって、グループの活動は自分がいなくなっても継続できるようになった。(この頃、自分は健康状態が非常に悪かった。今は回復したが。)

DCC がどこかのエージェントと直接連携しているということはない。DCC では、エージェントに対して、権利擁護活動を行なっている。その結果、エージェントの活動には変化が生じてきている。例えば、Seattle Sperm Bank では、完全に匿名のドナーは扱わなくなった。

DCC のウェブサイトには、たくさんリソースが載せられている。例えば、男性不妊について自分の経験を語ったものがメディアに掲載されたことがあり、その時の資料をみることができる。

#### Q. 政府や政治に対する働きかけは行っていますか？

カウンセラーの Jean が、Canadian Fertility and Andrology Society のメンバーに掛け合っていた。これらの団体が政府に対して助言を行っていたから。今は、彼女はリタイアしたので、自分が代わりに学会に出席している。学会では、業界のすべての人たちが一同に会する機会なので、業界について知り、彼らに自分たちの活動を知ってもらい、影響を与えるための重要な機会になっている。

DCC では、フィードバックを求められることがあり、Canadian Institutes of Health Research にも参加している。例えば、同団体では配偶子提供の利用についての規制を公表したが、それは DCC のフィードバックに基づいている。

**Q. メンバーの構成について教えてください。**

オンラインミーティングの現在では、人数を正確に算出するのは難しいが、パンデミック前の対面ミーティングに基づいて算出すると次のようになる。

精子提供が 70%で、卵子提供が 30%(グループのルーツは精子提供)。男女カップルの精子提供の場合、両親は子供に事実を告げるのか、告げないのか、という問題が典型的にある。両親は、そのことについて話し合い、理解したいと思っている。彼らが DC にたどり着いたのは不妊が原因。だから、彼らの疑問はこうだ。それはうまくいくのか? 子供をちゃんと愛せるか? と。最近では、卵子提供についての参加者が増えてきている。

50-60%がヘテロカップル。後の 40-50% がシングルの母親(または一時的なシングル男性)。2020 年 3 月の段階で 80 人の参加者がいた。そのあと、ヘテロカップルとシングルの母親が半々に分かれた。

約 5%は、LGBTQ の参加者だ。(レズビアンカップルまたはシングル)。DCC では、クイアの親のためのグループミーティングを提供している。しかし、実際のところ、ゲイやレズビアンのコミュニティでは、この分野のサポートを自分たちでカバーしている。

現在、8 割の参加者が白人、残りの 2 割がアジアや東南アジア、またはアフリカ系の人種グループだ。

DCC を含めて、子供に告知しない人は、サポートグループには参加しない傾向がある。現在のところ、カウンセリングは必須ではない。クリニックでは多分 1 回くらいはセッションを提供しているが、それは顧客が安定的な生活を送っているか、支払い能力があるかどうかを評価しているだけ。本来はインプリケーションカウンセリングが制度化されることが理想だが。

**Q. 組織の運営で、難しい点がありますか?**

DCC は、もっとマイノリティの集団に関与する必要があると考えている。グループの多様性を広げたいが、難しい点や限界は、DCC のリーダーである自分がヘテロの白人男性だということ。6 人に 1 人のカナダ人が不妊だから、DCC のコミュニティ以外でも、多くの DC が行われていると思う。オンタリオ州だけでも 10 万人もの人が donor conception から生まれているはずだ。それらの家族のうち、エスニックコミュニティの家族の場合、そのことはタブーなので他の人に言うことはない。

**Q. 他国の団体との交流や情報交換の機会はありますか?**

英国の DC Network のリーダーと話をしたことがある。そして、どうしたら組織をよりよく運営していけるかのアドバイスを受けた。その段階では、DC Network ではメンバーシップ制度を採用していなかったが、将来取り入れるだろうとのことだった。

**Q. カナダで、生殖補助医療はどのように行われ、規制されてきたか、教えてください。法改正の動きはありますか?**

カナダは、他の旧大英帝国領に続いて 1950 年代から精子提供を行なっている。それ以来、同じ哲学とアプローチによって行われ、徐々に実施数が増えてきた。1990 年代初め、新しい生殖技術に関する Royal Commission(the Baird Commission)がひらかれ、1994 年に報告書が公表された。その報告書では、政府の規制が必要だということが勧告された。それは、論争的な政治問題で、政府は報告書の勧告を採用しなかった。政府が法律(Assisted Human Reproduction Act)を制定したのは、2004 年になってからだった。



カナダでは、連邦政府と州政府の間に対立がある。ヘルスケアについては、各州の主権が維持されている。だからこの分裂を克服するため、特定の行為(研究室における非倫理的な行為)を違法化するために刑法が制定された。それによって配偶子を売買したりするような、代理出産を含めた生殖サービスに支払いをすることが禁止された。この法律は全州において効力がある。ケベック州では、この規制に関して論争があり、最高裁でも争われた。その結果、刑事罰はやりすぎであり、刑法はそのような構造を支えるべきではなく、規制枠組みは強制されるべきできないということだった。このため、犯罪の要素は残っているものの、具体的な規制枠組みはない。そして各州政府は、それ以降、業界を規制するには至っていない。自分はこの件で大臣にも接触を試みたが、アポイントは取れなかった。

Health Canada は 2019 年まで、行為規制の必要性には言及しなかった。このことは、臨床家らは、ほぼ、自分たちの好きにできるということで、彼らの行き過ぎを制約できるのは世論だけの状態だったということ。Baird Commission 以来、25 年が経つが、その時の勧告はまだ全部達成されていない。

Health Canada が海外から持ち込まれる精子や卵子について感染症コントロールについての規制を発表したのは最近のことだ。自分はその規制を読み、的を射ていないと思った。カナダで使われている配偶子の大部分が米国からの輸入に頼っている。規制では配偶子への支払いは禁止されているが、米国から配偶子を購入することを阻止できていない。

例えば、自分と妻は、米国アトランタにある Xytex という精子バンクから精子提供を受けた。それらの提供が、カナダの規制に合致しているかを証明

するのはカナダのクリニックの責任になる。

現在の規制は、テリングやカウンセリングや出生証明書の問題などの倫理的問題については何も言及していない。

カナダのコンテキストに沿ったもので自分がオススメできるのが次の本だ。

- Assisted Reproduction Policy in Canada (Dave Snow)
- The Right to Know One's Origins (Juliet Guichon ed.)

### Q.ドナーの匿名性について、今後、カナダでも廃止の可能性はありますか？

配偶子バンクの中には匿名性を廃止するという考えを支持してきたところもある。クリニックは、それに同情的だが、完全な匿名性を約束しているところもまだある。これは、非現実的なマインドセットで、子供を得るのにもっとも近道なアプローチが欲しいと言う考え方から来ている。それは、十分に考えていないし、包括的でもない。これまで、政党がこの問題に取り組まない理由があり、法的変化は起こりそうにない。

カナダには法律を改正する動機がない。規制に関してトップダウン型は機能しないので、草の根の運動はある。関係する人々の間で透明性、オープンさ、共感を作り出すことが必要。特に、まだ生まれていない子供の視点が重要で、子供に自由を与えること、そして将来は自分のアイデンティティを探求することができる能力を保証すること。社会的には、不妊に対する忌避感はまだある。

カナダのトロントで活動している Barry Stevens という映画製作者の作品がおすすめだ。

彼は、1990 年代から映画を公表している。それは、自分のためにドナーを見つけようとする彼自身の物語だ。そ

の過程で彼は 80 人ほどの半きょうだいを発見する。そしてそのうちの一部の人々との会話を 45 分のドキュメンタリーに納めた。Barry は、Donor Conceived Alliance of Canada (DCAC) のメンバーだ。DCAC は、ドナーから生まれた人たち(彼らは親からテリングされておらず、後になってそのことを知り、裏切られたと感じている)の権利擁護をしているグループ。

2018 年に、現在の政府によって、生殖サービスや配偶子に対する支払いを禁止する法の改正が前進しそうになったことがあった。DCAC は、この変化に反対する証言をした。その結果、法改正は失速し、前に進まなかった。

#### Q. 海外での治療を選択するカナダ人は多いでしょうか。

東ヨーロッパ圏に行く人たちがいる。そこは費用が安くつくことが魅力になっている。

しかし、ほとんどの人が米国に向かう。国境を超えた不妊ツーリズムはそのうちまた変化するだろう。しかし、カナダで使用される精子のほとんどが米国から輸入されている。輸入にまつわる色々な制約を減らすために自分自身が米国に移動する人たちも多い。

“stranger-known”(※全く知らない人から対面で精子を受け取る行為)のような形での精子提供が出現している。例えば、DCC は、ドナーとしてサービスを提供したいという男性からのアプローチを複数、受けた。インフォーマルなアレンジメントが増えてきているようだ。例えば、Tim Hortons のようなコーヒーショップで会って、精子を手渡しするなど。将来の子供のアイデンティティに関して、この方法にはたくさん問題がある。そして、メディアではネガティブに報道されている。そして、法的な意味での親子関係が曖昧になる。(ドナーは法律上、子供の親なの

か? もしそうだとするなら養育費を支払わなければならないのか? など)

#### Q. テリングしない親の場合は DCC のメンバーになるのが難しいでしょうか?

DCC は、事実を明らかにすることを支持している。だから匿名性に賛成しない。

グループではどのようなすればポジティブに受け取ってもらえるか、テリングについて、多くの経験がある。テリングしない親は DCC のミーティングには参加しない。

#### Q. お子さんが 3 人とのことですが、ドナーに対する興味関心に違いは見られますか?

自分の経験では、娘が 3 人いるが、どの子もドナーには興味がないようだ。それは多分、ドナーのことを隠し立てしたり、秘密のように扱ったりしていないからだと思う。知りたければドナーファイルが家に置いてあるからいつでも見られる。そこには、謎も秘密もない。不快な気持ちもない。

2、3 年ほど前に、娘たちに 23andMe に登録したいかと聞いたことがある。カナダでも遺伝子検査が流行っている。娘たちは同意して全員がテストを受けた。というのは自分自身も、もしかしたらクリニックで誤りがあったら違う精子が使われていたりしないか、確認したい気持ちがあった。結果はすべての娘が同じドナー由来だったのでホッとした。

2018 年に娘たちは Donor Sibling Registry に登録した。しかしまだマッチングしていない。他方で、登録していた遺伝子検査のネットワークから、半兄弟からの礼儀正しいコンタクトがあった。昨年夏、彼の母親と一緒にピクニックに行った。彼らはここから 2 時間離れたところに住んでいる。今の所、半兄弟という言葉を使っている。

しかし、他の言い方を検討してもいいかもしれない。この関係をどのように呼んでいいか、自分には確信がない。

### Q. DNA 検査に関する具体的なエピソードはありますか？

遺伝子検査は、カナダで流行っている。自分と家族は、最初、娘の半きょうだいを見つけられなかったと DNA 検査を利用した。もし見つければ、娘が望めば彼らと交流することもできると考えたから。しかし、今は、もし相手方がドナーから生まれたことを知らない場合、この検査は危険なのではないかと懸念するようになった。

“Half of Me”という podcast がある。それは米国の東海岸出身の Ally という女性が制作したもの。彼女は 20 代の後半にドナーから生まれたことを知った。怒り、悲しみ、好奇心が湧き、自分の経験について podcast を作った。彼女は 23andMe を使い、半姉妹からコンタクトされたことがきっかけでドナーから生まれたことを知った。このような状況は、自分はよくないと思う。

Louise McLoughlin という英国のレポーターがいて、彼女もまた最近 podcast をリリースした。彼女はドナーを探し続けてそれに成功し、ドナーにインタビューをした。

### Q. ドナーや代理母とどのような境界をつくれますか？

告知は、何度も繰り返すプロセスであって、一回きりの出来事できない。自分の経験では、DCC の一部には子供に 1 回だけ伝えたという人もいるが、子供はそのことを覚えていないだろうと思う。だから、子供がそのことを再び発見したとき、悲しみとショックを経験すると思う。

自分と妻が家族を作るために利用した方法は、子供達の権利と自由を尊重したものだと思っている。もちろんそ

れは、子供を持って育てるという自分の欲求を達成するものでもあったのだが。

DC で家族を作るということ、それはまさに意味をつくるということだ。DC に関するオンラインフォーラムの多くが、特定の言葉の定義の矛盾をめぐるものだ。しかし、それは、まさにそうしたやりとりを通して意味を作っているということだ。

それはドナーから生まれた子供にとって何を意味するのか？ 半きょうだいをどう呼んだらいいのか？ 友達？ 半兄弟？ 半姉妹？ 我々はそれらの関係から何を作るのか？

自分の場合は、それはあくまで他の家族であり、自分たち家族とは異なる。そして、彼らのことは最近まで知らなかった。それは、今まで経験されていなかった領域だ。

DC に関して、意味と関係性を作ることについて、自分が思いつく研究文献がいくつかある。

- Relative Strangers: Family Life, Genes and Donor Conception (Petra Nordqvist and Carol Smart)
- Relatedness in Assisted Reproduction: Families, Origins, and Identities (Tabitha Freeman, ed.)
- Random Families (Rosanna Hertz & Margaret K. Nelson)
- The New Kinship: Constructing Donor-Conceived Families (Naomi Cahn)

DC で作られた家族の生きられた経験について、たくさんの本があり、いくつかは古典的な部類に入る。他には、Eric Blyth, Ken Daniels, Caroline Lorbach, Diane Ehrensaft などの研究者が思い浮かぶ。

(2021 年 10 月)

### **Mr. Vince Londini**

Donor Conception Canada(DCC)の議長で共同設立者。カナダのオンタリオ州に在住。

自身の不妊発覚後、米国からカナダに移住し、精子提供により、3人の娘をもうける。子供たちにはテリングしている。

DCCの前身である The Southwestern Ontario Donor Conception Support Network を創立者の引退に伴い引継ぎ、当事者へのサポート活動を充実させている。

- Infertility upended his notions of what it means to be a man and husband CBC News, Jan 03, 2020

- Support groups help men deal with loneliness and stigma of infertility THE GLOBE AND MAIL, Apr 22, 2019

- We are family Inside, London Health Sciences Centre 2013

**Children should not be sacrifice to their parents.**

**子供は親の犠牲になるべきではない**

**Interviewee**

**Ms. Katy Faust**

### **Q. 自己紹介**

Them Before US という子供の権利のための組織の創業者兼ディレクターをしている。

子供は、母親と父親を知る権利があるというのが、組織が掲げているパースペクティブ。

Them Before US は、養子縁組、離婚、シングル親、同性婚、生殖医療の利用などはすべて、子供に影響を与えるという見方をしている。何が子供の最善の利益か、子供のための権利擁護活動をしている。

権利擁護活動を通して Them Before Us が到達した結論は、親は、子供のためには犠牲にならなければならないということで、その逆ではない。不妊、同性間でのセックス、夫婦間での諍い、パートナーを持たずに親になることへの欲望、これらは、大人にとって深刻な取り込みだが、子供の健康はこれらの欲望に優越するものだ。

Them Before Us は 2018 年に結成されたが、子供には両親が必要だという考えは 2012 年から表明している。Them Before Us のディレクターとしての仕事に加え、フルタイムで雇用されていて、もう一つ別の非営利団体でパートタイムの仕事をしている。さらに、フルタイムの母親でもあり、教会のコミュニティ活動にも熱心に関わっている。夫は牧師として働いている。

**Q. ご自身が育った家族について教えてください。どのようにして今のような考えに至りましたか？**

10 歳まで、結婚している両親の元で育った。その後、両親は離婚した。父親が他の女性とデートをしていて、その女性と再婚した。そして母親は、女性のパートナーを見つけて、その女性と一緒に住むようになった。自分は母親のパートナーと良い関係で、彼女を友人として認めていたが、母親ではなかった。彼女の、母親との関係は、互いにコミットしていても安定していた。母親（またはレズビアン両親の場合は父親）は必要ないと子供に積極的に告げるゲイの両親について聞き、同性カップルの子育てに反対するようになった。

同性愛者の結婚、または同性愛者の子育てに反対することは同性愛嫌悪であるという主張に反対する。これは自分には当てはまらない。

父親または母親がいないことは、大きな喪失感につながる。同性親に育てられた場合、子供は母親/父親に対する渴望を覚える。喪失した親に愛されることを熱望する。これは、宗教的信念や同性愛嫌悪によって左右されるようなものではない。それは人間の真実だから。私たちは全て、男性と女性から生まれる。そして、両親の愛を切望する。歴史的に全ての社会が、このようにしてきた。自分の理解では、それはラディカルな立場ではなく、自明なこと。

子供が母親/父親を失っても気にしないという考えは誤った物語であると思う。養子縁組の分野で長年働いてきたが、「もともとの家族」に興味がない子供にはいまだ会ったことがない。

現代社会では、大人と子供が、合意の上で決定をすることは許容されると思うが、その決定が子供の権利を侵害する場合、自分は反対する。

**Q. Them Before Us の活動について教えてください。これまでの活動と、その成果について。**

Them Before Us はまだ新しくて小さな組織だが、すでにかなり影響力がある。1年前に本を出版し、それを4カ国語に翻訳する契約を結んだばかり。ウェブサイトも2カ国で翻訳する予定もある。来週、組織を代表して会議に出席するためにブダペストとアルバニアに渡航する。

Them Before Us の目標は、心と法律を変えること。我々は、親の欲求を優先することが慣わしになっている文化に、子供の視点を提示したいと考えている。子供たちの人生にかかっている実際の負担を示すことができれば、危機に置かれているのは本当は誰なのかを人々は理解することができるだろう。

海外で導入されている法律を見ると、子どもの権利が擁護されていることは滅多にない。政策立案者には、交渉できない沈黙の当事者がいて(それは子供たちのこと)、最も失うことが多いのは子供たちであるということ理解してほしい。ウェブサイトではたくさんの個人的なストーリーを紹介している。それらは、大人の決定によって子供に生じる3つの損失に基づいてカテゴリー分けされている。

- 1)遺棄
- 2)第三者生殖
- 3)LGBTの親

Them Before Us では、ボランティアでコンテンツを翻訳してくれる人を探している。子供の視点からニュースを発信することで、心と法律を変えたいと思っている。

**Q. 活動はどのように賄われていますか？**

Them Before Us は、これまでに1箇所から助成金を受け取った。Alliance Defending Freedom によるもので、15,000米ドルの提供を受けた。現在

GuideStar に参加しており、小規模なドナーとつながっている。一回につき、100ドルから2,500ドルの寄付がある。約10万ドルの年間予算を管理している。スタッフは少人数。

これは草の根の運動であると言える。このトピックについて哲学者や研究者と連携しているが、本当の意味で運動を推進しているのは、公的な肩書きを持っていないような人たち。

自分に十分な時間が与えられたら、おそらくすべての大人が自分のメッセージに腹を立てるだろう。親に対する子供の権利を確保することは、部屋の中にいる大人たちにステップアップを義務づける。たとえば、計画外の妊娠をしている女性には、子供のために生活を変えるように迫る。子供が家庭の分裂の負担に対処する必要がないように、自らの結婚生活の問題に対処することを大人に迫る。

離婚は、子供時代における逆境の経験であり、その後の人生で否定的な経験と呼び寄せる。子供を非伝統的な家庭に適応させるのではなく、父親と母親、両方の生物学的親を知る権利を保証する形で家族を形成することを、同性愛者の大人に迫る。不妊のカップルに対しても(第三者生殖を利用しないよう)迫る。親のいない子の福祉と里親に関わる人々にも、変化を迫る。

Them Before Us のスローガンは、「大人は子供のために困難に対処する必要がある」ということ。大人は家を持たない子供に家を開放する必要がある。唯一の選択肢は大人が苦しむこと。

それは大人に幾らかのコストを負担させるが、それこそまさに大人の責任というもの。これは困難なメッセージなので、あらゆるところに反対派を見つけることができる。

**Q. ホームページには、どのような人からコンタクトがきますか？**



ウェブページを通して連絡をとってくる人たちは皆素晴らしい。6つの大陸とすべての宗教（無神論者を含む）に支持者や援助者がいる。LGBTの人からのサポートもある。子供を守ることに関心があるすべての大人に門戸を開いているので、組織はかなり多様な人たちから構成される。家族の崩壊を経験した子供たちと、自分がしたことを後悔している大人がいる。家族の中でえた傷を共有するための、安全な場所になっている。自分が素になるためのスペースを提供する。母親/父親への渴望について正直に話す場所が他にない同性親を持つ人たちのために、非公開のグループチャットを行なっている。

あなたが子供を最優先したいなら、あなたは歓迎される。こうした環境の中で、生き抜いてきた子供たちもそこには含まれる。

**Q. カウンセラーは、親に対して、オープンドナーを使用し、子どもにはテリングをすれば、問題ないと教えています。これは正しいでしょうか？**

DC(Donor Conception)から生まれた人がこの問いに答えるのに適任だが、自分の観察では、それは、ただ親が自分の重荷を子供に移し替えただけのこと。遺伝的繋がりへの欲求は、子供に移し替えられ、子供は失われた生物学的親を探そうとするだろう。社会は、親の願望ばかりに焦点を合わせ、子供には、自分が生きていることに感謝すべきだと伝える。

‘My Daddy's Name is Donor’という大規模な調査があり、これが参考になる。このテーマでは最大の研究であり、DCから生まれた人と養子を比較している。この結果が示すのは、養子の方が大抵、より良いということ。DCから生まれた人も養子も、共に親から傷を与えられているが、DCから生まれた人は、その結びつきを断った張本人の

大人といっしょに住んでいる。養子の場合、成長の過程で悲しみと切望を感じるとしても、養親は自分を遺棄した張本人ではない。だから養子は、自分の喪失をオープンに嘆くことができる。

子供たちが両親をどれだけ信頼しているか、そして彼らが遺伝的両親と一緒にいる他の子を見るときにどれほど悲しんでいるかに関する心理学の調査結果では、しばしば養子の結果の方が良い。養子もアイデンティティの問題を持っているが、それについて両親と自由に話すことができる。

**Q. 昨今、大勢の出生者の方が自分の経験を語っています。非常にネガティブなものから、ポジティブなものまで幅があります。どのような要因が関係していますか？**

Them Before Us は、母親や父親を失い、傷ついた子供たちのためのスペースをぜひとも作りたい。大人の選択を支持する声をどこに行っても見つけることができる。それに対し、もし傷ついた子供たちが Them Before Us に来て自分の物語をシェアするなら、それまで聞かれるチャンスがほとんどなかった、沈黙を破る声になる。彼らは、もし公の場で自分の真実の気持ちを吐露すれば、家族や仕事を失うだろうと感じている。

さまざまな喪失のカテゴリーを通して観察した結果、一つの類似点は、多くの場合、子供が痛みを受け入れるのは、家を出て家族から離れて約 10 年たった頃、または結婚するか、自分の子供を持ってから。子供たちが家に住んでいる間は、当然、依存と防衛がある。しかし、家を去った後、両親が揃っている他の子供たちが持っていて、自分が持っていないものを直視する。

DC コミュニティが、現在、声をあげようになっている。コミュニティが組織され、活発になってきている。

**Q. 出生者で、声をあげて反対している人はごく一部だとみることができます。これについてはどのような感触を持っていますか？**

本の最初に、「高くつく物語」という序文の中で、そのことについて書いた。どのように育てられたのか（同性の両親、シングルマザー、離婚によって片方の親と別れた）について話すことのコストは何か？両親の決定が子供にどのような影響を与えたか？真実を口にする、それは、両親との関係を維持したい場合、おそらく家族の夕食のテーブルで話されることはない。それに対して、オンラインで、匿名で自分のストーリーを伝えることは、コストが低い。

この考えに反対を表明する人々（すなわち、自分の育ちに満足している人）は、自分の周りの人々からの愛と肯定を強調する。そういう人は、喪失感を感じる人よりも、失うものが少ない。

**Q. ドナー・リンクシステムや遺伝子検査は、出生者にとって救済策になりますか？ donor-siblings と繋がることで、家族のような親密性を体験することができますか？**

これについて個人的に話すことはできないが、書籍にはこれを列挙したセクションがある。ドナーきょうだいと会うことを熱望している子供たちもいる。しかし数十人ものドナーきょうだいがいることがわかって、圧倒されることもある。遺伝的繋がりには子供にとって重要で、それが商品化されることで親と子は分断される。

遺伝子検査は役に立つが、精子提供は単なる取引で、その後、一切関係ないと思っていた大人たちにとっては災いだ。子供たちが医療情報やドナーとの関係を求めて遺伝子検査に手を差し伸べるとき、それは親にとって大きなショックになる可能性がある。

**Q. 国際機関の子どもの権利をめぐる動きについて、コメントはありますか？**

これについて具体的にコメントするのに十分な専門知識がない。しかし、この分野での議論の多くは「子どもの権利」に関するものではないと思っている。実際には親の欲望だ。子どもの権利条約（世界で最も広く批准されている条約の1つ）を検討すると、生存権と両親を持つ権利が書かれている。これを2人の親を持つ権利と解釈する人もいる（実際には誰でも構わない）。しかし、これは単に条約を親の欲求に合わせるものであり、本来の意図を無視している。進歩的な家族の概念が、そこに読み込まれようとしている。

子どもの権利という言葉が偽善化するのを止めたい。親が望むものを手に入れるために親の優先事項が密輸されるような形で使用されるべきではない。

**Q. 子どもが欲しいという親の欲望をどのように抑制するべきでしょうか？**

性的指向に関係なく、大人は子供に犠牲を強いるべきではない。これは、不妊の問題を持つ人、同性愛者、結婚生活に問題を抱える人、パートナーのいない人にも当てはまる。色々な状況の中で、常に誰かが困難なことをしなければならぬが、なぜ最終的に子供たちがその困難を引き受けなければならぬのか？私たちがこの困難を子供たちに負わせ、それを進歩と呼ぶのは馬鹿げている。

レズビアン両親は父親の重要性を認識し、積極的に父親にアクセスできるよう努めてくれた。どちらも父親の代わりになろうとしなかった。両親は父親の貢献を十分に認め、評価していた。時々、両親と違った意見を持つこともあるが、自分の擁護活動について家族の中で根本的な摩擦はない。



**Q. 遺伝的つながりがなくとも共に生活していれば、家族であるとも言われます。親子関係にとって遺伝子は最も重要なことでしょうか？**

それは最も重要なものではない。それを定量化する方法はわからない。しかし、自分が研究から知ったのは、生物学的な親子のつながりが、子供を安全で愛されていると感じさせるのに最も効果的であるということ。統計的に、彼らが安全で愛されている可能性が最も高い場所は、結婚した異性愛者のカップルの家。

養親候補の親が養子縁組をする前に、数か月のチェックと調整期間を取る。しかし、これは、生殖補助医療を使用する場合など、他の形態の非伝統的な家族には当てはまらない。遺伝学は最も重要な側面ではないが、統計的に最大のセーフカードであるといえる。

遺伝的つながりはまた、子供たちに生物学的アイデンティティを与える。DCに関する調査を見ると、多くの子供たちがドナーについて知りたがっている。子供たちは、答えを得られない問いを抱えている。

**Q. 精子提供で親になるレズビアンカップルが増えています。そのようなレズビアンカップルに育てられることは子供にどのような影響がありますか？**

複数のマイナス面がある：

- 1) 子供は常に親の喪失というトラウマに苦しんでいる。この世への参入はトラウマフリーではなかった。これは、親の死、離婚、遺棄や養子縁組を経験した人、精子提供や代理出産などの生殖補助医療を使用して生まれた人も同じ。
- 2) 少なくとも1人の生物学的親が不在である。
- 3) 家庭におけるジェンダーバランスの欠如。子供たちは両方の性別からの愛を切望する。そうでなければ、

子供は母親/父親に対する渴望を経験する。男性と女性は異なっている。男女の違いは家庭で最も強く示される。これらの生物学的な違いは、ホルモンとそれらが脳をどのように形作るかに関連している。母親は安全性、公平性、細かい技能に強みがあり、父親はリスクテイク、全体的な運動能力、身体性などの分野に強みがある。これは普遍的に観察される。どちらかの親を持っていない子供は、失われた親を渴望している可能性がある。

**Q. 親が同性カップルで、DCに反対している人はいますか？**

今まで、代理出産で生まれ、ゲイカップルの父親を持つ人とは接触していない。しかし、レズビアンで育った人や精子提供によって生まれた人なら知っている。

自分の擁護活動について話すことができている。生殖補助医療の使用に必ずしも直接関係しないトピックについても話すことができたことに特に感謝している。Them Before USは特定の大人のグループに焦点を当てていない。すべての大人が子供のために犠牲を払うべき。米国の家族の最悪の状態は、主に同性カップルによるものではなく、異性愛者のカップルの失敗によるもの。

(2022年2月)

## Ms. Katy Faust

同性婚に反対する活動家。  
子どもの権利を守るために団体 **Them Before US** の創設者であり、ディレクター。自身の遺伝的母親と父親が離婚し、その後、レズビアンの母親二人に育てられた。

### 著書



K. Faust, S. Manning, R. George. *Them Before Us: Why We Need a Global Children's Rights Movement*. 2021 New York: Post Hill Press.